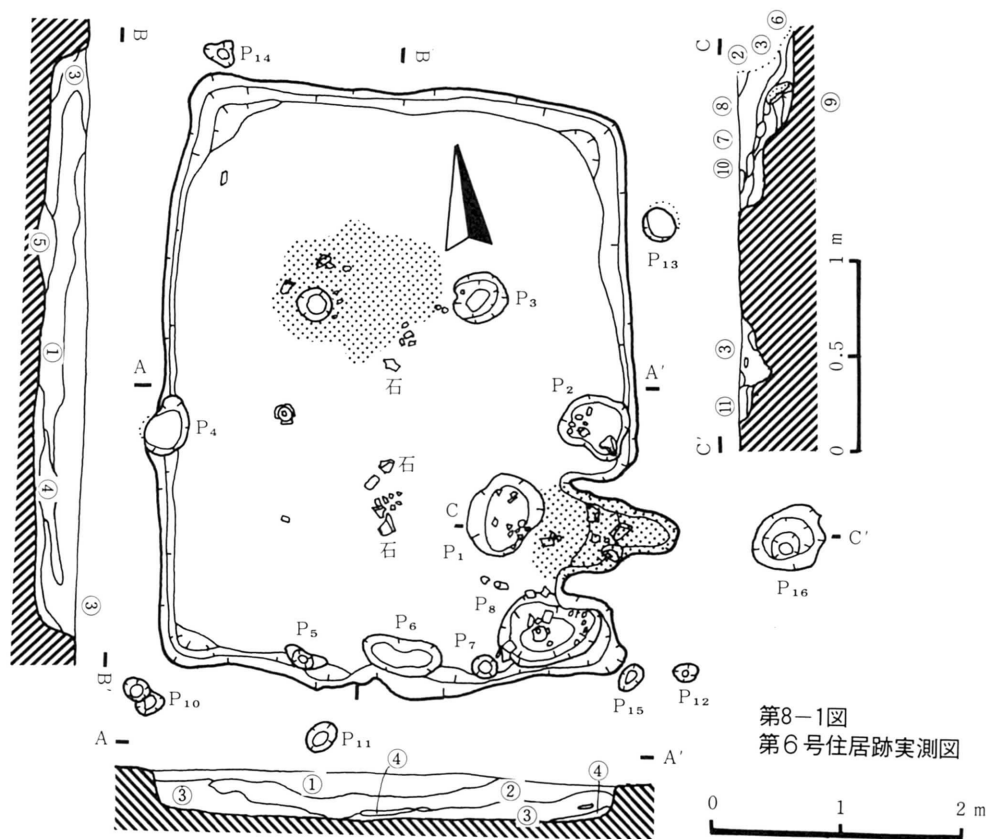


図版7-3 Aho6 堅穴住居跡出土遺物

No. 114 は、床面出土。磨滅が激しく、ひび割れが入っている。頸部から口縁にかけてのたちあがりがあるが他の甕と若干異なる。混入物を多量に含む粗雑な胎土であるが、焼成はそう悪くはない。No. 115 は、住居跡内ピットからの出土。巻き上げ後にロクロで仕上げたものである。色調はにぶい黄橙色を呈し、土師器として区分されたが、灰白色に近い部分もあり、硬質の甕である。胎土中には粗砂・石英細粒等を含むが、緻密でよくしまっている。No. 116 は、住居跡内ピットからの出土。巻き上げ後にロクロ調整を加えたやや小型の甕である。外面は磨滅が激しいが、もともと雑な成形による結果ともとれる。内面は残りが若干よく、ロクロナデ痕が観察される。石英・砂粒を含む粗雑な胎土で、焼成は普通の仕上がり。No. 117 は、巻き上げ後にロクロ調整を加えた甕である。内面は磨滅しており、ロクロナデ痕は消え去っている。外面体部の中央より下方にかけて、縦方向に細石の移動痕があり、本来的には篋削り仕上げによるものと思われるが、その単位は不明である。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈しており、一部には黒色変化の跡もみられる。No. 118 は、埋土中出土。外面の体部凹凸痕が顕著に残り、また、中央より下方にかけて篋削りの痕跡が確認されるが、単位の正確な範囲はつかめない。内面は比較的平滑に仕上げられている。色調は全体的に黒ずんだ感じであり、胎土中には細かい石を多量に含むが、焼成は良好である。



第8-1図  
第6号住居跡実測図

堆積土層一覧表

堆積土色		備 考	堆積土色		備 考
① 黒褐色土	10Y R ⅔	粘土粒・炭化物混入	⑦ 暗赤褐色焼土	2.5Y R ⅔	カマド部、固く締まっている
② 黒褐色土	10Y R ⅔	粘土ブロック多量混入	⑧ 赤褐色焼土	2.5Y R ⅔	カマド部、固く締まっている
③ 黒褐色土	10Y R ⅔	焼土・粘土粒混入	⑨ にぶい赤褐色	2.5Y R ⅔	カマド部・特に固い
④ 黒色土	10Y R ⅔	部分的にみられる	⑩ 明黄褐色シルト	10Y R ⅔	カマド上部構造か?
⑤ 暗赤褐色焼土	2.5Y R ⅔	炉址部か?炭化物多い	⑪ 褐色土	10Y R ⅔	幾分焼土混入
⑥ 明黄褐色粘土	10Y R ⅔	シルトとの混土	ピット堆積土	黒色土・暗赤褐色土・黒褐色土	

6号竪穴住居跡 (Aj 50住) 第8-1図

〔平面形〕 南北に長軸を持ち、幾分隅丸を呈した長方形プランを示す。

〔断面形〕 各壁のそれは、いずれも床面から垂直に立ち上がり検出面に続く。

〔堆積土〕 黒褐色土と黒色土から構成されるが、その土質が異なる事から、さらに4~5層に細分される。混入物は粘土ブロック・焼土・シルト等が見られる。

〔床 面〕 基本層Ⅲ・橙色シルト質土を床面としている。但し部分的に3~5cm位の厚さで、黒褐色土と粘土の混土を敷詰めて貼床としている部分も確認された。また北壁寄り部分が



ら約 120 × 95cm位の床面焼成痕を確認した。遺物等を出土するが、その性格は明らかでない。

〔カマド施設〕 カマドは、東壁南寄りに位置する。その燃焼部の規模は約55cm径であり、焼け固まった焼土が約4cm位の厚さで確認された。その両側には粘土を主体とし、その上部をシルト質土で被覆した袖が確認された。燃焼部の中央からは、支脚用と思われる角礫を検出した。煙道は壁に沿って急な角度で立ち上がり、明らかに燃焼部と区別される。幅約34cm・長さ約35cm位で、その先端は舌状に切れるが、その延長約54cm程の所に煙出し部と思われるピット(P<sub>16</sub>)を確認した。なお煙道から煙出し部までの構造は、調査の不手際により不明である。

〔その他の施設〕 検出したピットは、遺構内から9個、遺構外から7個の計16個を検出した。柱穴は、規模・位置・形状等から推察して4個(P<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>9</sub>)、同様に貯蔵穴様ピットは、2個(P<sub>2</sub>・P<sub>8</sub>)が考えられる。P<sub>9</sub>は焼土中から確認され、堆積土中に焼土を含む。P<sub>16</sub>は、覆土中に焼土・炭化物等を含む層で構成され、煙道の延長上に位置する事なども兼ね合せて、カマドに伴う煙出し用のピットと考えられる。貯蔵穴様ピットは、カマドを中心として、その左右に位置する。他のピットについての性格は、現在明らかでない。なお柱穴は南壁に寄って確認された。

第5表 住居跡内ピット計測値他一覧表

No.		径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆 積 土	No.		径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆 積 土
1	廃棄	50 × 62	7	楕円形	暗赤褐色土・黒色土	9	柱	22 × 25	20	楕円形	暗赤褐色土・暗褐色土
2	貯	50 × 45	8	楕円形	黒色土	10		30 × 17	14	不整形	黒色土
3	柱	41 × 40	14	楕円形	黒色土	11		20 × 20	12	円形	暗褐色土
4		28 × 47	9	楕円形	黒色土	12		18 × 12	6	楕円形	暗褐色土
5	柱	25 × 20	20	楕円形	黒色土	13		22 × 27	29	楕円形	黒色土
6		55 × 30	16	不整形	黒褐色土	14		21 × 19	9	楕円形	暗褐色土
7	柱	16 × 16	21	円形	黒色土・暗褐色土	15		15 × 18	9	楕円形	黒色土
8	貯	62 × 50	17	楕円形	黒色土・暗褐色土	16	煙出し	54 × 48	11	楕円形	赤褐色焼土・暗褐色土

出土遺物 第8-2図

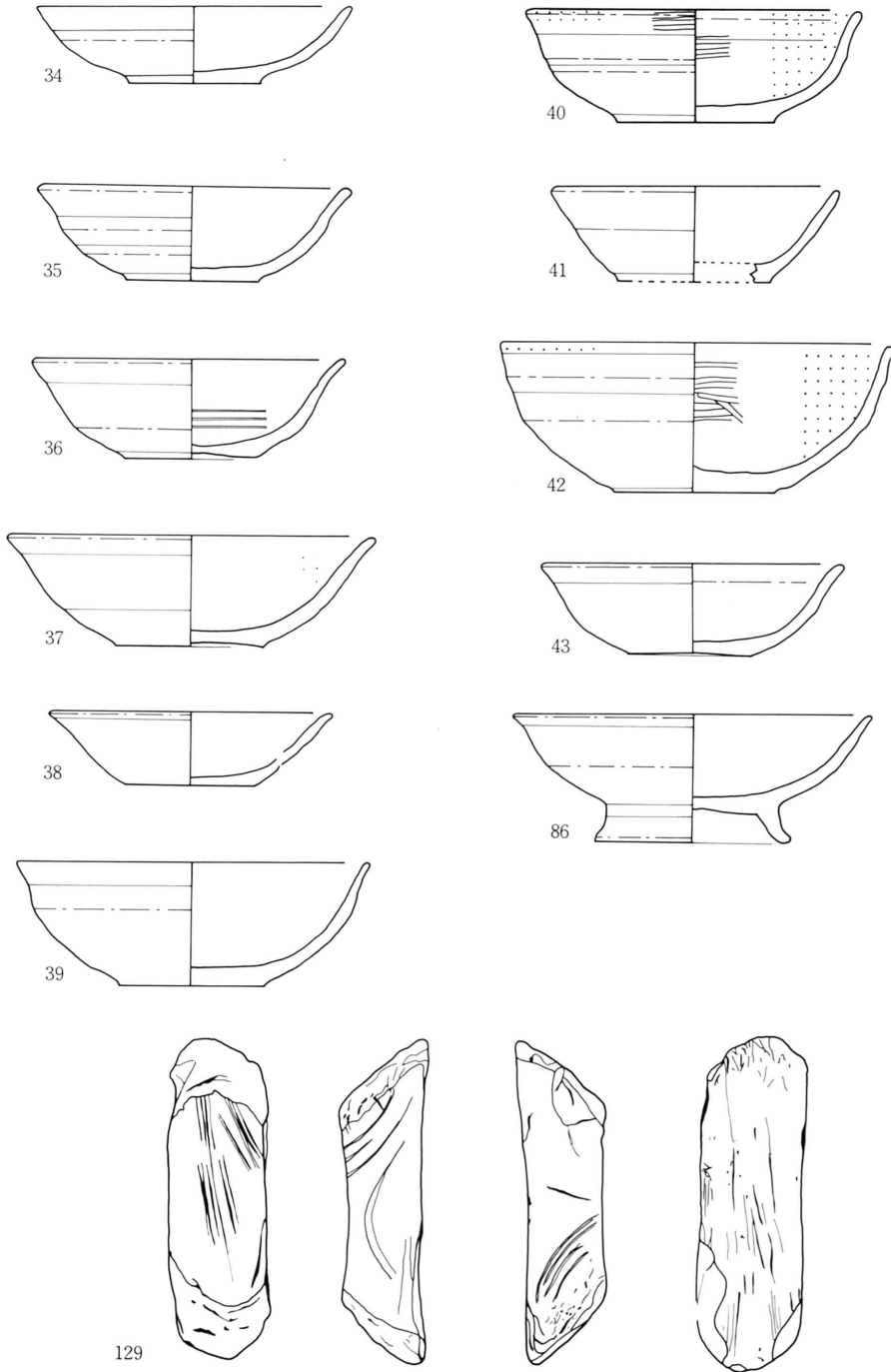
(1) 坏型土器

B類8点、C類2点、高台付坏1点、計11点の出土。

B類は、No.34 (写真No.43)、No.35 (写真No.44)、No.36 (写真No.45)、No.37 (写真No.46)、No.38 (写真No.48)、No.39 (写真No.49)、No.41、No.43である。

No.34は、埋土中からの出土。回転糸切無調整。内外面とも磨滅が激しい。色調は赤褐色を呈す。石英細粒・細石を混入する胎土で、焼成は弱い。No.35は、床面出土。ロクロ成形痕が明瞭な回転糸切無調整の坏。色調は明黄橙色を呈す。細粒石を混入するが、B類としては良質な胎土。また、焼成については、ひび割れの跡に沿って簡単に剝離することができるので、かなり軟質な仕上がりである。No.36は、回転糸切無調整。No.35に近い器形であるが、内面に平行線状の条線が渦巻状に残る。明黄橙色を呈す。粗砂、細石を混入する粗雑な胎土だが、焼成は良好

— 鳥海B遺跡 —



図版8-2 Aじ50 堅穴住居跡出土遺物

0 5 10cm

である。No.37は、回転糸切無調整。床面出土。明黄橙色を呈し、石英細粒、細石等を含む粗雑な胎土であり、焼成も弱い。No.38は、床面出土の小型坏。磨滅のため、切離し不明。内面の一部に光沢があり、炭化物の付着もみられる。赤橙色～赤褐色を呈し、胎土中に細石が若干含まれる。焼成は普通。No.39は、埋土中からの出土。後述するNo.40のC類坏に類似した器形である。回転糸切無調整。内外面とも凹凸が少ない。赤褐色を呈し、石英細粒・細石を多量に混入する胎土であり、焼成も弱い。No.41は、床面出土。全体の $\frac{1}{6}$ 程度の破片による反転復元図。切離しは底部まで欠失しているため、不明。浅黄橙色を呈し、多量の混入物を含む粗雑な胎土。No.43は、床面出土。全体の $\frac{1}{6}$ 程度の破片による反転復元図。体部上半に若干のロクロ成形痕が観察されるが、総じて磨滅の度合が激しく、残りは悪い。当然、切離しも不明である。また、胎土・焼成とも不良である。

C類は、No.40（写真No.50）、No.42の2点の出土。No.40は、埋土中からの出土で、回転糸切無調整の坏である。外面の口縁部分に黒色処理と篋みがきが観察される。また、体部には黒斑がみられる。胎土中には石英粒、細石を混入するが、総じて悪いわけでもない。焼成は比較的良好。No.42は、埋土中からの出土で、全体の $\frac{1}{6}$ 程度の破片。外面の口縁部にも黒色処理が及ぶが、篋みがきの単位は確認されない。外面は明黄橙色を呈す。石英細粒・細石を混入しており、C類としては胎土が悪い。焼成はやや軟質。切離しについては磨滅のため不明である。

No.86（写真No.51）は、高台付坏である。カマド付近からの出土。内外面に器面調整を施さないもので、いわばB類の範疇として捉えられるべきものでもある。回転糸切と思われる切離し後に高台部分を付けたもので、この部分は強く外反する。石英細粒・細石を混入する粗雑な胎土で、焼成も弱い方である。推定口径 14.4 cm、器高 5.1 cm、底径 6.9 cm、脚径 7.9 cm 大である。

## (2) 甕型土器

完形品のものではなく、全て破片だけである。床面上からは土師器、須恵器片が出土しているが、大半は土師器である。土師器はロクロ成形で、外面に篋削りを施す体部片が多く、須恵器の2片は外面に格子状の叩目を有している。

## (3) その他

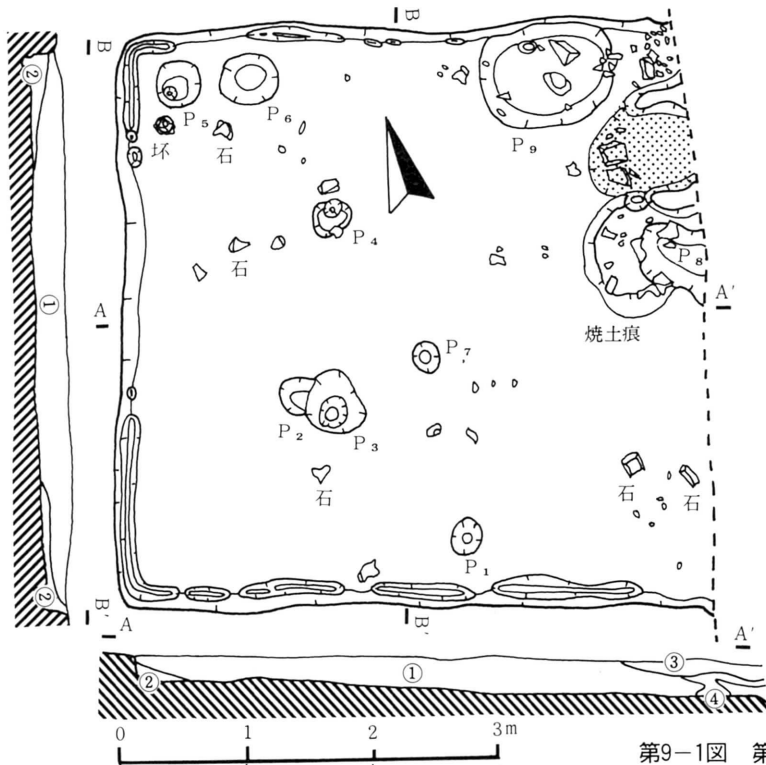
No. 129（写真47—A・B）の砥石がある。凝灰岩質のもので四面とも使用されている。縦19.5 cm、横6 cm、厚さ4.5 cm位の大きさである。

## 7号竪穴住居跡（Bd 03住） 第9—1図

〔平面形〕 東壁が空壕跡によって壊され、全容が明らかでないが、残存する壁のコーナーは、幾分角張り、方形状のプラを呈す。

〔断面形〕 残存する南北および西壁の断面は、床面から垂直に立ち上がり検出面に続く。

〔堆積土〕 黒色土の単層で構成される。但し壁際のそれには粘土ブロックが混入する。



堆積土層一覧表

堆積土色	備考
① 黒色土	粘土粒炭化物混入
② 黒色土	粘土ブロック混入
③ 黒褐色土	空壕攪乱
④ 黒褐色土	空壕攪乱
ピット堆積土	
黒色土 P <sub>1</sub> ~ <sub>9</sub>	
暗褐色土 P <sub>5</sub> ・ <sub>6</sub> ・ <sub>9</sub>	

第9-1図 第7号住居跡実測図

〔床面〕 基本層Ⅱ・橙色シルト質土を床面とするが、その上部に約3～5cm程の厚さで粘土と黒色土を貼り、生活面としている。床面は、ほぼ平坦に構築している。

〔カマド施設〕 カマドは、東壁北寄りに確認されたが、煙道・煙出し等については空壕によって壊され、その存否は不明である。燃焼部分は、径が約55cm位で、焼土の厚さは4cm程であった。燃焼部の両側には、粘土を主体として、その上部をシルトで被覆した袖が確認されたが、一部壊されている。なお支脚用の礫を検出した。

〔その他の施設〕 検出した大小ピットは、すべて遺構内からで、9個確認した。そのなかで、規模・位置・形状等から柱穴と推察されるピットは2個(P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>)、また同様に貯蔵穴様ピットとして考えられるもの2個(P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>)を確認した。柱穴は床面のほぼ中央に配置されているが、対となるピットは検出されなかった。貯蔵穴様ピットは、カマドを中心として左右に構築され、P<sub>8</sub>は東壁、P<sub>9</sub>は北壁に配置されている。周溝は、東壁を除く各壁に見られる。その規模は、幅約14cm、床面からの深さ約5cm位で、各壁の壁際に形成されている。なお、周溝内に杭状の小ピットが確認されるが、部分的なものであるため、各壁の補強用ピット、すなわち土留めの性格を持つものと思われる。

P<sub>8</sub>を取り囲む様相を呈して、高さ約5cm位の焼土粒の集積部が確認され、若干の遺物を出土するが、覆土状態からの性格はカマドからの一時的な残土集積場と考えられる。

第6表 住居跡内ピット他一覧表

No.	径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆積土	No.	径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆積土
1	24 × 24	8	円形	黒色土	6	45 × 41	12	楕円形	黒色土・暗褐色土
2	30 × (—)	6	(—)	黒色土	7	22 × 27	9	楕円形	黒色土
3 柱	42 × 46	30	楕円形	黒色土	8 貯	55 × 50	13	楕円形	黒色土
4 柱	28 × 28	25	円形	黒色土	9 貯	100 × 75	18	楕円形	黒色土・暗褐色土
5	34 × 37	9	楕円形	黒色土・暗褐色土					

出土遺物 第9—2図

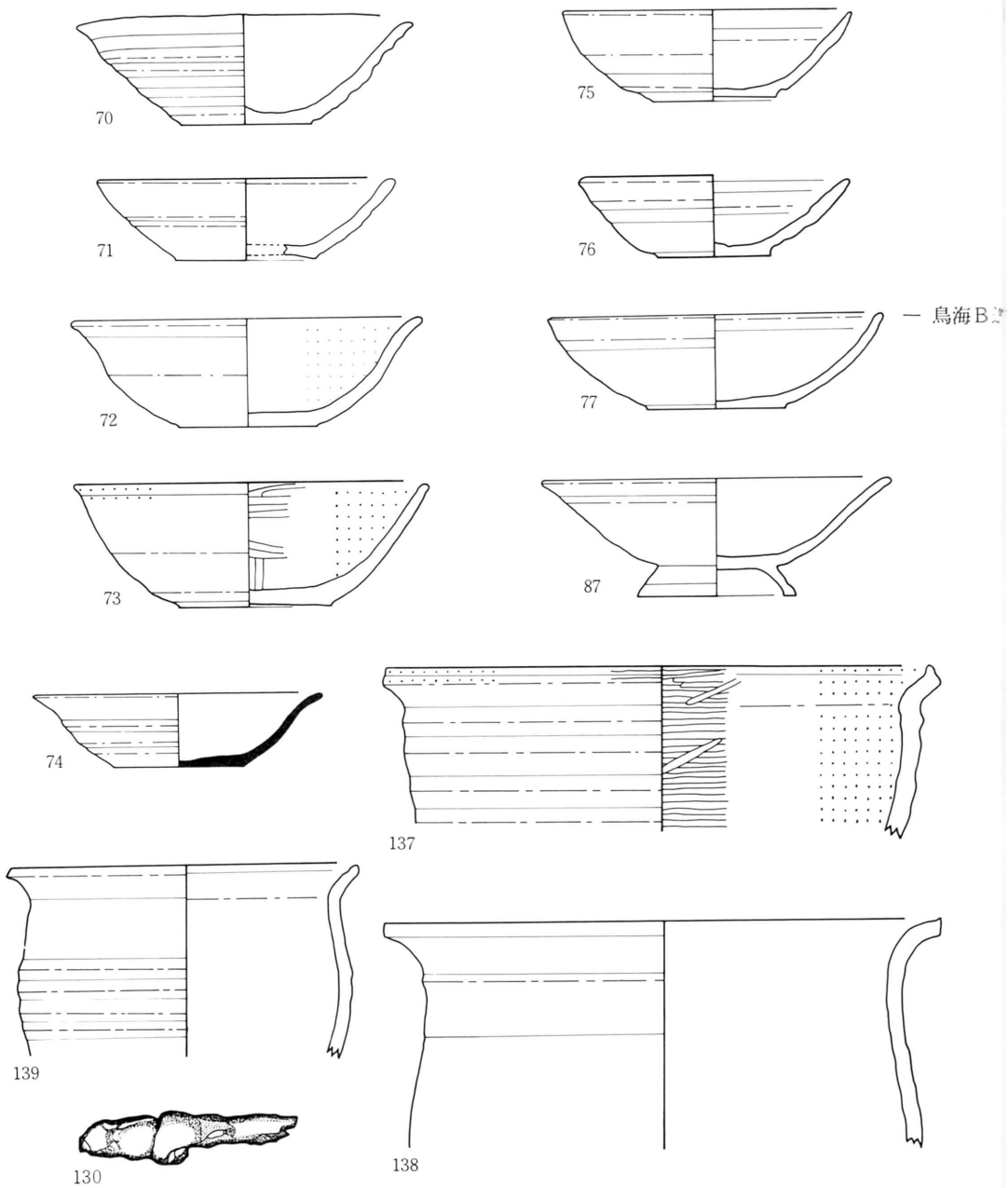
(1) 坏型土器

A類1点、B類5点、C類2点、高台付坏1点、計8点の出土。

A類は、No.74 (写真No.84)である。回転糸切無調整。全体的な色調は橙色であるが、口縁の一部が灰褐色を呈し、かなり硬質なことから、A類として分類したものである。磨滅が少なく残りがいい。内面の中央部分は若干窪み、その分だけ器肉が薄い。石英細粒、粗砂を混入する胎土であるが、焼成は良好である。

B類は、No.70 (写真No.80)、No.71 (写真No.81)、No.75 (写真No.85)、No.76 (写真No.86)、No.77の5点である。No.70は床面出土。内外面に小範囲の黒変部分がある。回転糸切無調整。胎土中に混入物を多く含むが、焼成はそう悪くない。No.71は埋土中からの出土。全体の1/5程度の破片による反転復元図である。底部は剥落しているため、切離しは不明。器高が低い割には器肉が厚い。外面の一部には炭化物が付着しており、胎土、焼成とも不良である。No.75は回転糸切無調整。体部の凹凸はあまり目立たないが、全体的に歪みがある。口縁部は外傾する部分と外反する部分とがあり、一様ではない。明黄橙色を呈しており、胎土は比較的良質であるが、焼成は軟質のようである。No.76は埋土中からの出土。回転糸切無調整。内外面に黒色変化している部分が見られる。特に内面には煤状の炭化物が付着しており、燈明皿の用途に具したものであると思われる。色調は全体としてにぶい橙色から灰褐色を呈す。石英細粒、砂粒が混じる胎土で、焼成は比較的良質である。No.77は埋土内からとNo.9ピット内出土破片の接合による反転復元図。回転糸切無調整。部分によって厚さが異なり、雑な作りである。体部は若干のふくらみをもってたちあがる。細石を混入するが、全体としては良質な胎土。焼成はやや弱い。

C類は、No.72 (写真No.82)、No.73 (写真No.83)の2点。No.72はカマド部と埋土部出土の破片を接合したものであるが、全体の1/5程度しかなく、計測値は使用に耐えない。切離しは、回転糸切で無調整と思われる。内面の篋みがきは磨滅のため単位不明。粗砂を多く含む粗雑な胎土であるが、焼成は良好。No.73は床面からの出土。回転糸切無調整。外面の口縁部まで黒色処理が及ぶが、篋みがきの単位はみられない。内面の篋みがき痕は、底部周辺では縦方向、体部にあっては横方向に走る。胎土、焼成とも比較的良質である。



図版9-2  
Bdo3 竪穴住居跡出土遺物

0 5 10cm

高台付坯は、No.87(写真No.87)である。床面とカマド部出土の破片を接合したものであり、内面に器面調整を持たず、本遺跡内のB類の範疇にもかかるものである。器肉は薄めであり、底部近くを除く体部は直線的にたちあがる。高台部は付高台であり、底部との接合部分に亀裂が入る。切離しは糸切によると思われるが、磨滅が激しく断定はできない。

## (2) 甕型土器

No. 137(写真No.88)、No. 138(写真No.89)、No. 139の3点、何れも土師器で、反転復元による実測図である。No. 137は住居跡内No.8ピット内からの出土。ロクロ成形により体部の凹凸は顕著である。口唇部分に黒色処理、篋みがき痕がみられる。内面には横位方向に明瞭な篋みがきの単位を残し、黒色処理もはっきりしている。石英細粒、雲母等を若干混入するが、胎土は良質の方である。焼成も良好。No. 138はカマド部分からの出土。ロクロ成形の口縁～体部片である。内外面とも磨滅しており、ロクロに成形痕がみえない部分が多い。推定口径24cm前後。色調は浅黄橙～淡赤橙色を呈す。石英細粒、細石を多量に混入する粗雑な胎土である。No. 139は巻上げ後にロクロ調整したものである。小型の器種で、推定口径15cm前後、頸径13cm前後である。内外面の一部に黒色変化がみられ、特に内面には炭化物が付着している。色調はにぶい褐色。石英細粒、細石混入する胎土であり、焼成は普通。

## 8号竪穴住居跡(Bd68住) 第10—1図

〔平面形〕 各壁のコーナーが弧状に形成された正方形プランを呈す。

〔断面形〕 壁の断面は、床面からほぼ垂直に立ち上がり検出面に続く。

〔堆積土〕 黒褐色土の単層で構成されるが、最下層には、黒色土と明黄褐色土のブロック層が見られる。(貼床部分)

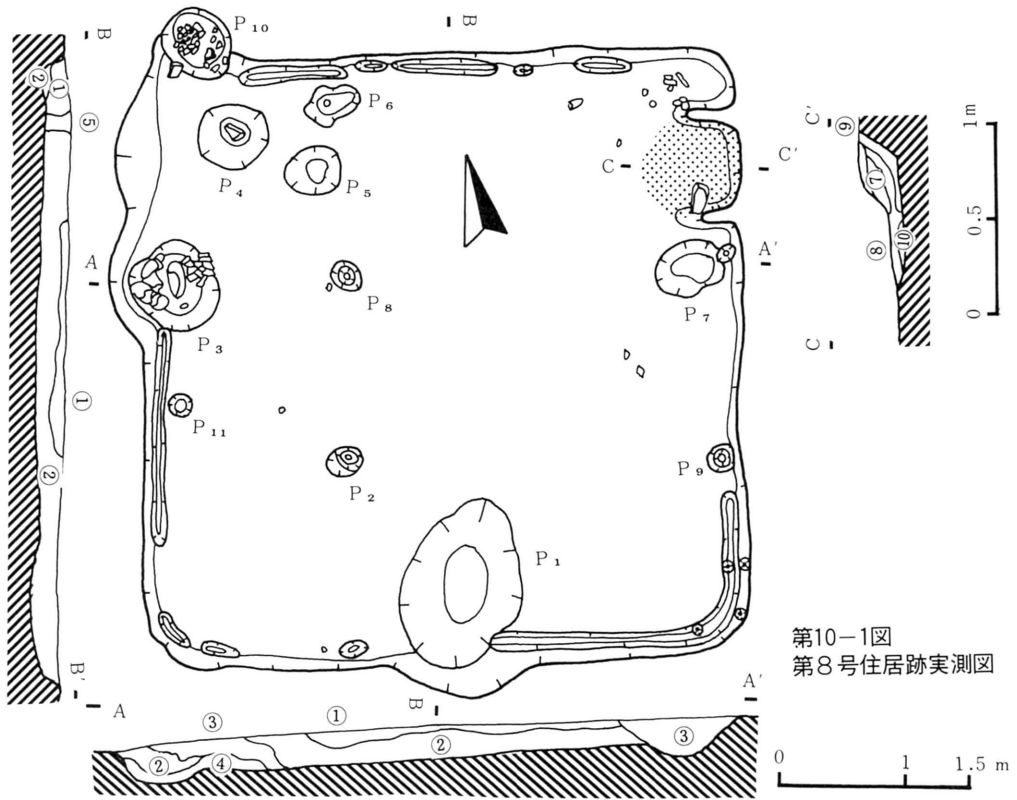
〔床 面〕 本来の床面は基本層Ⅲ・橙色シルト質土面であるが、その上部を黒色土と粘土で、約5cm程被覆して生活面を形成している。なお床面は平坦である。

〔カマド施設〕 東壁北寄りから上部施設が潰れた状態で検出された。カマドは、にぶい黄褐色土とシルト質土で構築されていたものと考えられる。燃烧部は約55cm位の幅を持ち奥行き約40cm程で、その中心部分を幾分外側にもつ。焼土の厚さは約6cmを測る。なお、焼痕は壁沿いにも見られた。袖は燃烧部の両側に、シルト質土を主体として、下部に占める粘土を被覆した状態で確認された。煙道及び煙出し等は確認できなかった。

〔その他の施設〕 ピットは、大小総計11個を検出した。そのうち柱穴は4個(P<sub>2</sub>・P<sub>12</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>)貯蔵穴様ピットが2個(P<sub>3</sub>・P<sub>10</sub>)確認された。柱穴は東壁に寄り、貯蔵穴様ピットはカマドと反対の西壁から検出された。P<sub>7</sub>は、覆土状態から攪乱と考えられる。また他のピットについての性格は不明である。

周溝は、各所でとぎれるが、各壁際に見れる。その幅は狭く約7cm程で、検出面からの深さ

— 鳥海B遺跡 —



第10-1図  
第8号住居跡実測図

堆積土層一覽表

堆積土色	備 考	堆積土色	備 考
① 黒褐色土 10Y R ⅔	粘土・シルト粒混入	⑥ にぶい黄褐色土 10Y R ⅔	カマド上部の土層
② 黒褐色土 10Y R ⅔	炭化物・シルトブロック混入	⑦ 黄褐色シルト 10Y R ⅔	カマド上部の土層
③ 黒色土 10Y R ⅔	粘土粒混入	⑧ 赤褐色焼土 2.5Y R ⅔	カマド部分
④ 黒色土 10Y R ⅔	シルトブロック混入	⑨ 黒色土 10Y R ⅔	カマド部分
⑤ 黒褐色土 10Y R ⅔	新期攪乱層	⑩ 暗赤褐色焼土 2.5Y R ⅔	焚口部分
ピット堆積土	黒褐色土(②) 10Y R ⅔	黒色土(③) 10Y R ⅔	

は約3～5cmを測る。また周溝内の数箇所には杭状の小ピットが確認され、特に南東隅に見られる小ピットは、それぞれ対になって確認された。これらは、壁を保護する為の土留め的な性格を持つものと考えられる。

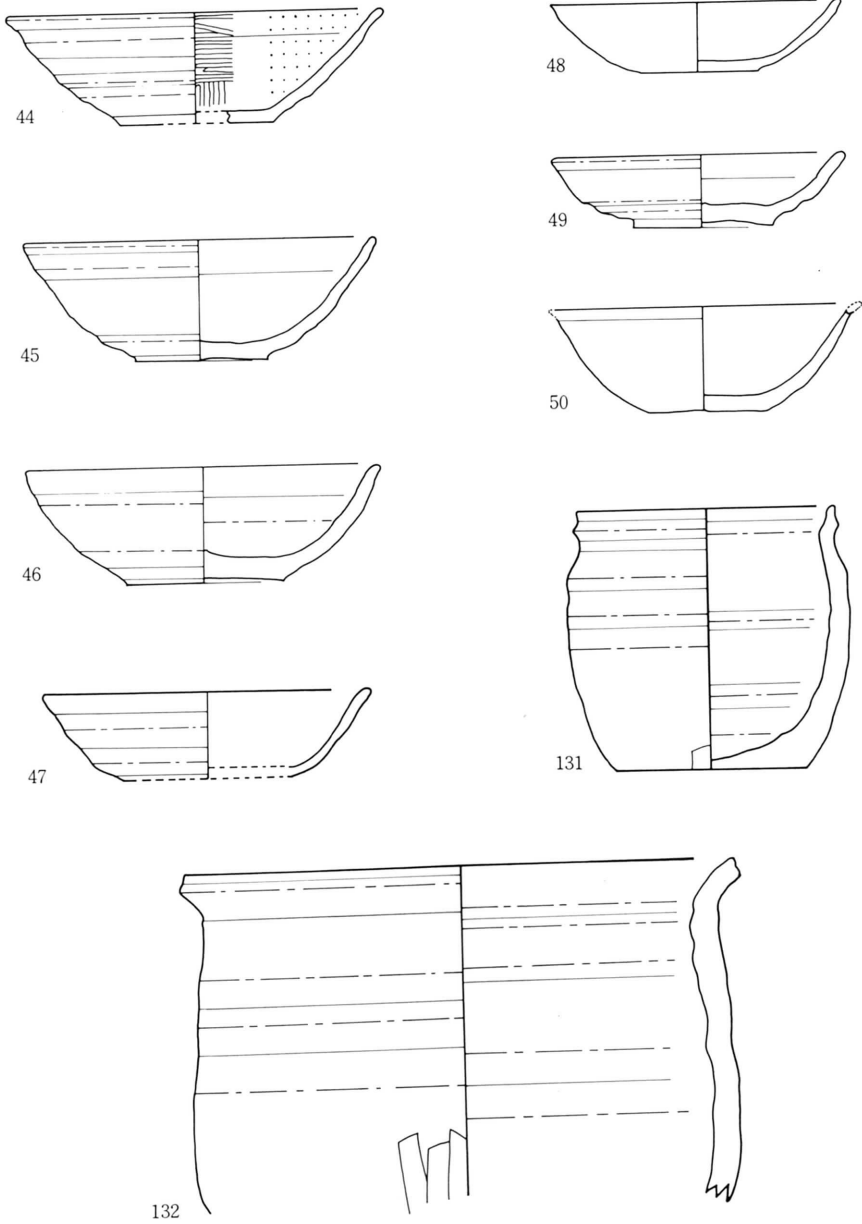
出土遺物 第10-2図

(1) 坏型土器

B類6点、C類1点、計7点の出土。

B類は、No.45 (写真No.53)、No.46 (写真No.54)、No.47 (写真No.55)、No.48 (写真No.56)、No.49 (写真No.57)、No.50の6点。No.47、50の2点は、底部が欠失、磨滅のため、切離しは不明。他の4点は、回転糸切無調整の坏である。器形・大きさとも、ばらつきのある共伴関係を呈し、出土位置は、





図版10-2  
Bd68 堅穴住居跡出土遺物



カマド・貯蔵穴に集中している。

No.45は、貯蔵穴内出土。切離しは雑だが、胎土、焼成は良好。内外面にロクロ成形痕が明瞭に残り、色調はにぶい橙色を呈す。No.46は、カマド内からの出土。細かいひび割れの痕跡が無数にあり、磨滅も激しい。内外面とも浅黄橙色を呈す軟質な感じの坏である。No.47は、床面出土。反転復元による実測であり、底部が欠失している。体部の凹凸はやや目立ち、焼成・胎土とも不良である。No.48は、カマド袖付近の出土。内外面に細かいひび割れがあり、磨滅も激しい。当然、体部の凹凸はみられず、滑らかなちあがりを示す。胎土中には石英細粒を含み、焼成は弱い。No.49は、貯蔵穴内出土。No.48と同様、小型の坏である。外面の体部下端は凹凸が目立つが、内面は滑らかである。石英細粒を含むがやや良質な胎土で、焼成もいい。尚、このタイプの坏は、No.48の坏と共に、所謂燈明皿の類いと把握されるが、灯芯痕と特に断定するだけの要素はない。No.50は、カマド袖付近の出土。口縁部分がやや欠失している。体部にふくらみを持つ土師器的な形態の坏である。磨滅のため、切離しは不明。胎土中には細かい砂粒を含み、軟質な焼成。

C類は、床面からNo.44（写真No.52）の1点が出土。全体の1/4程度の破片による反転復元である。回転糸切無調整。C類としては体部のちあがりが緩い。外面には黒斑～黒色変化があり、全体としての色調は褐灰色を呈す。黒変している部分は、本来的には篋みがきがあったと思われる。

## (2) 甕型土器

No. 131（写真No.59）、No. 132（写真No.58）、の2点。何れも床面からの出土。

No. 131は、ロクロ成形の小型甕である。回転糸切による切離し後、一部分に篋削りを加えているが、これは切離しの際に糸を抜いた部分を軽く削りとった程度のものである。外面の磨滅は激しく、その分のロクロナデ痕はみられない。内面部分については比較的残りがよく、ナデ痕が残る。また、内面の底部中央部分は窪みになっており、その分だけ器肉が薄くなっている。口径 10.3 cm、底径 7.5 cm、器高 10.3 cm、最大径は胴部にあり、11.3 cmほどである。胎土中には細石を多量に混入しており、焼成もあまりよくない。No. 132は、体部上半から口縁部分にかけての実測図である。ロクロ成形と思われ、推定口径 22.5 cm、頸径 20 cm位の大きさである。外面の磨滅が激しく、ロクロナデ痕が消えている。他の同種の甕に比して口唇部分が丸味を帯びているのが察せられる。内面には炭化物の付着がある。全体としての色調は褐色を呈し、胎土中には石英細粒・細石を混入する。焼成は良好。

9号竪穴住居跡 (Bd 74住) 第11-1図

〔平面形〕 遺構の3分の1が調査地外であるためその全容は不明であるが、検出した各壁から推察すると、隅丸の方形プランを示すものと考えられる。

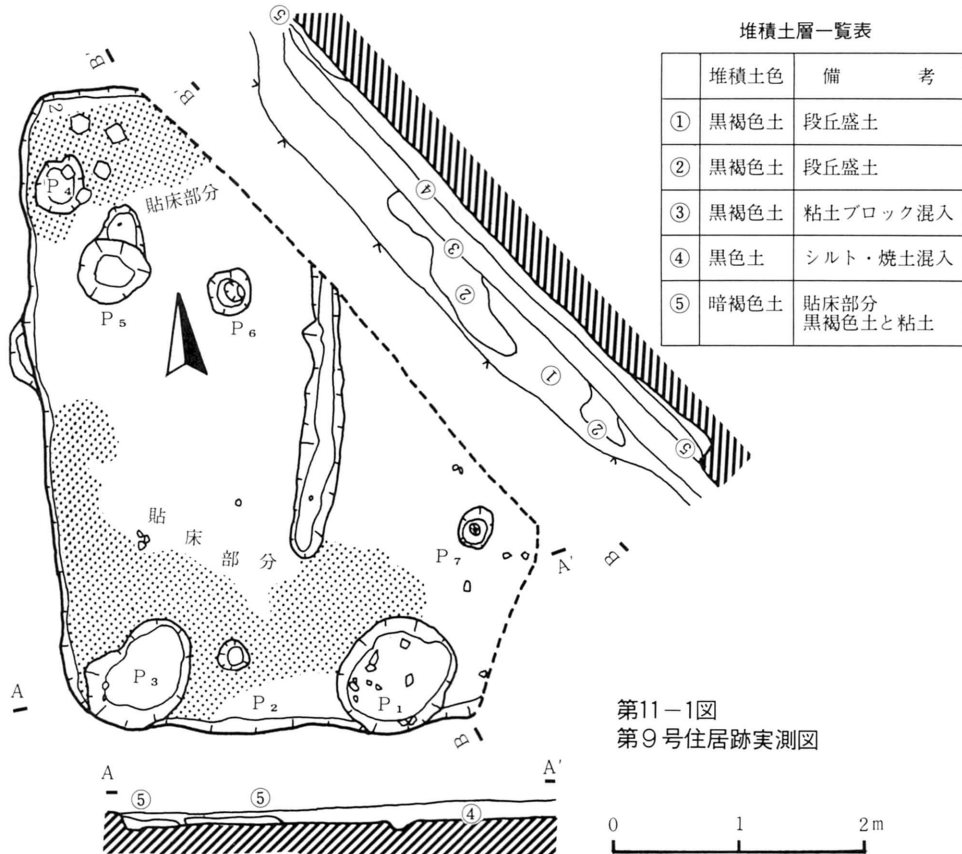
〔断面形〕 西壁・南壁のそれは、床面から垂直に立ち上がり検出面に続く。

〔堆積土〕 黒色土と暗褐色土から構成される。なお下層の暗褐色土は混土である。

〔床面〕 床面は、基本層Ⅲ・橙色シルト面と思われるが、その上部を粘土と黒色土で被覆し、貼床として生活面を形成している。また南壁から西壁にかけて約10~20cm程、掘り込まれ、埋め戻された痕跡が見られるが、その性格は不明である。なお調査地外から延びる溝と切り合うが、その新旧関係は、堆積土が貼床土質と同様であることから、当遺構形成段階に埋め戻したのと考えられ、溝が古い時期のものと考えられる。

〔カマド施設〕 不明

〔その他の施設〕 ピットは、大小総計7個検出した。そのなかで、柱穴は2個(P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>)、貯蔵穴様ピットは1個(P<sub>1</sub>)が推察される。柱穴は掘り方を持つ。貯蔵穴様ピットは、南壁際に確認された。その他ピットの性格については不明である。



第7表 住居跡内ピット他一覧表

No.	径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆積土	No.	径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆積土
1	貯 85 × 85	13	円形	黒褐色土・黒色土	5	53 × 49	16	楕円形	黒色土・黒褐色土
2	23 × 21	6	楕円形	黒色土	6	柱 35 × 35	20	やや方形	黒色土
3	75 × 80	16	楕円形	黒色土・黒褐色土	7	柱 25 × 32	34	やや方形	黒褐色土・黒色土
4	37 × 40	10	楕円形	黒色土					

出土遺物 第11—2図

(1) 坏型土器

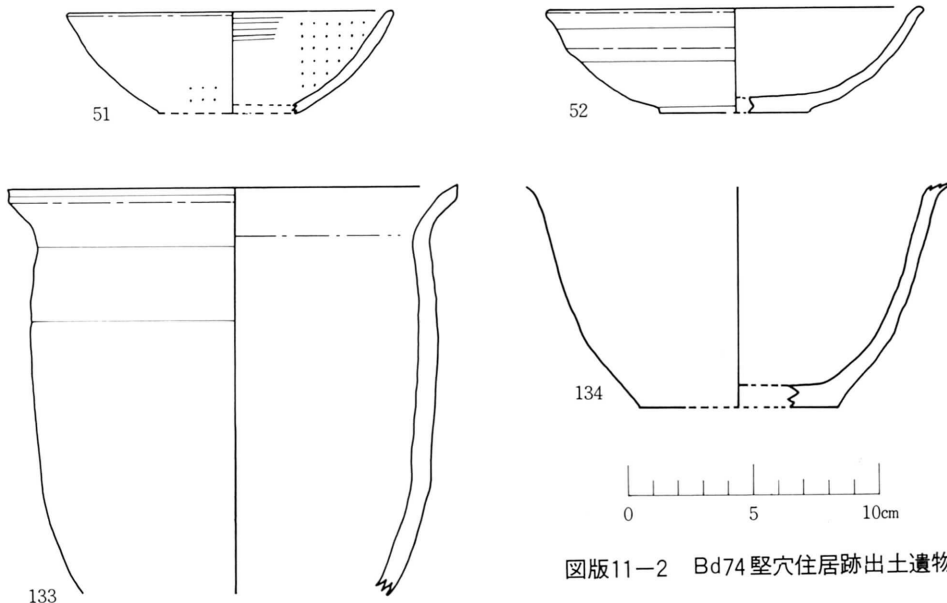
B類は、No.52が床面出土。全体の1/4程度の破片による反転復元図である。回転糸切無調整。内外面とも磨滅が激しい。淡黄橙色を呈し、粗砂を多量に混入する粗雑な胎土で、焼成は弱い。

C類は、No.51（写真No.60）が住居跡内ピットから出土。全体の1/5程度の破片による反転復元図。底部が欠失しているため、切離しは不明である。外面の一部には黒斑がみられる。混入物の少ない良質な胎土であり、焼成もC類中ではいい。

(2) 甕型土器

No. 133、134の2点。何れも土師器の甕で、反転復元によるものである。

No. 133は、床面出土。ロクロ成形によるものと思われるが、磨滅が激しい。浅黄橙～明褐色を呈し、胎土・焼成とも不良である。推定口径約18cm位。No. 134は埋土、No. 1ピット、床面等からの出土片を接合したものである。内外面とも磨滅が激しく、ロクロ成形か否かは不明である。細石、石英細粒を混入する粗雑な胎土で焼成も弱い。



図版11—2 Bd74堅穴住居跡出土遺物

10号竪穴住居跡（Bg 62住） 第12—1 図

当住居跡は、北壁・西壁・南壁の各壁際に焼土が積み固められており、それから一段下がって床面を形成している。この事から、焼失した家屋を整理し、幾分縮小した形で再建されたものと考えられる。カマドは、東壁北寄り、東壁南寄りの二箇所から確認され、遺構内から検出された大小ピットの総計は28個を数える。また柱穴・貯蔵穴様ピットにおいては、中位に厚い粘土を貼り、二度に渡って使用されているものも見られる。

以下、東壁南寄りにカマドを持つ竪穴を第10—1号住居跡（新期）、東壁北寄りにカマドを持つ竪穴を第10—2号住居跡（旧期）として説明する。また各規模等については別表参照。

第10—1号住居跡（新期） 第12図

前述のごとく当住居跡は、幾分縮小した形で再建された竪穴住居跡である。

〔平面形〕 10—2号竪穴より幾分南に片寄って構築されており、各壁のコーナーは、北東・北西部分が弧状を描くのに対し、南西・南東のそれは幾分角張る様相を呈し、その平面形は方形プランを示す。

〔断面形〕 各壁の断面形は、床面から緩い傾斜で立ち上がり、検出面に続く。

〔堆積土〕 黒褐色土と黒色土から構成されるが、下層に占める黒色土は、黒褐色土に近い明度を持つ土質である。また焼土粒・炭化物等を含む。

〔床 面〕 黒色土と粘土質土の混土で、旧床面を被覆し、生活面を形成している。なお北側部分が約3～10cm程に厚く貼られて確認された。

〔カマド施設〕 東壁南寄りから上部施設が潰れた状態で検出された。カマド本体は、断面等から粘土とシルトの混土で形成されていたものと考えられる。燃烧部は、幅約40cm、奥行約60cm程の規模を持ち、赤褐色焼土が厚く堆積して確認された。またその両側には、シルト質土を主体とし、下部の粘土を被覆した袖が検出され、袖の中には石が埋め込まれていた。煙道は、壁に沿って緩やかに立ち上がり、明らかに燃烧部とは段を持って区別される。長さ約40cm位で、その先端は舌状に切れる。煙出し部分は確認できなかった。

〔その他の施設〕 各ピットの堆積状況から14個が推察される。これらのうち柱穴は、位置・形態・規模等から4個（P<sub>12</sub>・P<sub>14</sub>・P<sub>18</sub>・P<sub>25</sub>）が推察され、同様に貯蔵穴様ピットは、東壁寄りの4個（P<sub>6</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>20</sub>・P<sub>27</sub>）が考えられる。柱穴は幾分東壁に寄っている。また、貯蔵穴様ピットは、P<sub>20</sub>を除くいずれもが、二度に渡って使用されたらしく、覆土中に厚い粘土で貼ったと思われる粘土層が見られる。P<sub>15</sub>は、深さ約8cm程の焼成痕であるが、性格等は明らかでない。またその他のピットについても不明とする。

10—2号竪穴住居跡（旧期） 第12図

〔平面形〕 幾分東西に長い隅丸の方形プランを呈す。

— 鳥海B遺跡 —

〔断面形〕 各壁の断面形は、床面からやや急な角度で立ち上がる様相を示す。

〔堆積土〕 10—1号同様であるが、壁際の焼土下に黒色土が堆積する。

〔床 面〕 基本層Ⅲ・橙色シルト面と考えられる。若干の焼土を確認した。

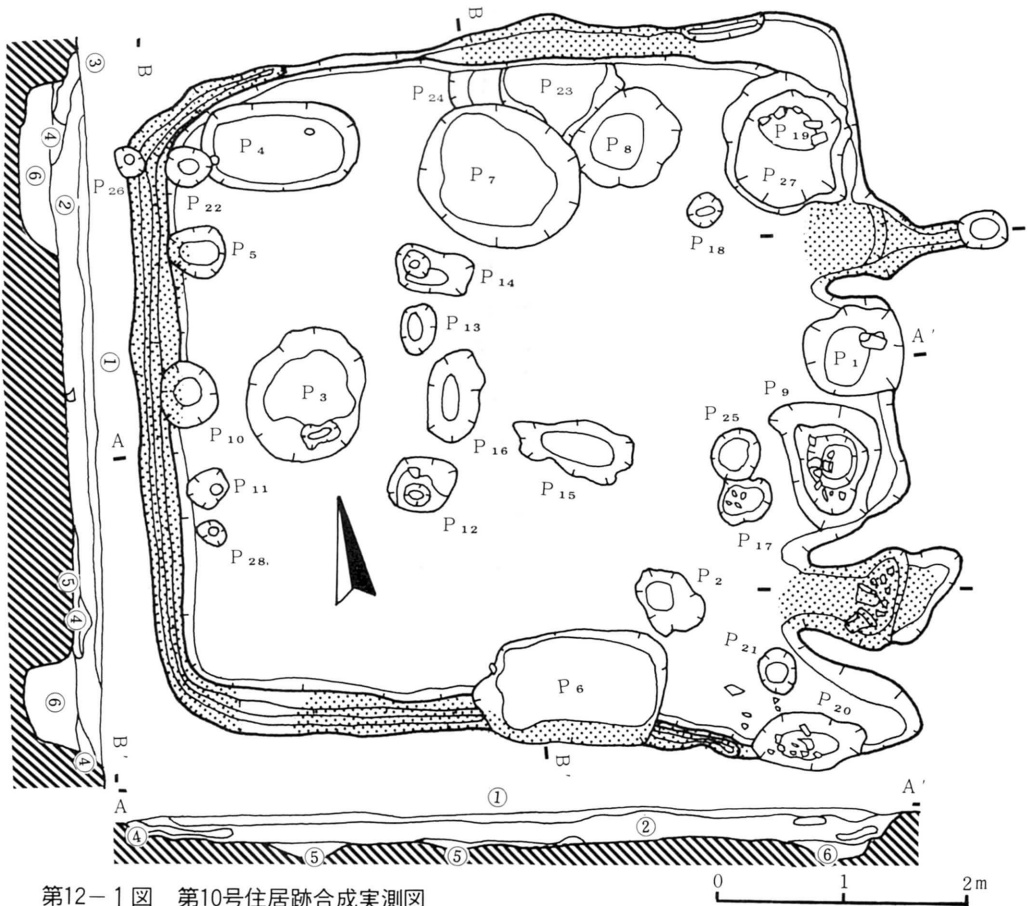
〔カマド施設〕 東壁北寄りに検出された。燃焼部は、幅約52cm、奥行約65cm程で、その焼土の厚さは約6cm位で、床面を掘り窪めて形成してあった。袖は粘土を主体として、シルト質土で被覆されて構築してあるが、北側のそれはP<sub>27</sub>によって壊されて確認できなかった。煙道は燃焼部から壁に沿って急な角度で立ち上がり、煙出しに続く。基底面には薄く焼成痕が見られた。規模は長さ約1m・幅17cm・深さ約3cm程で煙出しに向って緩い傾斜を持つ。

〔その他の施設〕 堆積土状況から明らかに13個が伴うピットと推察される。柱穴は、4個(P<sub>5</sub>・P<sub>11</sub>・P<sub>17</sub>・P<sub>21</sub>)が推察される。また貯蔵穴様ピットは、位置・規模等からP<sub>1</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>19</sub>の4個が考えられる。性格は、位置等からP<sub>5</sub>・P<sub>11</sub>・P<sub>17</sub>が主柱穴で、P<sub>21</sub>は補助柱穴と思われる。貯蔵穴様ピットは、P<sub>1</sub>を除き、いずれもが、二度に渡って使用されている。これらピットには、焼土・炭化物等が多量に混入していた。

周溝は、北壁・西壁・南壁に検出された。その規模は、幅約22cm程で、検出面からの深さは約3～5cmを測るものであり、上部に多量の焼土が見られた。

第8表 第10—1・2号住居跡(Bg 62)ピット計測表

No		径 (cm)	深さ cm	平面形	堆 積 土	No		径 (cm)	深さ cm	平面形	堆 積 土
1	旧貯	86 × 67	24	楕円形	黒色土	15	新	82 × 40	8	長方形	焼土+褐色粘土
2	新	52 × 45	14	〃	暗赤褐色焼土	16	旧	40 × 65	5	楕円形	焼土
3	新	90 × 99	12	〃	黒褐色土	17	旧柱	42 × 32	16	〃	〃
4	旧	122 × 65	22	〃	黒褐色土・暗赤褐色焼土	18	新柱	27 × 25	10	〃	黒褐色土
5	旧柱	42 × 38	10	〃	焼土・黒色土	19	旧貯	75 × 95	37	〃	黒褐色土+黒色
6	新旧貯	135 × 85	35	〃	黒色土	20	新貯	90 × 50	24	〃	黒褐色土
7	新旧貯	125 × 95	26	〃	黒褐色土	21	旧柱	30 × 30	10	円形	黒色土
8	新	66 × 80	27	〃	〃	22	新	38 × 35	7	楕円形	黒褐色土
9	新旧貯	65 × 92	22	〃	〃	23	?	?	23	?	?
10	旧	42 × 50	6	〃	暗赤褐色焼土	24	?	?	16	?	?
11	旧柱	35 × 25	10	〃	〃	25	新柱	50 × 45	17	楕円形	黒褐色土
12	新柱	55 × 42	55	〃	黒褐色土	26	カクラン	22 × 25	16	〃	〃
13	カクラン	22 × 40	4	〃	明黄褐色粘土	27	新貯	? × 94	21	〃	黒褐色土+焼土
14	新柱	53 × 30	17	長方形	黒褐色土	28	旧	20 × 15	8	〃	暗赤褐色焼土

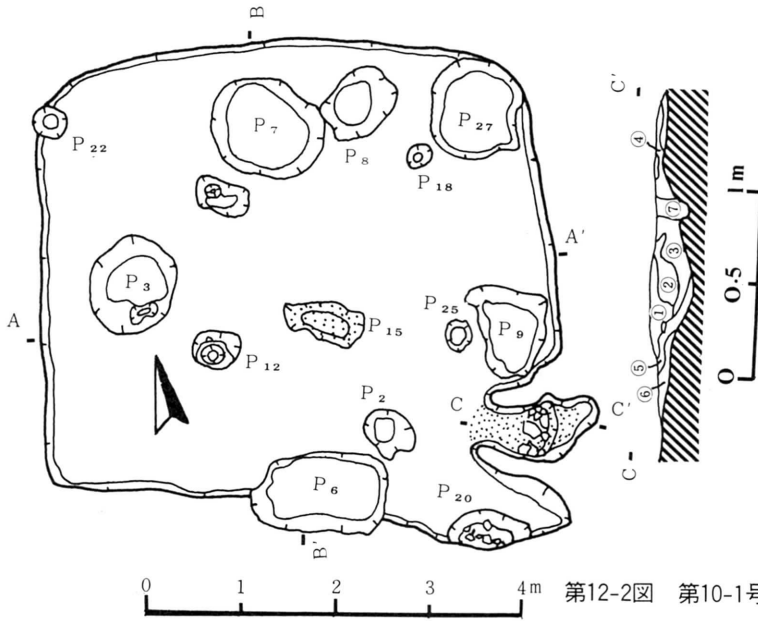


第12-1図 第10号住居跡合成実測図

堆積土層一覧表

堆積土色		備 考	堆積土色		備 考
① 黒褐色土	10Y R 2/2	新住居堆積土	④ 明赤褐色焼土	5 Y R 5/2	壁際で確認される
② 黒色土	10Y R 3/4	新住居堆積土	⑤ 黒色土	10Y R 1/4	新住堆積土か?
③ 黒色土	10Y R 1/4	旧住居堆積土	⑥ 黒色土	10Y R 2/4	旧住居堆積土か?
ピット堆積土	黒色土(10Y R 3/4・1/4)・黒褐色土(10Y R 3/2・3/2)・暗赤褐色焼土(5 Y R 3/2)				

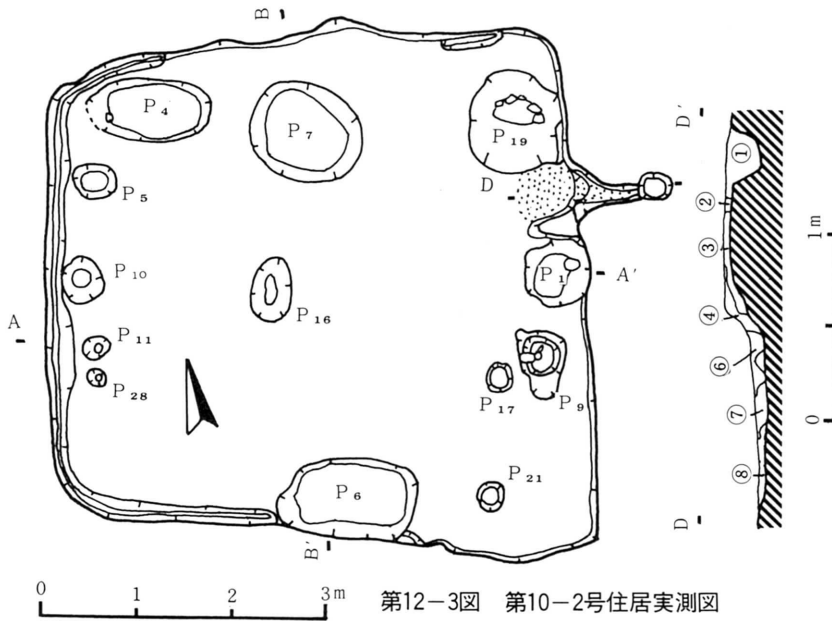
— 鳥海B遺跡 —



第12-2図 第10-1号住居

堆積土層一覧表

カマド部堆積土		
	堆積土色	備考
①	黄褐色シルト	天井部分
②	褐色粘土	天井部分
③	赤褐色焼土	燃焼部
④	暗褐色シルト	焼土混入
⑤	赤褐色焼土	焚口部
⑥	黒色土	焼土混入
⑦	黒褐色土	攪乱
ピット堆積土		
黒色土・黒褐色土		

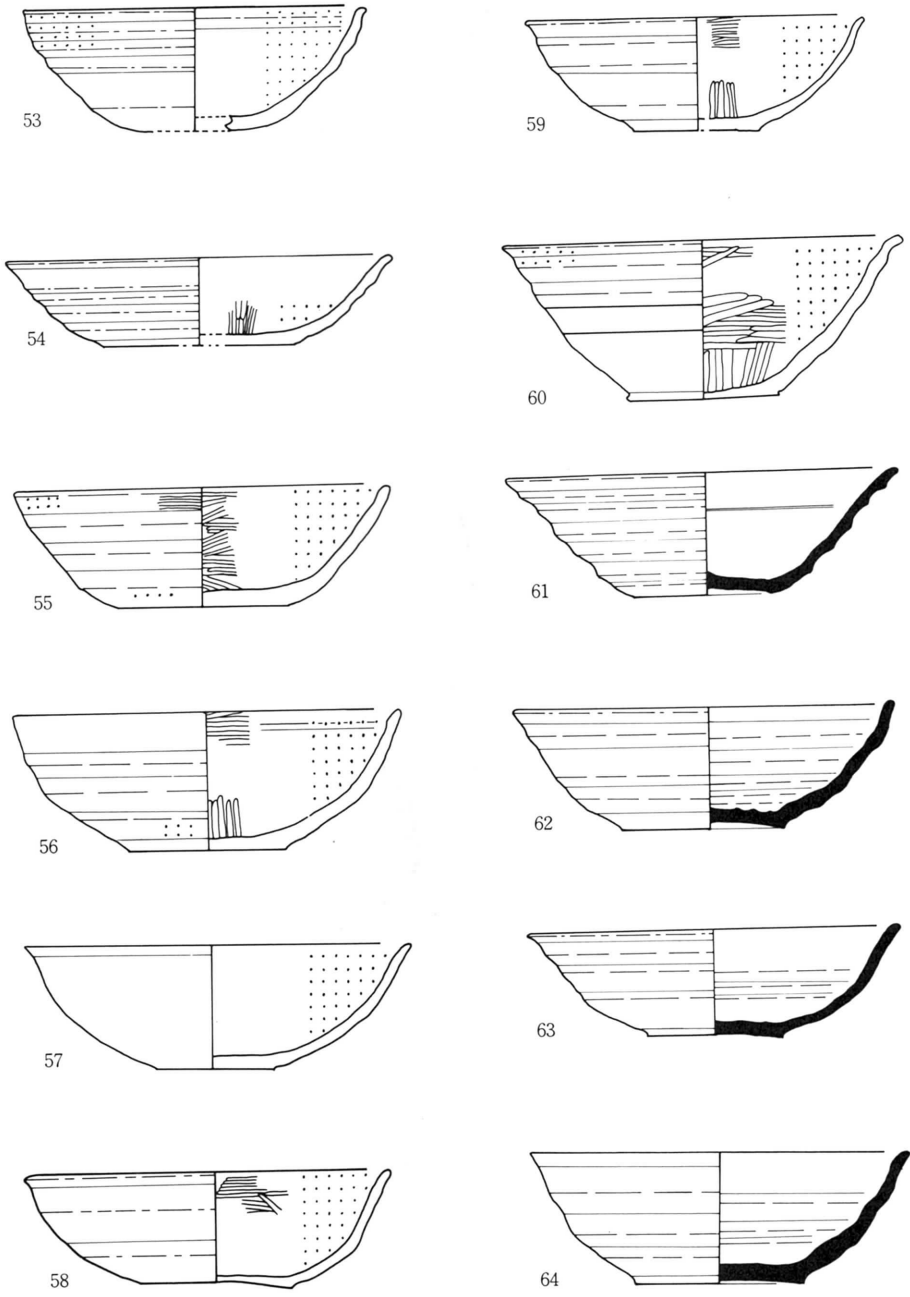


第12-3図 第10-2号住居実測図

堆積土層一覧表

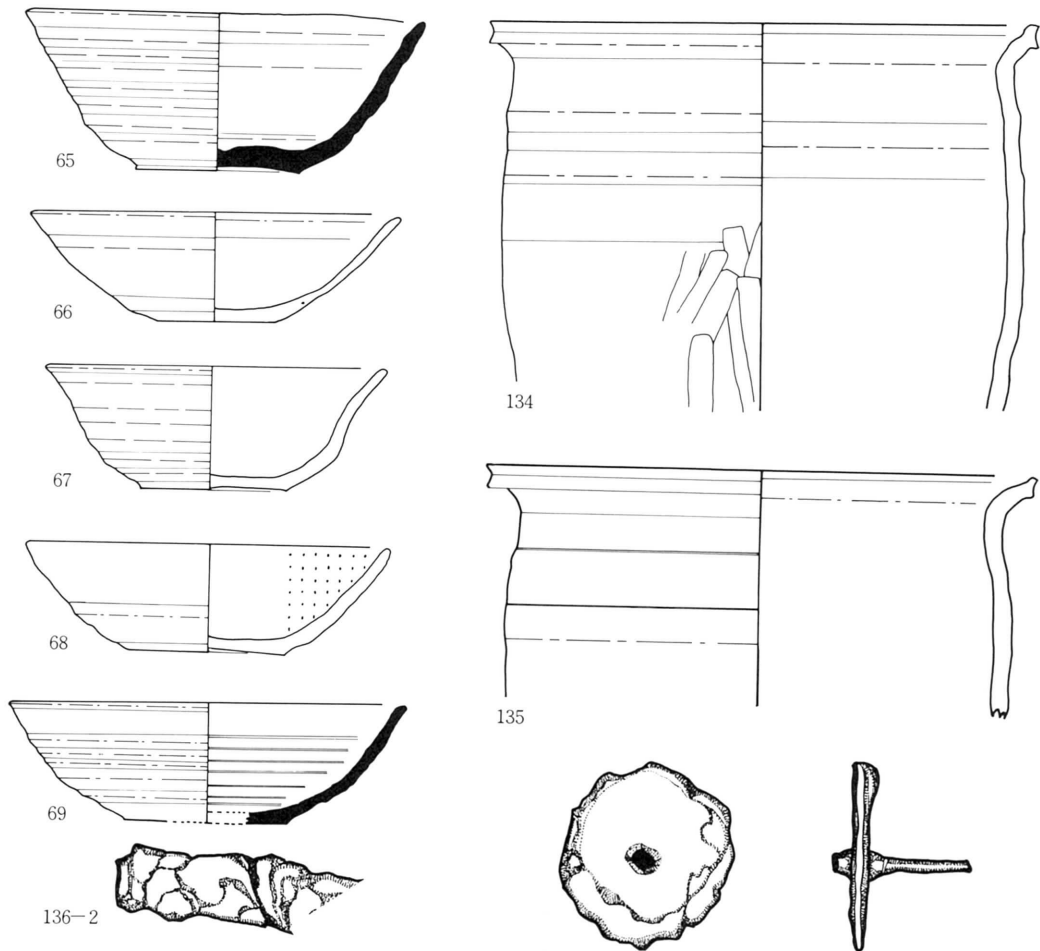
	堆積土色		備考	堆積土色	備考			
カマド部分	①	暗赤褐色焼土	5 Y R 3/3	煙出し部分	⑤ 黒色土	10 Y R 3/3	焼土・シルト混入	
	②	黒褐色	10 Y R 3/3	攪乱部分	⑥	暗赤褐色焼土	5 Y R 3/3	黒色土との混土
	③	暗褐色土	10 Y R 3/3	焼出多量混入	⑦	赤褐色焼土	5 Y R 3/3	焼焼部分
	④	黒色土	10 Y R 3/3	焼土・粘土混入	⑧	黒色土	10 Y R 3/3	粘土・焼土混入
ピット堆積土		黒色土(10 Y R 3/3・3/3)・暗赤褐色焼土(5 Y R 3/3)						





図版12-4 Bg62 堅穴住居跡出土遺物





図版12-5 Bg62 堅穴住居跡出土遺物

136-1

出土遺物 第12-4・5図

(1) 坏型土器

本遺構内に於いて最も出土数が多く、A類6点、B類2点、C類9点、合計17点を数える。

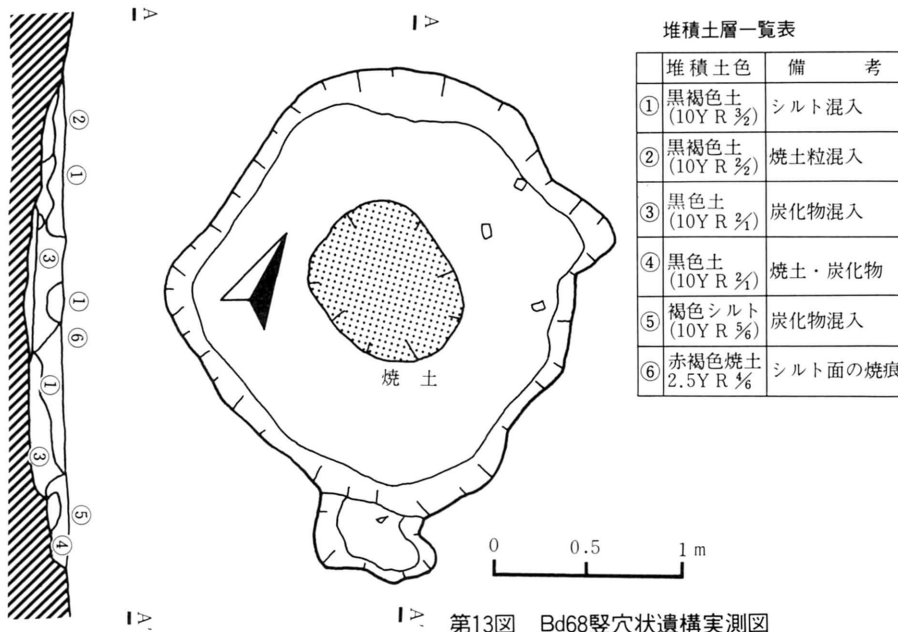
C類は、No.53 (写真No.61)、No.54 (写真No.62)、No.55 (写真No.63)、No.56 (写真No.64)、No.57 (写真No.65)、No.58 (写真No.66)、No.59 (写真No.67)、No.60 (写真No.68)、No.68の9点である。

No.53は、 $\frac{1}{4}$ 程度の破片による反転復元で、No.19ピットからの出土である。体部の凹凸が上半部分で激しく、黒色処理がその範囲まで及ぶ。しかし、内面も同様であるが、窺みがきの単位は確定できない。体部と底部との境界は不明瞭であり、口縁は直口に近い。石英・細粒石を多量に含む粗雑な胎土で、焼成もそう良いわけでもない。色調は外面の黒色処理を施さない部分

で淡橙色を呈す。No.54は、1/4程度の破片による反転復元図である。回転糸切による切離しでこの部分での再調整の痕跡はみられない。C類としてはやや特異な形態を有しており、器高が低いのが特徴である。体部の器肉部分が薄く、体部も外傾気味にたちあがる。石英、細石を混入し、C類としては胎土が非常に悪い。No.55は、住居跡内ピットからの出土である。底部面は篋みがきと思われる再調整が施され、切離し痕を消している。また、外面の口縁部分にも、1 cm位の幅で黒色処理・篋みがきが観察される。体部は直線的なたちあがりを見せ、口縁は外傾する部分と直口に近い形を呈する部分がある。混入物の少ない精良な胎土で、焼成も良好である。No.56は、住居跡ピット内からの出土。回転糸切無調整。外面底部付近に黒斑を有す。内面の篋みがきは底部周辺で放射状に、口縁付近で横位に走る。細石・石英細粒を混入する粗雑な胎土であるが、焼成は普通である。No.57は、外面全体が黒色変化している回転糸切無調整の坏である。体部にふくらみを持ち、口縁部で僅かに外反する。内面には若干の光沢がみられるが、篋みがきの単位は確定しない。胎土中には細礫・石英細粒を多量に含んでおり、焼成も良くない。

第9表 鳥海一B遺跡住居跡一覧

遺構名	辺長(m)		床面積 (㎡)	壁高 (cm)	磁北からの 振れ	柱穴 (個)	貯蔵穴 (個)	周溝 (有・無)	炉痕 (有・無)	カマド			袖 (有・無)	煙道部	
	東西×南北									(有・無)	位置	方向		(有・無)	長さ×幅×深さcm
第1号 住居跡 (Ad 21)	5.0 × 5.8		27.93	10	W-85°-S	5	5	有	有	有	南壁東寄り	南南西	有	無	
第2号 住居跡 (Ad 09)	5.0 × —	—	—	10	E-10°-S	3	1	無	無	—			無	無	
第3号 住居跡 (Ag 03)	3.6 × 3.6		12.25	10	E-23°-S	1	—	無	無	有	東壁北寄り	東南東	有	有	20 × 20 × 10
第4号 住居跡 (Ah 18)	3.7 × 4.4		16.26	10	E-1°-S	5	6	無	有	有	東壁南寄り	ほぼ東	有	有	93 × 25 × 8 ~ 10
第5号 住居跡 (Ah 06)	3.7 × 5.4		17.85	10	E-23°-S	2	2	有	無	—			無	無	
第6号 住居跡 (Aj 50)	3.5 × 4.5		14.11	25	E-13°-S	4	2	無	—	有	東壁南寄り	東南東	有	有	35 × 34 × 9
第7号 住居跡 (Bd 03)	— × 4.3	—	—	20	E-15°-S	2	2	有	無	有	東壁北寄り	東南東	有	—	空壕で破壊
第8号 住居跡 (Bd 68)	4.5 × 4.5		19.36	15	E-8°-S	4	2	有	無	有	東壁北寄り	東南東	有	無	
第9号 住居跡 (Bd 74)	— × 4.8	—	—	10	N-86°-E	2	1	無	無	—			—	無	
第10-1号 住居跡 (Bg 62)	5.3 × 4.7		22.95	15	E-12°-S	4	4	無	—	有	東壁南寄り	東南東	有	有	40 × 40 × 10
第10-2号 住居跡 (Bg 62)	5.6 × 5.3		27.22	20	E-12°-S	4	4	有	無	有	東壁北寄り	東南東	有	有	100 × 17 × 3



第13図 Bd68竪穴状遺構実測図

(2) Bd 68竪穴状遺構 第13図

〔平面形〕 各壁のコーナーが孤状に構築された方形プランを呈す。

〔断面形〕 壁のそれは、緩い傾斜で立ち上がり、検出面に続く。

〔堆積土〕 黒褐色土と黒色土で構成される。いずれの土層も不規則な堆積状況を示す。

〔床 面〕 基本土層Ⅲ・橙色シルト層を床面として、舟底状に形成している。床面中央に90×76cm径程の赤褐色を示す焼成痕が確認された。焼土の厚さは約3cmを測る。

〔その他の施設〕 南東壁に約68×40cm位の張り出し部分を持つ。この堆積土は焼土を含む黒色土で、遺構のそれと一致する。

〔性 格〕 Bd 68住(8号)に隣接することから、住居跡に伴う付属施設とも考えられるが出土遺物等が少なくあまりはっきりしない。

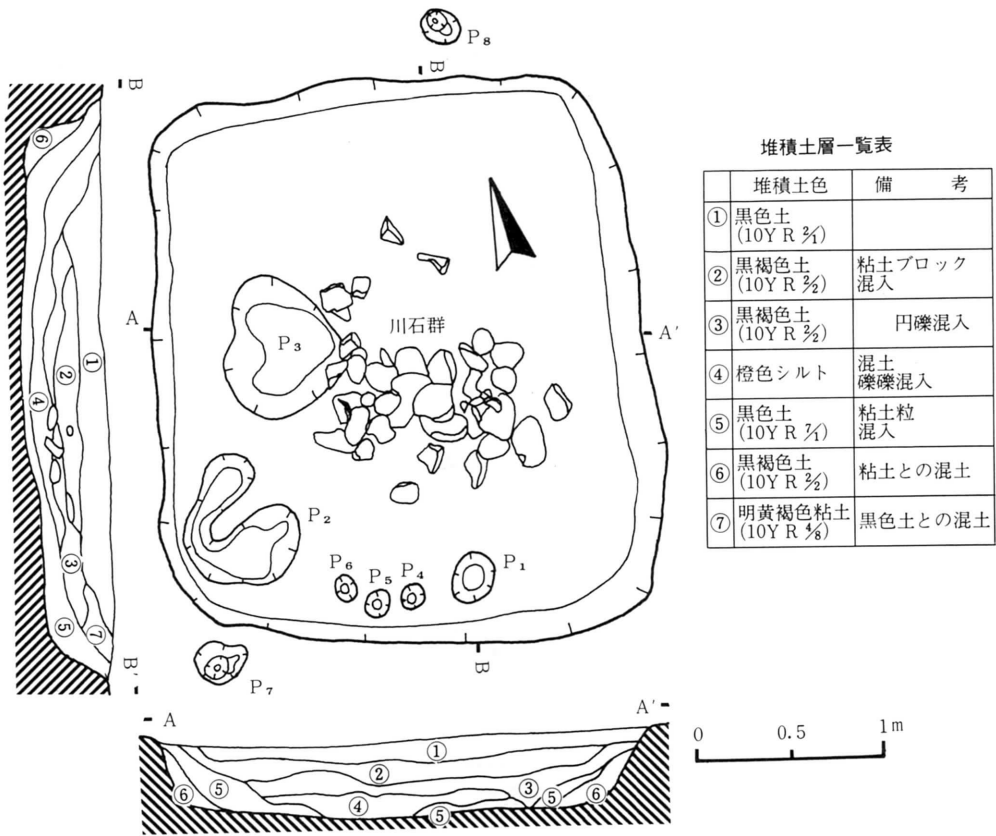
〔出土遺物〕 須恵器・土師器の甕片・B類坏片等が出土するが、いずれも覆土中からで器形を復元できるものはなく、技法においても磨滅が激しく不明である。なお、須恵器甕片の中には外面に叩き目痕を施すものがある。

Dg 65竪穴状遺構 第14図

〔平面形〕 各壁のコーナーが孤状に形成された方形のプランを示す。

〔断面形〕 壁の各断面は、床面から急な角度で立ち上がり、検出面に続く。

〔堆積土〕 大別して黒色土と黒褐色土で構成される。黒褐色土面(中位層)に20~30cm位の川石が須恵器甕の破片とともに検出された。

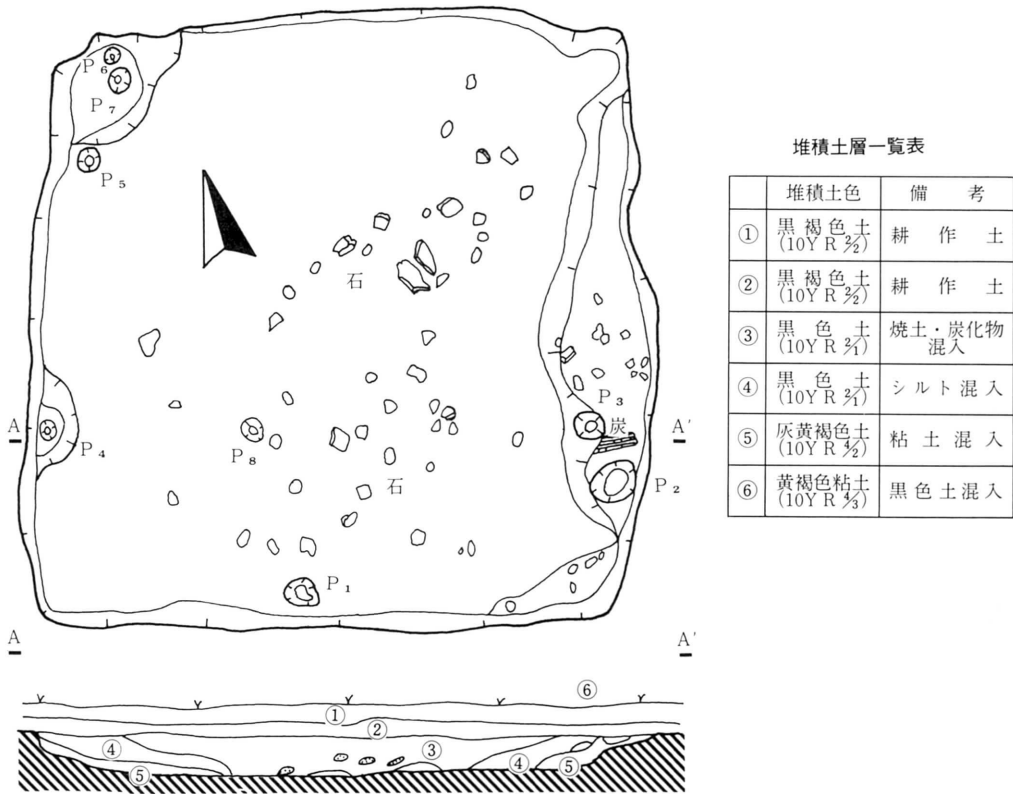


第14図 Dg65竪穴状遺構実測図

〔床 面〕 基本層Ⅱ・明黄褐色粘土層を床面として、平坦に構築している。また床面中央部には、川石が多数検出された。

〔その他の施設〕 壁内外から大小8個のピットを検出した。壁内から検出した大小6個(P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>)は、いずれも深さが5～3cm程の落ち込み状ピットであり、柱穴と推察されるものはない。また壁外の2個(P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>)は、約15～20cmの深さを示し、径が約24cmを測る柱穴状ピットであるが、付属するものかどうかは不明である。

〔出土遺物〕 出土した遺物は全て須恵器甕の破片であり、他のものは見られない。色調は褐灰色もしくは赤褐色を呈し、叩き目を外面に施している。床面から4片出土している他は全て覆土中から検出したものである。



第15図 Fe65竪穴状遺構実測図

**Fe 65竪穴状遺構 第15図**

〔平面形〕 各壁のコーナーが孤状に形成された方形のプランを示す。

〔断面形〕 壁の断面は、床面からほぼ垂直に立ち上がり、検出面に続く。

〔堆積土〕 黒色土と灰黄褐色土から構成される。壁際に堆積する灰黄褐色土は黒色土との混土であり、本来は黒色土と同質土と考えられる。

〔床面〕 基本層Ⅱ・明黄褐色粘土層をほぼ平坦に形成し床面としている。また床面から10～20cm位の川石が多数検出された。東壁・北西壁隅は、床面より一段高く形成され、その比高は約5cmを測る。その性格は明らかでない。なお東壁南寄りに少量の焼成痕が確認されたが、他の施設が確認できないことからカマドの存在は考えにくいものである。

〔性格〕 平面形・規模・幾分出土する遺物等から住居跡とも考えられる遺構である。

〔出土遺物〕 遺物は僅少ながら土師器甕片を出土している。全て破片で占められ器形を復元できるものはない。木葉を施す底部1片の他、体部内外面に刷毛目を施すものが数片みられるほか、他は磨滅が激しく技法は不明である。

(3) ピット遺構について 第16図

発見されたピットは大別して大型、小型（柱穴状）ピットに分けられる。前者には焼土ピットを含め13基ある。小型ピットは、A・D・E区にみられるがピット群あるいは建物遺構として次項で記すこととする。

なお、本項でとり上げるピットは既述の如く13基であるが、何れも性格が不明であり全遺構についてはふれない。ここでは、13基のピット平面図を図示し、代表的なものについてのみ記す。規模等については一覧表を参照されたい。

Cc53 No. 2 ピット

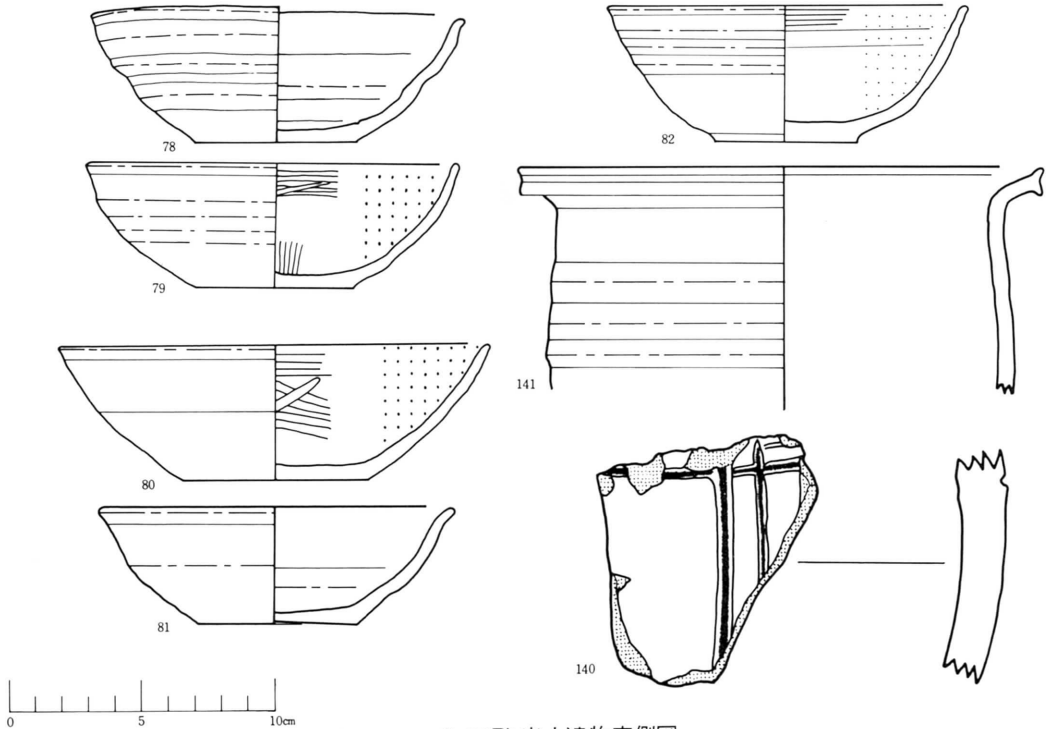
断面形態は孤状を呈し、壁のたちあがりは急である。堆積土は黒色土と褐色シルトで構成され、下層のシルトは黒色土との混土となっている。出土遺物は多いが層位的には明らかでない。

出土遺物 第16—2 図

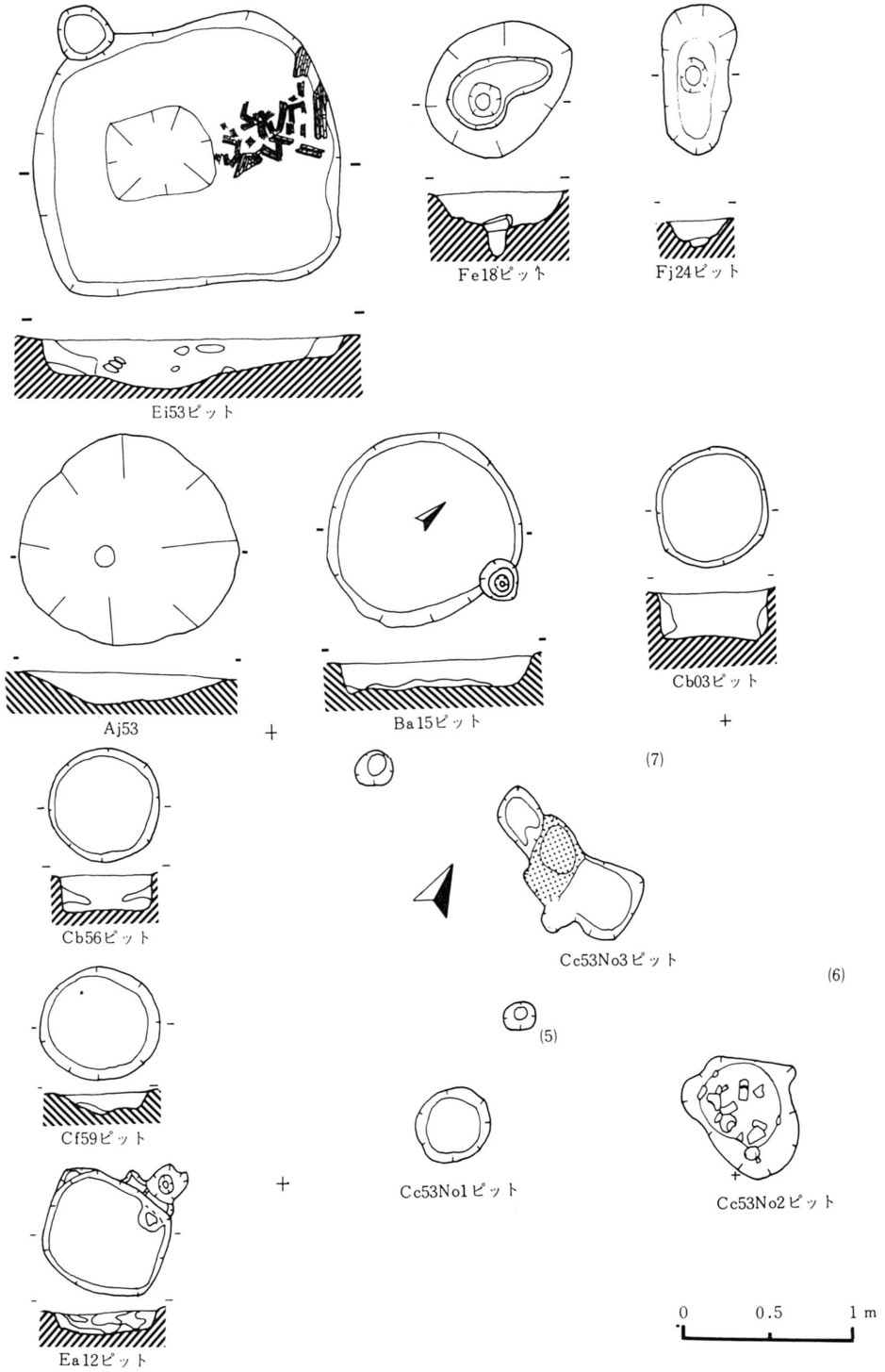
(1) 坏型土器

B類 2点、C類 3点、計 5点の出土。

B類は、No.78（写真No.90）、No.81（写真No.93）の2点で、何れも回転糸切による切離しの坏である。No.78は、体部の凹凸が激しく、押しつぶされたような感じの歪みがある。胎土中には石英細粒、小石、雲母等を含み粗雑であるが、焼成は良好である。No.81は、磨滅部分が多く、再



図版16—2 Cc53Pit 出土遺物実側図



第16-1図 大型ピット実測図



調整の有無は不明である。体部中央付近に軽いふくらみを持ち、口縁で外反する器形。色調は内外面ともに浅黄橙色を呈し、胎土中には石英・細石を混入する。焼成は普通である。

C類は、No.79 (写真No.91)、No.80 (写真No.92)、No.82 (写真No.94) の3点である。No.79は、回転糸切による切離しと推察されるが、はっきりしない。C類としては硬質な仕上がりで、胎土も精良である。細かい雲母を混入している。にぶい橙色を呈す。No.80は、回転糸切無調整。胎土、焼成ともNo.79と同様に良好である。No.82は、前2点の坏より小さ目であるが、体部のたちあがりは急である。回転糸切無調整で口縁と底部面の一部に黒斑がある。胎土中には粗砂が混入するが、全体として悪くはない。焼成も良好である。

(2) 甕型土器

No.141のロクロ成形甕がある。これは外面の色調からくる感じで土師器として扱えたものであるが、薄手で硬質なところは須恵器的でもある。石英粒・粗砂を多量に混入するが、焼成良好の甕である。色調はにぶい黄橙色～明褐灰色を呈する。

(3) その他

No.140 (写真No.95) の陶器片があるが別項で記す。

第10表 各ビット計測値他一覧表

遺構名	No	規 模		平面形	堆 積 土	混入物	出土遺物	備 考
		東西×南北cm	深さcm					
Aj 53 ビット	1	1.43 × 1.43	18	円 形	黒色土・灰褐色土	粘土粒子	無	すり鉢状ビット
Ba 15 ビット	2	1.30 × 1.30	20	円 形	黒褐色土・黒色土	焼土・炭化物	(覆土) B、C 片・須恵器・土師器片	舟底状ビット
Cb 03 ビット	3	0.75 × 0.80	33	円 形	黒色土	粘土ブロック	無	舟底状ビット
Cb 56 ビット	4	0.7 × 0.8	23	円 形	黒色土	粘土ブロック	無	舟底状ビット
Cc 53 No.1 ビット	5	0.5 × 0.54	11	円 形	にぶい黄褐色土	混 土	無	舟底状ビット
Cc 53 No.2 ビット	6	0.77 × 0.90	35	楕 円 形	黒色土・褐色シルト	炭 化 物	陶器 B、C類 須恵器・土師器	貯蔵穴様ビット (?) レンズ状
Cc 53 焼土ビット	7	1.12 × 0.55	5~6	不 定 形	黒色土・暗赤褐色焼土	炭化物・シルト粒子	無	3個の落ち込みビット 舟底状ビット
Cf 59 ビット	8	0.8 × 0.75	12	円 形	黒色土・褐色シルト	炭 化 物	(覆土) 土師器・B類片	深めの皿底状ビット
Ch 50 ビット	9	1.0 × 3.1	12	楕 円 形	黒色土・褐色土	粘土粒子・シルト粒子	無	皿底状ビット
Ea 12 ビット	10	1.5 × 1.6	13	隅丸方形	黒色土・暗褐色土・明黄褐色粘土	粘土ブロック	(覆土) B類坏片	皿底状ビット
Ei 53 ビット	11	0.85 × 1.0	10	隅丸方形	黒褐色土・黒色土	炭化物・粘土ブロック	B類坏片	舟底状ビット
Fe 18 ビット	12	0.83 × 0.9	46	楕 円 形	黒褐色土・灰褐色土	粘土ブロック	無	すり鉢状ビット
Fj 24 焼土ビット	13	0.45 × 0.9	17	楕 円 形	灰黄褐色土・黒褐色土・暗赤褐色焼土・黄褐色粘土	炭化物・焼土・粘土	無	円筒状ビット

**Ei53ピット** 第18図

〔位置〕 遺跡中軸線のF点から北方約6.8m、東方約3.5mに検出した。

〔断面形〕 各壁は、基底面からやや垂直気味に立ち上がる。断面形態は、舟底状を示すが、遺構の中央部分が約5cm程度深く掘り込まれていた。

〔堆積土〕 黒褐色土と黒色土で構成されるが、主体土の黒褐色土には、粘土ブロック・炭化物等が混入している。

〔基底面〕 明黄褐色粘土層を基盤とし、一部を深く掘り込んで形成している。なお、東壁際から夥しい炭化物を検出したが、焼土および焼成痕は確認できなかった。

**Fe18ピット** 第18図

〔位置〕 遺跡中軸線のF点から南方約15m、西方約15.6mに検出した。

〔断面形〕 周壁が垂直に立ち上がり、底面が弧状を示す。

〔堆積土〕 黒褐色土と灰褐色土から構成される。下位ピットを占める灰褐色土は、黒褐色土とにぶい橙色を呈する粘土との混土である。

〔基底面〕 明黄褐色粘土層を掘り込み、すり鉢状に形成している。なお、底面には、さらに柱穴状のピットが、約30cm程深く掘り込まれて形成され、その境から、川石（径約20cm）が検出されている。

(4) 柱穴状ピット群

**Ah53ピット群**

北縁段丘崖に位置し、空壕跡の西側に検出した20個のピット群である。各々の規模は、その径が約20～25cm程のもので占められ、深さは一定せず、浅いもので6cm、深いもので約34cmを測る。平面形は、円形から楕円形を呈し、ほぼ垂直に掘り込んだと思われる断面形態を示す。

堆積土は、単層で構成されるものが多く、その土色は、黒褐色と黒色を呈す覆土で占められ、いずれの層にも粘土がブロック状態でまじる以外、その他の混入物は見られない堆積状況を示す。なお、各ピットからの出土遺物は全く検出されなかった。

これら多数の柱穴状ピットから、住居跡の残痕、また、建物跡としての性格をもつものとも考えて調査したが、いずれのピットも、その配列に規則性を欠き、柱列を画さず、不規則的に散在していることや、焼痕および貯蔵穴様のピットが確認できなかったことなどから、住居跡・建物跡とはなりえず、これらピット群の性格を把握するまでに至らなかったものである。

**D区ピット群**

本遺跡のほぼ中央部に位置し、C区からD区に跨がる不定形落ち込み内外に、検出した59個のピット群である。各ピットは一定せず、規模・形態等から3群に分類される。

(1) その径が約10～15cm前後を測り、断面形が、逆台形から尖底状を示すもの。

(2) 径が約15～25cm程で、断面形が、円筒状から逆台形を示すもの。

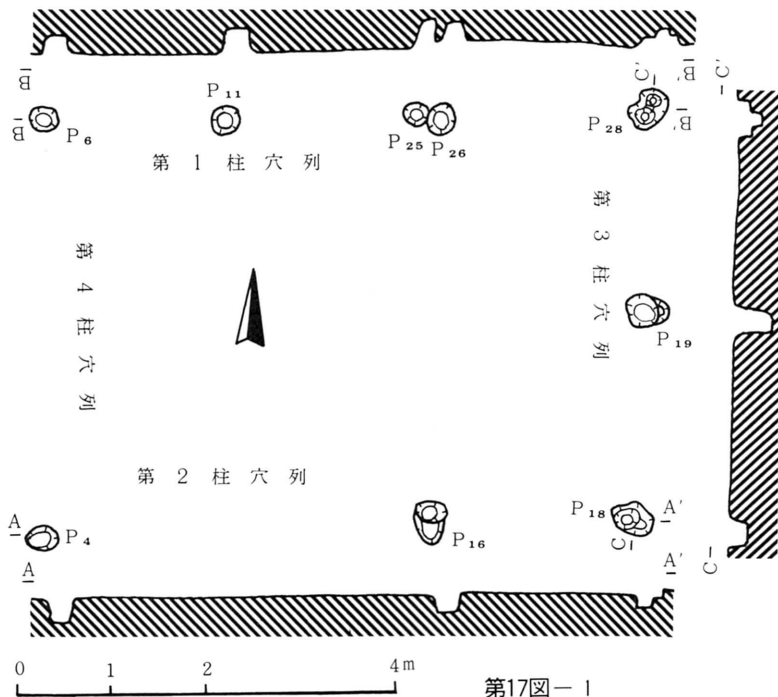
(3) 径が25cm以上を測り、断面形が、円筒状から舟底状を示すもの。

これら(1)(2)(3)の堆積土は、黒色土、黒褐色土の単層で構成される。いずれにも粘土粒や粘土ブロックの混入を見るが、特に(1)においては、量的に多く混入している。

一般に、Ah 53ピット群、Ed 53ピット群のそれに比して小規模のものが多く、深さや配列等においても一定せず、広範囲に散在することなどから建物跡を想定させる性格を示唆するものとは考えられない。また(1)に類別される各ピットの覆土は、基本層Iに酷似する土質であることから、形態等も踏まえ、現地利用の際の杭穴とも考えられる。(2)は、一般に中軸線の東側に集中して検出されたが、その配列が一定せず、不規則な分布を示し、南東方向にその広がりを見せるものと思われるが、農業用道路に遮られ調査ができず、その性格は明らかでない。(3)は、断面形態・覆土状態等から、不定形落ち込み時の攪乱と考えられる。なお、遺物は、いずれからも全く出土していない。

#### Ed 53ピット群

遺跡中軸線E区の東側に検出した31個からなるピット群である。各ピットの規模は、その径が約20～30cm程のもので占められ、深さは一定しない。浅いもので4cm、深いもので38cmを測る。平面形は、円形もしくは楕円形であり、その断面は、ほぼ垂直に掘り込まれた円筒状を呈



— 鳥海B遺跡 —

す。堆積土は、黒褐色土と黒色土の単層で構成される。覆土中には粘土ブロック・炭化物等がまじって確認された。なお遺物は、いずれからも出土していない。

当ピット群からは、一定の方向性を持つ柱穴列が確認され、各々のそれは平行関係にあり、その中に相対応する柱間が確認されることから建物跡としての可能性も考えられるために、建物遺構として以下説明する。

**Ed 53建物遺構 第17図**

当遺構の規模は、第1柱列・第2柱列が6.5m(約21尺)、第3柱列・第4柱列が4.3m(約14.3尺)の東西棟であり、第1柱列・第2柱列(桁行)の方向が、磁北から約85度東に偏し、それに対して第3・第4柱列(梁行)方向は直角を呈す。第1柱列は3間で構成され、その各々の間仕切りは、東側から2.2m(約7尺)・2.2m・2.1m(7尺)である。それに対し第2柱列は、西側部分の柱痕が確認されず明らかでないが、両隅柱が検出されていることから、ほぼ対応関係を示すものと推察される。第3柱列は、2間で構成され、北側から約2.1m(7尺)、2.2mを測る。なお、第4柱列においては、間仕切り柱が確認されず、全容が明らかでないが、両隅柱が検出され、それらが対応関係を示すことから、ほぼ同規模の間仕切りを示すものと推察される。なお、 $P_{16} \cdot P_{18} \cdot P_{19} \cdot P_{28}$ の各ピットが重複関係を示すが、建替えを示すものか否かは、現在明らかでない。また、北側桁行の $P_{11} \cdot P_{26}$ に対応する $P_{10} \cdot P_{12}$ が見られるが、これら性格は不明である。

**(5) 溝状遺構**

溝状遺構8本、溝状土壌1本を検出した。これら遺構は、調査地のCFG各区域に集中して確認した遺構である。検出面は、いずれも基本層Ⅱの上面に発見されたものであるため、全遺構について記述を行うが、出土遺物については、量的に少なく、しかも一部を除き、遺構に固有のものがみられないため最後にまとめて記述する。なお、規模・堆積土・実測図等については、第1図・第12表を参照されたい。

**A—No 1 溝状遺構(柵列状遺構)**

北縁段丘崖に沿って西から東に走り、空壕跡に注ぐ様相を呈すが、攪乱等によって明らかでない。

当遺構は、数個の窪みをもって形成される溝跡であり、その規模は一定しないが、長軸約50～55cm、短軸約15～20cm程の径を示し、深さ約10～15cmを測るもので構成される。堆積土は、暗褐色土の単層で構成され、覆土中および基底面のいずれからも遺物は出土しない。

性格については、断言できかねるが、古代に観られる布掘りを行い柵木を埋め込む様式をもつ柵列址に酷似することから、可能性としての柵列状遺構を考えるものである。なお東寄り部分には、溝跡を切る形で柱穴状ピットが、各々対応関係を示しながら柱列を組んで検出されたが、それが“門”を意味するか否かは、現在のところ明らかでない。

### C—No.1 溝状遺構

調査地C区に位置し、Ch53堅穴状遺構を切って形成され、西から東に走るが、削平のためか途中で一端途切れる様相を呈す。

断面形態は、基底面から幾分急な傾斜で立ち上がり、検出面に続く。堆積土は、黒褐色土と褐色土で構成されるが、下位に占める褐色土は粘土粒が多量に混入する。また全体に焼土粒がまじって確認された。基底面は、西方から東方にむけて緩く傾斜しており幾分起伏する。

当遺構の性格は、旧地形図・堆積土等から推察して、ほぼ旧土地利用時の農道部側溝と考えられるが、あまり明らかではない。

### C—No.2 溝状遺構（柵列状遺構）

C—No.1 溝状遺構に平行して走り、Ch53堅穴状遺構を切って形成されている。なお両端は、舌状に切れる様相を呈す。断面形態は、幾分緩い傾斜で立ち上がるが、窪み部分のそれは、ほぼ垂直気味に立ち上がる。堆積土は、窪み部分が黒色土と褐色土で構成されるのに対し、溝部のそれは、黒色土の単層で占められる。各基底面は一定せず、窪み部分のそれは起伏するが、溝部のそれは、ほぼ皿状に形成され平坦である。なお西端の窪み部分から多数の円礫が検出され、東部部からは、砥石・黒耀石が各1点ずつ出土している。当遺構は、A—No.1 溝に類似する窪みをもつが、それよりも規模が大きく、長軸約2 m、短軸約1 m、深さ約0.2～0.25 mを測るもので占められ、当遺構内から8箇所を確認された。性格等については、A—No.1 同様に柵列状遺構とも考えられるが、C—No.2 溝と平行する関係にあり、あまりはっきりしない。なお、空壕跡の東側に位置し、ほぼそれに直行する様相を呈す。

### D—No.1 溝状遺構（柵列状遺構）

調査地D区南東端に検出した。周辺には、Dg65堅穴状遺構・D区ピット群・不定形落ち込み等が検出されている。

当遺構は、そのほとんどが調査地外にあり、全容を不明とするが、検出した部分の断面形態は、窪み部分が、ほぼ垂直で立ち上がるのに対し、溝部のそれは緩い傾斜を示す。堆積土は、黒色土の単層で占められるが、混入物の違いから2層に細分される。基底面は、窪み・溝跡いずれも、ほぼ平坦に形成されている。各窪み部分の規模は、C—No.2 に類似するが、それより幾分深く掘り込まれ、約0.3 mを測る。遺物は出土していない。性格については、C—No.2 同様に柵列状遺構と考えられるが、明らかでない。

### F—No.1 溝状遺構

調査地F区からG区に跨って位置し、不定形落ち込みを切って形成されている。

断面形態は、基底面からやや垂直に立ち上がる様相を呈し、舟底状から弧状を示す。堆積土は、灰黄褐色土と黒褐色土で構成される。上位に占める灰黄褐色土は、黒褐色土と粘土の混土

で、現在の山林地表土である。なお、黒褐色土は、混入物等の違いから3層に細分される。

基底面は、西方から東方に緩い傾斜を有し、数箇所に川石が確認された。遺物は覆土中から須恵器・土師器甕片が数点みられる。

#### F—No.2 溝状遺構

南縁段丘崖に沿って西から東に走り、F—No.1とほぼ平行するが、西側で一部舌状に切れ、段丘の傾斜に沿って、東方部分は徐々に広くなり、東端でその痕跡が消滅する。断面形態は、西側がほぼ垂直に立ち上がるのに対し、東側のそれは、緩い傾斜で立ち上がる様相を呈す。また、その形態は、舟底状から浅い皿状を示す。堆積土は、灰黄褐色土と黒色土で構成される。上位に占める灰黄褐色土はF—No.1と同様、山林地表土であり、下位の黒色土は混入物の違いから2層に区分される。基底面は西から東に緩い傾斜を示し、しだいに浅くなりやがて削平のためか消滅する。なお、川石が数個確認される他、覆土中から施釉陶器片、須恵器、土師器甕片が出土している。

#### F—No.3 溝状遺構

南縁段丘崖に位置し、北から南に走り、同段丘崖に注ぐ様相を呈すが途中で舌状に切れる。

断面形態は、浅い皿状を呈し、その立ち上がりは、緩い傾斜を示す。堆積土は、灰黄褐色土と黒褐色土で構成されるが、遺構内覆土は、シルト質土が混入する黒褐色土の単層で占められる。基底は粘土質土であり、北から南に緩い傾斜を示す。遺物は全く出土しない。

#### G—No.1 溝状遺構

南縁段丘崖に位置し、F—No.1・No.2とほぼ平行して西から東に走るが、東側は段丘に注ぐ。なお、Fj18竪穴状遺構を切って形成されているが、途中部分的に削平のためか舌状に切れて確認された。断面形態は、浅い皿状を呈し、その立ち上がりは、緩い傾斜を示す。堆積土は、灰黄褐色土・黒褐色土・黒色土から構成されるが、遺構内覆土は黒色土の単層で占められる。上位・中位に占める各層は山林地表土であり攪乱層である。基底は粘土質土であり、西から東に緩い傾斜を示す。遺物は全く出土しない。

#### Bc50 溝状遺構 (Y字状)

調査地B区に位置し、空壕の西側に検出した。東西に長軸をもち、磁北から約60度位西に偏している。断面形態は、Y字状を示すが、途中で幾分の段を形成して基底部に続く様相を呈す。堆積土は、黒色土を主体として、粘土ブロックが混入する黒褐色土また、粘土粒が混入する黒褐色土の3層で構成される。基底は橙色シルト質土であり、弧状に形成している。遺物は全く出土しない。一般に当遺構は、溝状土壌・陥し穴遺構等に呼称されるものに酷似するが、検出面からの深さが約35cm位で、呼称されるそれらより極端に浅いことから、本編では、区別して、溝状遺構 (Y字状) と仮称した。なお性格等は不明である。

第12表 溝遺構規模他一覧表

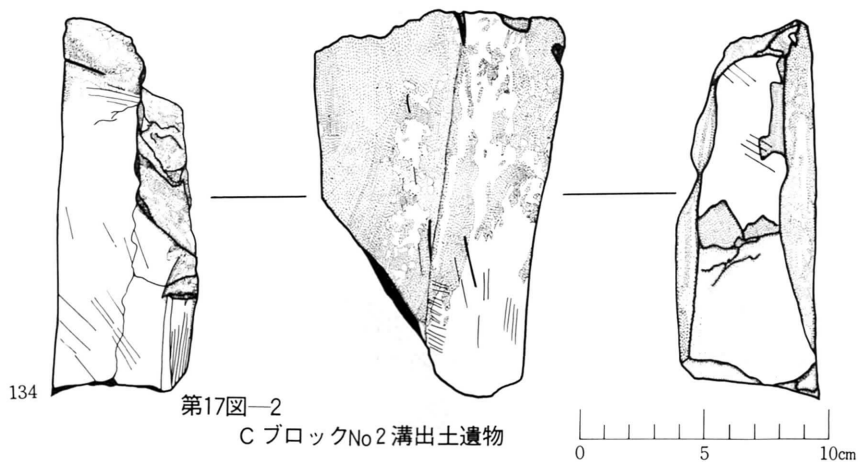
遺構名	検出長 (m)	規模		深さ (cm)	方向	壁の傾き	堆積土	混入物	基底部土性	出土遺物 (覆土中)	備考
		上幅×下内(m)									
A-No 1 溝状遺構	14	0.2 × 0.1		10~15	西↔東	40°±5	暗褐色土	粘土ブロック・粘土粒	明黄褐色粘土	無	柵列状遺構(?)
C - No 1	24	1.0 × 0.7		15	西↔東	27°±5	黒褐色土・褐色土	焼土粒・シルト粒・粘土粒	明黄褐色粘土	無	Ch53竪穴を切る
C - No 2	23	1.2 × 0.8		10	西↔東	40°±5	黒色土・褐色土	粘土ブロック・炭化物・焼土粒	明黄褐色粘土	黒曜石(1) 砥石(1)	柵列状遺構(?)
D - No 1	8.4	1.10 × 0.9		3~15	西↔東	40°±5	黒色土	粘土ブロック・粘土粒・炭化物	明黄褐色粘土	無	柵列状遺構(?)
F - No 1	51	1.5 × 1.2		13~16	西↔東	45°±5	黒褐色土	炭化物・粘土粒	明黄褐色粘土	須恵器・土師器 B・C類坏片	性格不明
F - No 2	46	西0.6×0.3 東1.3×1.0		15~20	西↔東	32°±5	黒色土	粘土ブロック・粘土粒	明黄褐色粘土	陶器・須恵器・土師器・B片	性格不明
F - No 3	6	0.3 × 0.17		5~10	北↔南	30°±5	黒褐色土	シルト粒	明黄褐色粘土	無	性格不明
G - No 1	17	0.3 × 0.2		3~5	西↔東	21°±5	黒色土	炭化物	明黄褐色粘土	無	性格不明
Bc50溝状遺構	2.6	0.4 × 0.1		35	西↔東	中段部 44°±5	黒色土・黒褐色土	粘土ブロック・粘土粒	橙色シルト質土	無	Y字形を呈す

溝遺構出土遺物

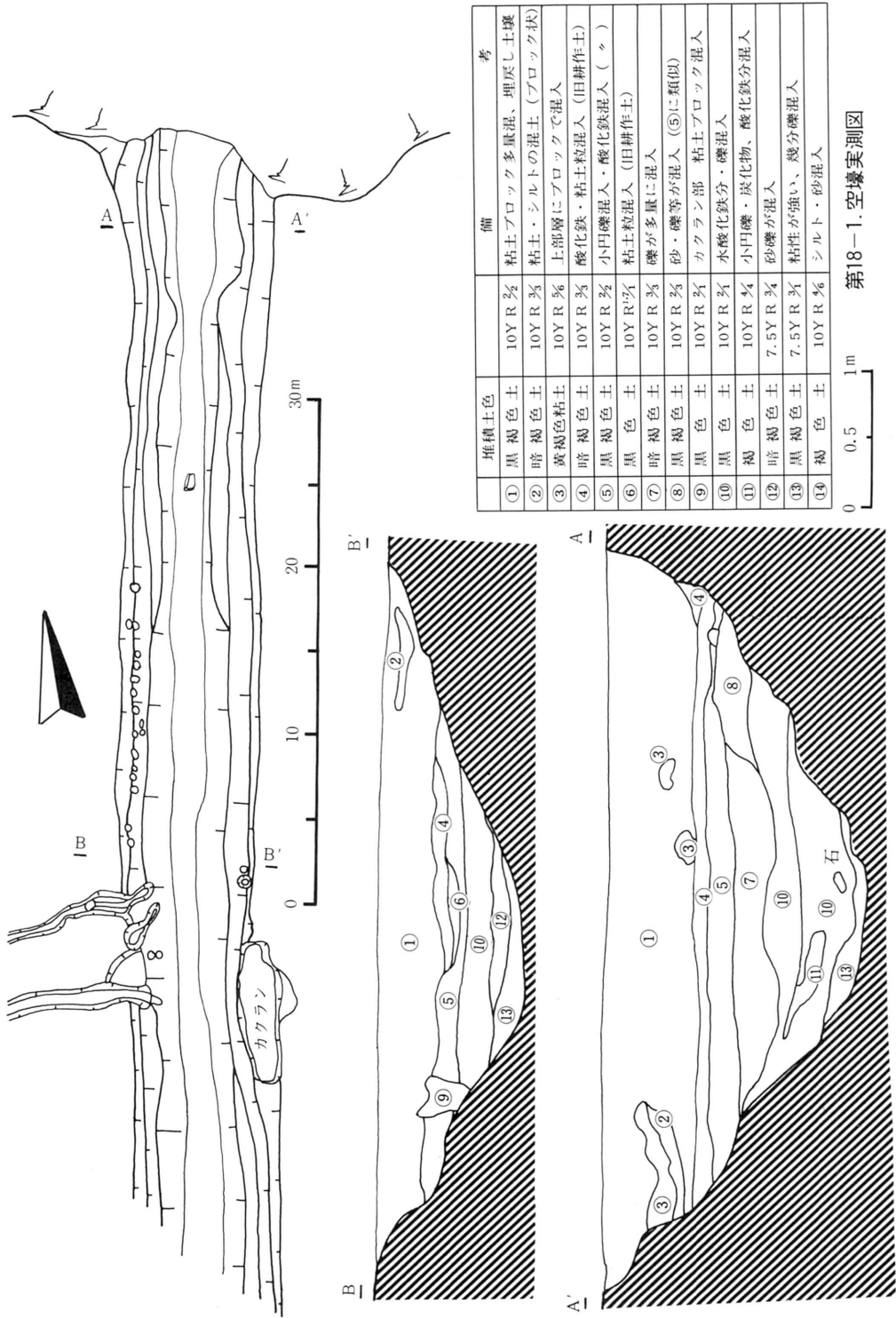
溝、溝状遺構内からの出土遺物は少なく、実測可能のものはC-2溝出土の砥石ぐらいのものである。流紋岩質凝灰岩で作られたもので三面を使用している。一面は自然面を多く残し、狭い範囲内の使用である。各面には消搔痕があるが、研磨を目的としたと思われる深い刻みが2ヶ所にみられる。

その他は、F-No.1、No.2の覆土中から若干の土器、陶器片の出土をみるが、すべて細片だけである。B・C類の坏片、須恵器、土師器甕片等がみられる。

これらの遺物は、溝そのものが竪穴住居跡に直接的に関わりのないような配置をしていることから少量であると思われる。



第17図-2  
CブロックNo2溝出土遺物



第18-1. 空壕実測図



(6) 空壕跡 第18—1図

〔位置〕 調査地A区からC区にかけて検出した。本遺跡を東西に分断する。

〔重複〕 Bd03住居跡東壁部分を切って構築している。

〔検出長・規模〕 南北検出長約65m。上幅約8.5×下幅約2.2m×中段約6.4m。深さは一定せず、北側約3.2m、南側約2mを測る。なお、中段部までの深さは約0.8～1.5m程である。中壇を境として上段は約55度の傾斜した部分が1.2～1.5mほどあり、下段は約51度の傾斜面が1.2～2.0mほどであった。中壇幅は西壁・南壁一定しないが、それぞれ0.8～1.0mほどで、一部確認できない部分もみられた。

〔堆積土〕 炭化物・粘土・焼土等の混入物の違いから20層ほどに細分されるが、主体土は黒褐色土・黒色土・暗褐色土で構成される。上位に占める黒褐色土は開田時に埋め戻された移動土壌であり、中位および周壁に占める黒色土・暗褐色土は旧土地利用時の耕作土面と考えられる。また下層に堆積する各土層はほぼ自然堆積土壌と推察される。遺物は上部層からの出土が多く、下層からの出土は微量である。

〔基底部〕 基本層Ⅱの灰白色粘土層を基底部として形成し、検出部分のそれは、南から北に緩い傾斜を示す。

〔施設〕 西壁上段斜面から21個、東壁上段斜面から2個の小規模ピット群を検出した。いずれのピットも南北に柱列状に配置されているが、その平面形は一定せず、方形・楕円形・不整形を呈し、その規模は大きなもので約60cm径、小さなもので約25cm径のもので構成されている。深さは約15～20cmを測り、その断面形態は傾斜に沿って斜めに掘り込まれているものと、ほぼ直角に掘り込まれているものがあり、全体的に舟底状をなすもので占められている。堆積土は、シルト粒・礫等がまじる暗褐色土・黒褐色土で構成され、壕跡上部堆積層と幾分似ている。

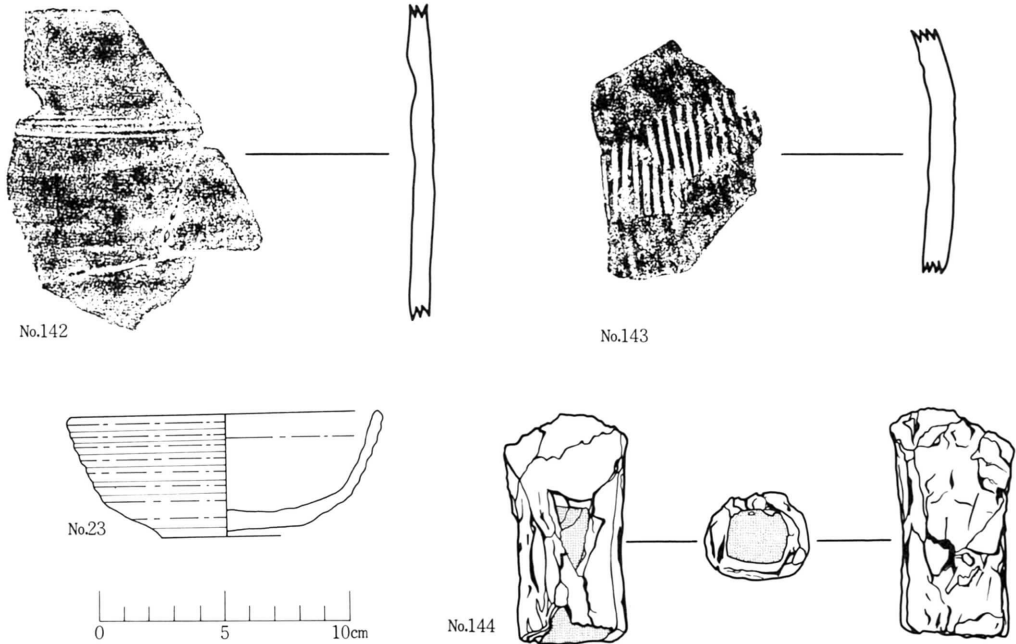
〔その他〕 西壁南端部分が2本の溝によって攪乱され、中壇部分が破壊されている。なお、東壁部分にも同様の攪乱部がみられ、壁を破壊している。

出土遺物 第18—2図

No.142、143、144の3点についての実測である。図中にあるNo.23のB類坯は空壕内からのものではなく、Cブロックの空壕に近い部分からの出土であることから便宜上、同時掲示したものである。

No.142は赤褐色を呈す土師質の土器片であり、No.143は外面に叩き目を有す陶器片である。これらの2点については、第Ⅳ項3の(2)陶器片についての項を参照して頂きたい。

No.144は、鉄斧である。9×4cm大、厚さが3.5cmの小型の製品であり、腐蝕が進んでいるが残存状態は良好である。圧延した鉄板状の両側を内に向かって折り曲げて作っている。鉄部そのものの厚さは約7mm位である。



図版18-2

### 第3濠

当遺跡と南方に隣接する鳥海A遺跡を区画して東西に走る沢地であり、西根遺跡との関連から第3濠と仮称し記述する。

〔位置〕 本遺跡の南端で鳥海A遺跡の北端に位置し、調査時には水路また、荒地としてその痕跡をとどめていた。

〔規模〕 当濠は極端に蛇行しながら東西に走る沢地であるため、その規模は一定しないが、調査区のそれは、上幅約12m×下幅約8m程で、その比高は約5mを測る。

〔構造〕 北側傾斜面は基底部から幾分緩い角度で立ち上がり、段丘平坦部に続くのに対し、南側のそれは沢の浸食作用等によって削り取られ垂直に立ち上がる様相を呈す。また傾斜面には人工的な痕跡が全く見られなかった。

〔堆積土〕 調査時に荒地となっていた部分のそれは、5層で構成されていた。

- I 黒褐色腐植土：草木根で攪乱されている。斜面堆積土と同一土性を示す。
- II 褐色砂土：約20cm位の厚さで堆積している。草木根が見られる。
- III 褐色粘土：約5cm位の厚さで堆積し、旧沢地の川床面と考えられる。
- IV 暗灰色砂質粘土：約55cm程の厚さを持ち、下層部に砂が多く混入する。
- V 砂礫層：上部に砂状土が多く、下層は円礫で占められている。

〔性格〕 堆積状況・両傾斜面に人工的痕跡が見られないこと、遺物が全く出土しないこと等から自然地形としての沢地と考えたい。なお、この状態で鳥海A遺跡とを区画することなどから、柵としての擬定地も考慮し、本編では防備溝の意味をもつものとして“濠”の性格を考えるものである。

(以上、遺構については鈴木、遺物については八重樫が記述)

#### IV 考察とまとめ

##### 1 遺構について

本遺跡から検出された遺構は前述の通り竪穴住居跡11棟・竪穴状遺構5棟・大型ピット13個・柱穴状ピット群3箇所・建物遺構1棟・溝状遺構8本・Y字状溝1本・空壕1本・落ち込み部分3箇所である。以下これら各遺構のまとめと考察を順に記載する。

##### (1) 住居跡

位置： 発見された住居跡の凡てが北側段丘縁辺に位置しており、遺跡の中央部また、南端部には確認できなかった。また空壕を中心として東西に分かれて確認された。

平面形： 長方形(A<sub>1</sub>)・正方形(A<sub>2</sub>)・正方形に近いもの(A<sub>3</sub>)がある。またその四隅が丸味をもつもの(B<sub>1</sub>)・幾分丸味を示すもの(B<sub>2</sub>)・角ばるもの(B<sub>3</sub>)がある。本遺跡では、A<sub>3</sub>+B<sub>2</sub>・A<sub>2</sub>+B<sub>2</sub>タイプのものが最も多く、続いてA<sub>1</sub>+B<sub>2</sub>・A<sub>1</sub>+B<sub>1</sub>・A<sub>3</sub>+B<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>+B<sub>3</sub>の各タイプが見られる。なお、A<sub>1</sub>+B<sub>3</sub>・A<sub>2</sub>+B<sub>1</sub>・A<sub>3</sub>+B<sub>3</sub>の各タイプは全く見られない。

規模： 削平や調査地外のために確認できなかった遺構も存在するが、一般に3.5～5.6m内外の中規模住居跡で占められる。なかでも、4m前後を測る住居跡が多く分布するようである。なお、規模の点で、類型的なまとまりを示すものはないようである。

堆積土： 主体土が黒褐色土で構成されるもの、黒色土で構成されるもの、その両方で構成されるものが見られる。いずれの層にも粘土粒・シルト粒がまじった状態で確認された。

これらは、各遺構の時期決定や前後関係、崩壊状態を推察するうえで重要なものであるが、なにぶん遺構の残存状態に起因するものであるため、本遺跡のように、開田によって旧堆積土が明らかでない調査地にあっては、これらから性格等を推察するには幾分困難なものである。

床面： ほとんどの住居跡床面は、基本層Ⅱの明黄褐色粘土を掘り込み、同層を床面として平坦に形成しているが、なかには橙色シルト面まで掘り込み、その上部を粘土と黒色土の混土で貼り生活面として形成しているものもある(6・7・8・9・10—1号住居跡)。

住居跡自体の掘り方は、いずれの住居跡からも確認されなかった。

柱穴： 柱穴は住居の上屋構造を支えるための柱の穴である。それらは一般に4個の支柱穴と数個の補助柱穴から構成される。本遺跡の各住居跡からは、位置・形状・規模等から1～5個の柱穴が確認されている。それらの規模は約35cm前後の径をもち、深さは約10～20cmのも

ので占められる。その位置は一定しないが、中央に位置するもの、東壁寄りに位置するもの、南壁寄りに位置するものが見られる。また柱痕跡の大きさから推察して柱の太さは約20cm前後のものと考えられる。なお、柱穴の少ない住居上屋構造について今後の検討を要すものと思われる。

**貯蔵穴：** 食物等の貯蔵用のための施設である。本編では、位置・形状・規模・含蔵物等から推察し、貯蔵穴様ピットと仮称して記載した。各住居跡から検出されたそれは各々1～6個を数える。規模は一定しないが、ほぼ80cm前後の径をもち、深さは15～40cmと一定しない。また、10-1号住居跡のように二期に渡って使用されているものもある。位置は一般にカマドをもつ壁の周辺また、周壁に構築されているものが多く見られた。

**周溝：** 11棟中確認された遺構は5例（1号・5号・7号・8号・10-2号）であり、いずれも周壁際内部に構築されている。規模は5号住居跡を除き、いずれも幅の狭いもので、深さも8cm前後のもので占められる。また、周溝内に杭状の小ピットが確認されるものと否のものが見られる。なお、周溝は凡てカマド付近でとぎれている。

#### 炉およびカマド

##### (a) 炉

床面上で火を使用したと思われる現地性焼成痕のあるものを“炉”とした。本遺跡においては、これらは特別な施設を伴わず、常に火が焚かれていたと思われる場を示す。これらは、他の空間と区画するための粘土や石積等をもたないこと、床面が一定の範囲で焼けて赤褐色、または暗赤褐色に変化し堅くなっていること、熱の影響は、周辺に向うにしたがって弱まっていること等で区分されるものであり、カマドの焚口とは異なる。

1号住居跡・4号住居跡に確認されている。なお、6号・10-1号住居跡については不明。

##### (b) カマド

カマドは、焚口部・燃焼部・袖部・煙道・煙出し部等から構成され、燃焼部と煙道部分には側壁の上に天井部がつく。また、燃焼部の天井には甕を受ける穴を有するものが本来的なものである。本遺跡の一部住居跡にあつては、その天井部が潰れた状態で検出されているものもある。カマドは、北壁と西壁部に構築されているものはなく、凡て南壁と東壁に確認される。東壁に構築されるそれは、さらに北寄りと南寄りに分かれる。これらは次のように分類される。

I群—南壁東寄り部分—1棟。1号住居（Ad21）。

II群—東壁北寄り部分—4棟。3号（Ag03）、7号（Bd03）、8号（Bd68）、10-2（Bg62旧）。

III群—東壁南寄り部分—3棟。4号（Ah18）、6号（Aj50）、10-1号（Bg62新）。

IV群—削平等で確認できなかったもの—3棟。2号（Ad09）、5号（Ah06）、9号（Bd74）。

各群の磁北からの振れはI群を除きほぼ一様で同方向を指す。I群はW-85°-Sを測り、南

方を指すのに対し、Ⅱ群は(E-8°-S)~(E-23°-S)の範囲で東南東方向を指す。またⅡ群Ⅲ群は、同一方向を指すが、幾分その方向性に違いをもつ。Ⅲ群は東方向を指すのに対し、Ⅱ群はそれから約10度前後南方向に傾く様相を呈す。なお、10号(Bg 62)住居跡は重複関係をもつ遺構であるが、それは短期間に行なわれた建替えであり時間的な差をあまりもたない継続使用と考えられることから、これらを含むⅡ・Ⅲ群に類別される各遺構は同一時期における集落跡を構成していたものとも推察される。Ⅰ・Ⅳ群については当分類からは判断しかねる。

但しⅣ群に類別される2号住居、5号住居はいずれも東壁に焼成痕を確認できることから、Ⅱ・Ⅲ群に類別されるものとも考えられる。各住居跡の時期決定等については出土遺物考察の欄において比較し、まとめて記述する。

**焚口部：** いずれも燃焼部分に緩い傾斜をもって続く。基底部には焼土が堆積するが、燃焼部のそれより軟弱でボロボロした焼土粒で占められ、その土色は暗赤褐色を示す。明らかに燃焼部とは区別されるものである。

**燃焼部：** 検出されたそれは、平面形が楕円もしくは円形を呈し、断面形態はいずれもレンズ状に窪んで確認された。規模はカマド本体に比例し一定しないが、その平均径は約50cm前後のもので占められている。焼土は明赤褐色からにぶい赤褐色を呈し、基底部は固く焼け締まった状態で確認された。また中央部から煙道部寄りに支脚と思われる角礫等も検出されている。

カマドの上部構造は、6号・8号・10号住居から潰れた状態で検出された。それらは、粘土とシルトで固めて形成してあり、甕片がその内部から多数出土した。

**袖部：** 2号・5号・9号住居跡を除き検出された。発見された袖は、その構築方法が様々であり、4群に分類される。それは次の様であった。

Ⅰ群—礫を埋め込み、その周囲を粘土で被覆したもの。1号・3号・4号。

Ⅱ群—礫を埋め込み、その周囲をシルトを主体とする粘土との混土で被覆したもの。10-1号。

Ⅲ群—粘土を主体土としてその上部をシルト質土で被覆したもの。6号・7号・10-2号。

Ⅳ群—シルト質土を主体土として、下部粘土を被覆したもの。8号。

Ⅰ群・Ⅱ群にみられる礫はいずれも川石様のもので袖部先端に床面を幾分掘り窪めた状態で1~2個の検出を見た。また、主体土を構成する粘土およびシルトは、いずれも明黄褐色粘土・橙色シルトであり、本遺跡の基本堆積土のそれと酷似する。なお、袖部は住居構築後に形成されたものと考えられ、明らかに住居壁と区別される。

**煙道部：** 11棟中5棟から検出された(3号・4号・6号・10-1号・10-2号)。いずれの煙道も燃焼部分から住居壁に沿って立ち上がり、その境は約6~10cm位の段差をもって区別される。形態は一定せず、2通りからなる。①煙道が短く、その先端が舌状に切れて消滅するもの(3号・6号・10-1号)。②煙道が幾分長く煙出し部をもつもの(4号・10-2号)。①は長さが20~40

## － 鳥海B遺跡 －

cm前後であり、地山面を約10cm位掘り込んで形成し、先端部は緩い傾斜で検出面に立ち上がり、煙出し部を伴わない。但し、6号住居においては、先端から延長54cmほどに煙出し様ピットを確認したが詳細は不明である。②は長さ約100cm前後を測り、幅約17～25cm、深さ3～10cmほどであった。煙道は、煙出し部に向けて緩く傾斜しており、煙出し部につながる。断面形態は上部をほとんど削平されているが、箱状に地山を掘り込んで形成してあった。なお、焼土痕は①②いずれからも薄く焼けた状態で検出された。

**煙出し部：** 本遺跡では3棟から検出した(4号・6号・10-2号)。それぞれの構築形態は、様々であり、煙道より幾分深く掘り込んで形成しているもの(10-2号・6号)。煙道とほぼ同レベルで形成し、区別のつかないもの(4号)とがあるが、いずれもその平面形は円形もしくは楕円形を示し、断面形態は箱状に粘土層を掘り窪めたものであった。

以上、各住居跡の部所を総合し、まとめてその特徴を説明した。これらから本遺跡における住居跡は、<sup>注1</sup>西根遺跡で発見された各住居跡に比較して一般に規則性をもって構築されたものであると推察される。それは凡てが北側段丘崖に分布し、各々重複関係を示さない(10号は継続使用)こと。中規模遺構で構成されること。カマドが南から南東方向を指し一定していること。住居跡の構築方法が若干似通っていること。出土遺物にほとんど変化が見られないことなど種々の観点に見られる。また、この状態は、各住居跡の存続時期をも推察させるものと考えられる。上記の共通点から各住居跡は、10号住居との兼合いも考慮して、ほぼ時期を同じくして構築された集落共同体の一部と推察される。なお、空壕と7号住居の関係から、空壕が掘り込まれる以前に、この地を生活の場として集落を形成し存在していたものと考えられる。他の遺構との関係は現在明らかでない。住居跡の年代観は出土遺物考察の欄で記すので省略する。

注1： 昭和50年度岩手県教育委員会調査、東北縦貫自動車道関連遺跡。

### (2) 竪穴状遺構

平面形が方形もしくは楕円形を呈し、ある程度の規模を持ち、カマド等の施設を持たない性格不明の竪穴住居様遺構であることから“竪穴状遺構”と仮称して記述した。

当遺構には、床面に焼成痕をもつもの、川石等が数多く見られるもの、何も見られずその痕跡だけにとどまるもの等であり、一般にそれらから遺物は出土しないが、Bd68、Dg65、Fe65の各遺構においては微量ながら出土する。但し、Dg65出土のそれは覆土中からで床面のものはなく、決定資料としては不足の観がある。Fe65遺構は、規模・出土遺物・構築形態から推察して住居跡とも考えられるものであるが、柱穴・カマド等の施設が確認できないことから区別した。また、Dg65遺構においては、その形態、川石の出土状況等が<sup>注1</sup>西根遺跡の2号竪穴状遺構(Cj74)に類似するが、その堆積土が人工的な埋設状態を示さないこと、川石等が浮遊し床面にはあまり確認できなかったこと等から墓塚としての可能性は薄いものと考えられ、西根遺跡の

それとは幾分性格を異にするものと思われる。なお、覆土中から須恵器大甕の破片が数点出土している。Ch53遺構はC-No.1、C-No.2溝跡によって切られて確認されることからそれ以前の遺構として把握されるが、その他の遺構については現在不明とする要素が多く、今後調査されるであろう類例をまってその把握につとめたい。

注1 昭和50年岩手県教育委員会調査、東北縦貫自動車道関連遺跡。

#### (4) 溝状遺構

検出された溝跡は、そのほとんどが西方から東方に走る様相を呈し、いずれも削平もしくは攪乱のためかその全容を明らかにするものはない。また、出土する遺物も僅少であり、それらの性格・時期等を決定するに足るものではなかった。

本遺跡では8本の溝跡と1本のY字状溝跡が検出されている。これらはその構築形態から3様に分類される。それは次の通りである。

A： 溝跡基底部の数箇所到人為的な掘り込みをもつもの(A-No.1・C-No.2・D-No.1)。

B： 上記の掘り込みをもたない単なる布掘り的なもの(C-No.1・F-No.1・F-No.2・F-No.3・G-No.1)。

C： 上記各溝跡に比して、規模が小さくその断面がY字状を呈すもの(Bc50 Y字状)。

A群に分類される溝跡は3本検出されているが、その構築様式が古代に見られる柵列址のそれに酷似することから柵列状遺構として説明したが、柵列址であるか否かは明確でない。

もし、柵列跡とするならば当遺構に見られる掘り込み部分は、布掘りをした後に柵木を埋め込むために掘り込まれた凹面と推察され、それぞれがその単位を構成するものと考えられる。

但し、各々の規模に若干のバラツキが見られ、C-No.2を最大とし、A-No.1を最少のものとするが、これらが柵木を埋め込むための掘り方痕とするならば、決してその前後に矛盾するものでないものとする。しかし、当遺構の周辺には、それらに付属すると思われる施設が確認されないこと。当遺跡の土地利用が2期にわかれて使用されていること。出土する遺物が少ないこと等からこれら遺構が柵列址であるのか、また耕作による布掘り的な溝であるのか類例の少ない現在では明らかでないが、B・C群溝跡と若干構築形態が異なるものであることを強調して今後の検討課題としたい。

B群に分類される形態の溝跡は5本検出され、ほとんどが南端F区～G区に位置する。これら溝跡は単に布掘り的に掘り込まれたもので、A群のそれとは異なり断面形態は基底部から約21～31度の角度をなして立ち上がる。堆積土は黒色土もしくは黒褐色土で構成され粘土ブロックが混入するものと混入しないものが見られることなどから各溝跡にも多少の時間差があるものと考えられるが明らかでない。なお、性格・用途については明確でないが、新旧土地利用時における耕作の布掘り的なものまた、旧農道部際に掘られた側溝的な性格をもつものとも考え

— 鳥海B遺跡 —

られる。いずれにおいても本遺跡の各遺構と直接的に関わり合いを示す性格をもつものとは考えられない。

C群は1本だけの検出であるが、上記溝跡とは幾分形態を異にする。崩落等も考えられるがその断面形態が、開口部で大きく開くY字状を呈するもので、この種の溝跡は一般に溝状土壙・<sup>注1</sup>陥し穴遺構等に呼称されているもので、その深さが1m前後を測るもので占められている。しかし、当遺構の深さは、検出面から約40cm前後と浅いことから、それら呼称されるものと区別するためにY字状溝と仮称した。またこれらの時期は一般に縄文時代に比定される遺構であるが、本遺跡においてはそれらに比定される遺構また遺物が全く発見されていないことからこれらとは区別されるものと考えられる。なお、当遺構の性格また他遺構との関係など、現段階では明らかでない。

注1 岩手県教育委員会調査、大久保遺跡・高屋敷Ⅱ遺跡・高柳遺跡・大緩遺跡、東北縦貫自動車道関係文化財調査報告書Ⅰより。なお東北新幹線報告Ⅲの前九年Ⅱ遺跡参照。

注2 財団法人埋蔵文化財センター調査、上田面遺跡・稲村遺跡・中田遺跡・長者屋敷遺跡・その他、岩手県埋蔵文化財発掘調査略報より。

(5) 空 壕

自然地形を利用した第1濠<sup>注1</sup>・第2濠<sup>注2</sup>・第3濠<sup>注3</sup>と区別するため当空堀跡を“空壕”として記載する。空壕は前述のごとく第2濠（本遺跡の北側）から第3濠（本遺跡の南側）に接し、本遺跡を東西に分断する遺構である。今回の調査は全体の約3分の1を全面調査したものであり、その結果明らかに人工的なものであることが認められた。それは壁の傾斜面が二段に形成されていること。途中で平場的な壇をもつ（旧土地利用により一部破壊）こと。第2・第3濠と異なり蛇行せず、直線的に掘り込まれていること。基底が一定面ではほぼ水平に形成されていること。これらは明らかに自然地形を利用した構築様式とは異質のものであることを示唆させるものである。なお、旧地形図にはその痕跡が窪地として明瞭に記されていることから、開田以前まで暫く残存していたものではないかと思われる。また、凹部分の土地利用は同地形図から畑地として使用されていたことが明らかである。このため壇の一部および傾斜面が削平・攪乱されており、本来の様相を呈していない部分も見られることから全容を明らかとしない。

当空壕は鳥海柵址古地図にも明瞭に記されており、その位置も一致する。また、<sup>注4</sup>草間俊一氏の“西根宇鳥海附近調査の成果”の項によると古地図よりさらに詳細にその全容を記している。それによると殆んど埋立てられているが、その両端に空濠のあとを留め、低い濠のあとが残っていると共に、濠の両側に土塁があり、その土塁は現在半分以上その形を留めていると付記している。これら資料から当空壕本来の様相を復原すると、<sup>注6</sup>壕の両側にはある程度の規模をもった土塁を築き、2段傾斜面をもつ薬研的な空壕が想定される。しかし現状地形および調査段階において土塁の痕跡は、開田事業に伴うブルドーザーでの整地によって、全く平地化されてお



り確認することはできなかつた。また、壕自体もほとんど埋立てられているが、その残痕は南端部（第3濠接点・現在杉林）で見ることができる。

調査によって壕の中央からやや南寄り第1傾斜面に19個から構成される柱穴状ピット群が検出された。これらは斜面に沿って横一線の柱列配置の様相を呈すものである。これに対する対岸の斜面には同レベルで2個のピットが確認されただけであった。これらが壕の一施設をなすものか否かは現在不明であるが、もし、畑作もしくは整地の段階で攪乱・削平等を受け破壊されたものがあるとすれば、それらを含めて土留的な施設・架橋列の一部施設等が考えられるが何分調査範囲が狭いために全容が明確でなく断言できかねる推察である。なお、壕の性格については出土する遺物が極端に少なく、数点を除きいずれも覆土内から検出されたもので占められ、時期決定の根拠には欠けるが、基底部から出土した内面に灰釉を施す常滑片と壕によって破壊された7号住居跡（Bd03住）等の年代観から大幅な時期区分を可能とする。7号住居跡は出土遺物から平安時代後半頃（11C代）の時期に位置づけられる年代観をもつものであることからすれば、壕の構築期はそれ以後に位置づくものと推察される。また、出土した常滑片は、樽崎彰一氏の所見によってほぼ12世紀中葉以降に生産される年代観をもつ遺物であることが明らかにされた。もし、当遺物が壕の構築期に伴うとすれば、それは12C中葉以降に掘り抜かれた遺構となる可能性が強い。これは前述した7号住居との関係に矛盾するものではないが、壕がその時点で今だ原型を留める状態で残存していたものとするならば基底部から出土するそれは後の搬入品と推察することも可能となり、壕の時期観はそれ以前に遡るものとも考えられることになる。これらは堆積状況がある時期まで自然状態を示すこと、同年代観をもつ遺物が上層攪乱部から出土していること、大規模な遺構であることから埋没するまで時間を要すこと等が後述した推察を裏付けする要因である。これまでの推察を総合して壕の性格を考えた場合、むしろ筆者は現状の残存状況などから判断して廃棄後も暫くその原型を止めていたものと考え、出土する遺物はその時点での搬入品と推察する方がむしろ妥当性のある考えと感じられることから壕のもつ年代観はおおよそ平安時代後半頃から鎌倉時代成立期以前の大幅な時代区分をもつことになる。これら大幅な年代観は安倍氏・清原氏・藤原氏各時代をも含むことから壕のもつ意味を推察すれば、鳥海柵<sup>注8</sup>を構成する一施設とも受け取れる性格をもつものであるが、しかし、調査地内から検出された各遺構のうち、明確にそれと同一視される遺構の確認はされておらず、現時点ではどちらにも断定しがたい性格をもつものである。なお、壕と鳥海柵址との関係は本文次項で再度記述するため省略する。

注1 自然地形であり、調査範囲内からは人工的な部分が全く見られなかつたが、区画の可能性を考慮した。西根遺跡の北側を東西に走る。古地図の第3濠にあたる。

注2 自然地形であり、現在水田・水路として利用されている。現在も明瞭に痕跡を残す。本遺跡と西

一 鳥海B遺跡 一

根遺跡を区分する。古地図の第2濠にあたる。

注3 自然地形であり、現在は沢と道路として利用されている。現在も明瞭に痕跡を残す。本遺跡と鳥海一A遺跡を区分する。古地図の第1濠にあたる。

注4 大沼慶一部氏所蔵の大正年末頃の謄写印刷物。その原図がいつ書かれたものかは不明。鳥海柵の概要図である。

注5 岩手大学教授。岩手史学研究(岩手史学会)No.33の“岩手県のチャシと鳥海柵”昭和35年4月10日発行。

注6 同氏の記述をそのまま引用したもの。本文では自然地形を示す“濠”とを区別して記載してある。

注7 同時代を大きく前半、後半の2期に区分。前半は律令体制の確立期、後半は崩壊期にあたる。このため、この地の在地勢力安倍氏、清原氏、平泉藤原時代も含む。

注8 築城時期は不明とする。奥六郡の在地族長成立期の鳥海三郎宗任と鳥海弥三郎家任の館とされ、当地はその擬定地にあたる。

## 2 鳥海柵擬定地について

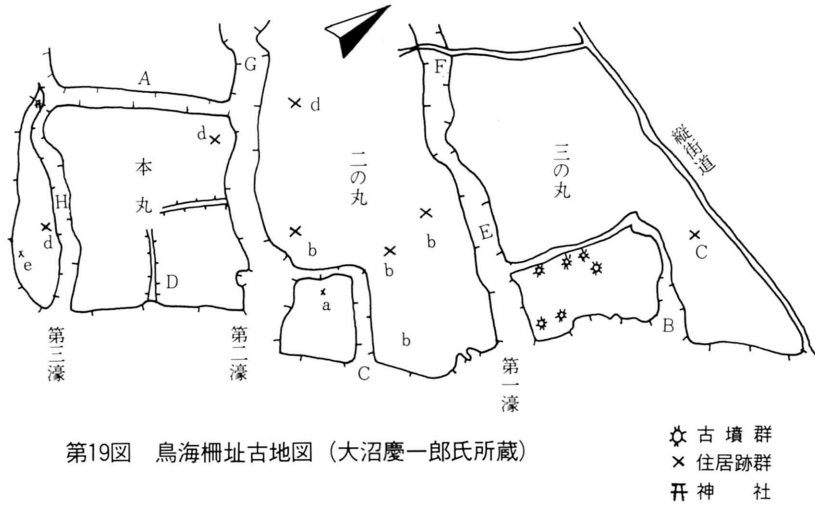
### (1) 概観

当台地は、胆沢平野の北端段丘崖に位置し、南方約500mの地点を東流する胆沢川と東方約2kmを南流する北上川の両川によって削られ、形成された河岸段丘である。胆沢川北岸で、その比高差は約8～10mを測り標高約60mの高台となっており、胆沢城を中心とする胆沢平野を眼下に一望視し得る絶好の地でもある。高台の東端部・南端部分は胆沢川によって削られ急崖を成し、一方台地に続く西方・北方の両面においては河岸低地に注ぎ込む自然の沢（以後濠と記す）によって区切られ区画されている。これらの地形的な立地状態は“陸奥話記”に記されている鳥海柵の擬定地とされる所以でもある。また、当台地には、古墳群、住居群等も存在し早くから文化が開けた地域としても注目される地でもある。

鳥海柵の擬定地としては、要害さを誇る当地の他に県内4カ所、県外2カ所の候補地が記されているが何れもその地区の字名また、地域名からの伝承であり、その場所もあまりはっきりしない。各擬定地は次表のごとくである。

	擬定地所在地	出典		擬定地所在地	出典
1	胆沢郡金ヶ崎町大字永沢字鳥海	日本先住民族史	4	二ノ戸郡鳥海村稲荷	岩手県管轄地誌
2	東磐井郡大東町興田字鳥海	岩手県管轄地誌	5	宮城県巨理郡鳥海浜	奥羽観蹟聞老誌
3	胆沢郡胆沢町前沢字鳥海	大日本地誌	6	秋田県由理郡鳥海山	〃

陸奥話記の記事からその鳥海柵を考えてみると、安倍氏が築城した12柵の中でもその中央に位置する重要な柵であって、その要害を誇っていたものであることが伺える。これら記事からその位置を考えれば、①胆沢平野制圧のために胆沢郡内に柵を築いたと考えられること。②奥六郡（北上川流域地帯）を支配した安倍氏は厨川柵を中心としてそれから以南の北上川流域平野を制圧するに絶好の地に築城したと考えられること等が推察される。このように考えた場合



第19図 鳥海柵址古地図（大沼慶一郎氏所蔵）

前表に掲げた諸擬定地の中でも当西根台地が最もその地形から有力視されるべき擬定地としての条件を兼ね備えた地であることは明らかである。

## (2) 台地周辺と調査成果

鳥海柵西根説について「安永5年7月調、胆沢郡西根村風土記」がある。それによると、本丸（南北76間・東西88間）、二の丸（南北28間・東西28間）、三の丸（南北50間・東西80間）から構成されていることが記されているが、この規模が当地地のどの部分を指すものか現在のところあまり明らかでない。しかし、大沼慶一郎氏所蔵の大正年末頃の謄写印刷物に鳥海柵址古地図（第19図）がある。この地図と前述した風土記の規模を比較すれば必ずしも一致するものではないが本丸、二の丸、三の丸と名づけた位置は同じ場所を示したものと考えられる。但し、この古地図の原図が何時書かれたものであるか明らかなものではないがこの地図と現状を比較した場合必ずしも一致するものではない。しかし、大筋は地形等においては非常に酷似するものである。以後は古地図を利用し、調査成果と照し合わせながらその性格また地形等を記述する。

古地図上に記されている第二・三濠は現在もその痕跡を明瞭に残すもので水田もしくは水路として利用されているが、第一濠は金ヶ崎中学校建設（現在東北ナイロン敷地）の際に一部埋め戻され、また、区画整理事業（昭和41年）においてその他部分のほとんどが埋め戻され、痕跡を東端部分に残すだけである。図中のE点付近は草間俊一氏によって一部が調査（昭和33年）され明らかである。当地地は調査年度・調査主体を別としながら調査が進められてきた地でもあることから次にそれを参考のために列挙する。

一 鳥海B遺跡 一

調査機関		年度	調査区域（図中）
岩手県教育委員会	東北自動車道関連	昭和50	第一濠F付近、二ノ丸西側（東西巾60m）三ノ丸西側、本丸A濠G、H、d
金ヶ崎町教育委員会	金ヶ崎中学校建設 区画整理事業	昭和32～	古墳群一部・a～b住居跡群・第一濠E付近
（財） 埋蔵文化財センター	金ヶ崎バイパス関連	昭和54～	古墳群一部・B濠一部・C付近住居跡

以上が調査によって明らかにされた地区であるが、その他地点においては現在把握されていない。そこで草間俊一氏の“西根字鳥海附近調査成果”の項を引用して古地図を説明すれば、D濠の両側には土塁があり、C濠はその痕跡を明らかに残し、B濠の南北に走る部分は埋め戻され調査によらなければ明らかでないとしている。しかし、現在ではそれらを確認することはできないが上記成果を引用すれば、かつての状況を幾分把握できるものとなる。これら周囲の状況と本調査によって明らかにされた鳥海B・西根の両遺跡から発見された各遺構が鳥海柵の擬定地とどのような関連を示すものか、以後に記し、その擬定地としての性格を記す。

(3) 両遺跡検出遺構と鳥海柵

両調査地は、各本文中でも記した様に台地の西方もしくは南端部分にあたり、各々濠によって区画されている（第1・2・3濠）。検出された各遺構のうち、もし、当台地が安倍氏によって築城された柵址とするならば、一般的な住居跡と区別される異型住居で異質遺物を出土する住居（西根遺跡2号、8号）・建物跡（両遺跡）・柱穴列跡（西根）・各濠と空壕・柵列状遺構（両遺跡）が考えられるが、何れにおいてもその性格また年代観を不明とする遺構であるため、柵を構成する一施設であるか否かは明らかでないがこれら遺構について幾分ふれながら柵との関係を推察する。西根遺跡から検出された異型の住居跡については、すでに西根遺跡“長方形を呈す住居跡”の項で、草間氏の調査によって明らかにされた兵舎様住居また中世に比定される竪穴住居形態との関連で記してあるので本編においては詳細に渡って記すことはさけるが、当住居跡から出土する遺物が明らかに他住居から出土する遺物と異なった変化がみられ、それらを比較し、編年に照した場合に、他から出土する遺物より前に遡るものとは思われない。また、この推察は、鳥海B遺跡で検出された空壕によって破壊される住居跡との関係からも幾分裏付けされるものである。しかし、当空壕からは、同等の遺物が全く検出されていないことなども考えると断定しがたいものとなるが、鳥海遺跡“まとめ”で記したごとく、それから出土した常滑片を根拠にして空壕の時期を考えた場合、その遺物が後の搬入として仮定した場合、その空壕の年代観は遺物より以前に遡ることになり、一応土座居住居的な異型住居とほぼ同一年代の範疇にも組み入れることが可能となる。但し、西根遺跡および鳥海B遺跡から検出された各住居跡は出土する遺物から多少の時間差はあるにしろ一般に平安後半頃の時期観をもつもので

占められており、柵の築城年代が明確でない現在ではあるが「陸奥話記」に“永承6年（1051年）に陸奥に掘起す”とあることから推察すれば永承の初め頃には既に築城は完成していたものとも考えられる。また、同記の記事には“天喜5年（1057年）頼時が鳥海柵で死す”と記されていることから推察すると永承6年～天喜5年の間約5～6年の間に築城されていたことになる。ともすれば、平安時代後半頃の年代観をもつ各住居跡との時間差はほとんどないものとも考えられることになるが、前述した様に空壕が住居跡を切って掘りぬかれていることからそれよりは新しい時期の年代観をもつことは明白である。これら住居跡の他に性格・年代観等を不明とする建物跡・柱穴列跡・柵列状遺構などが存在する。各遺構が、柵に関連するものか否かは不明であるが、当遺跡にあって性格を不明とするところから一応、柵との関連の存否を推察するものである。西根遺跡で検出された柱穴列跡は3跡を数えるが、何れも建物跡とするにはその根拠に欠けるものである。しかし、柱間が対になり、それらが相対することから建物様としたものである。これらの柱穴は住居跡を切って掘り込んでいることから、空壕と住居との関係にも類似するとも考えられるが、その前後関係を決定するには資料が乏しく根拠に欠ける。但し、前述した様に平面的な観察によれば住居跡とは区別され、以後に位置づくものと推察されうる。また、建物様柱穴列間の重複関係も認められることからすれば時期を同じにするか否かは不明とするが、何れにしても時期的に異なる何事かが存在するものと考えられる。なお、当遺構は調査時に明らかにそれとして調査したものではなく、整理段階において確認したものであるため、その性格等について詳細に記述することができず誠に残念である。西根・鳥海両遺跡で検出された柵列状遺構については、建物跡同様あまり明白なものではない。それは、一般に古代期に見られる布掘り的な溝で部分的に柵杭を建てたと思われる落ち込み部分を有すものであるが、それらが非常に浅く、あまりそれと解せるまでに致らないものである。しかし、何れもが空壕また濠に直行する様相を呈しており、もし、古地図A点に記す空壕に前述したごとく土塁があったとするならば、それに直行する様相を呈して構築されていたものとも考えられる。これら状況から推察すれば柵列跡としての可能性も考えられるものである。A-No.1は第2濠に平行する段丘崖上に位置し、東西に走り、区画整理で形成された土盛下から検出されており、耕作における攪乱また、耕作による布掘り的な痕跡とは考えられない。また、当遺構には“門”を構成するごとく柱穴状ピットが検出されているが、段丘が急崖を成し、それらに通路的な痕跡が確認されず断定するに足るものでなかった。また、両遺跡から確認された濠は、古地図に記されている第1・2・3濠と空壕（A壕）に一致する。調査時には、第1濠・空壕は全く埋め戻されており、その痕跡を東端部分と南端部分に残すだけであった。第2・3濠は現在も痕跡を明瞭に残し、現在水田・沢として利用されている。濠は台地を東流し、空壕は北流しながら台地を区画する様相を呈す。第1・2・3濠は自然作用によって形成された沢であり、空壕は

一 鳥海B遺跡 —

鳥海Bを東西に区画するための人為的な堀跡である。当台地がこれら地形から要害を誇った柵とすれば濠および空壕がそれに占める役割は改めて記すまでもなく絶大なる位置を占めるものと思われる。また、これが鳥海柵擬定地とされる所以でもある。

それら濠を中心として他遺構の分布状態をみると、第2濠を境としてその広がりを示すことが伺える。また、出土遺物から見ても同様のことが言える。これら遺構の分布状態、遺物の出土状態を総合し判断した場合、当濠の周辺を中心としての生活領域が考えられる。しかし、この推察はあくまで調査範囲内から考えられるもので未調査部分がどのような状態で共存するかは今後の調査に期待される。空壕においては、台地を東西に区画し、その北端は2濠に接し、南端は3濠に接するものであり、その状態は明らかに台地の区画を目的としたものであると思われる。但し、これが何時掘りぬかれたものであるか不明とするが、鳥海B遺跡の本文で記した編年が正確な推察であるとするならば、柵を構成する施設と考えることも可能となる。また現存しないが土塁がその周囲に伴うものであったとするならば、それは可能性の強いものともなるが、それらが確認されない現在、確固たる根拠はない。なお、1濠・空壕には、附属施設か否かは不明とするが、数個からなる階段状遺構・架橋様・土留め様とも考えられるピットが確認されているが、何を示すものか明白でない現在、それについての考察を詳細にわたって記すことは避けたいと思う。

これまで当台地が鳥海柵とした場合に性格を不明とする各遺構がそれに共存するか否かについて各々の推察を行ってみた。前述までのごとく明らかに柵を構成する一施設として把握できる遺構は確認されなかった。但し、濠および空壕について考えた場合、柵の一施設を成すか否かは別として、単に台地を区画また防備的な役割を持つに足るものであることはその状況から判断しても明らかなことであるが、しかし、柵とした場合、上述した根拠だけで足るか否かを危ぶまれる現在、それを補足する他の遺構および施設が確認されていない本調査地においては、その性格も揺らぐ所以の一つであることは明白なことである。

以上両遺跡から発見された性格不明の各遺構を鳥海柵との関連で記してきたが以下については出土する遺物について幾分触れながらその存否を推察するものである。

両遺跡から出土する遺物は大別してA類・B類・C類に分類されるが、本項では特に多く出土するB類について記す。B類に比定される坏においては西根遺跡まとめの項“ピット遺構・長方形を呈す住居跡・第2濠”で記している様に、BI、BII、BIII類にさらに細分される。これら遺物の出土状況は明らかに2分され、BI、BIIIが共伴して出土するのに対しBIIのそれはC類、A類と共伴する。この出土状態は明らかに異なる時代を考えさせるもので、最底でも2時期を想定させる。本文では特徴的なBI、BIII類坏について触れ、柵との関係を考えてみたい。これら坏は、草間氏調査の23号住・当遺跡第2濠・8号住・一部ピットから出土する坏であり、平

泉各史跡から出土する遺物に幾分類似する様相を呈し、ほぼ同時期頃に比定されるものとも考えられるが、それより丁寧な手法をもち、手捏ね様の器種もほとんどみられないことから、それ以前の年代観をもつものとも推察されるものであることはすでに西根遺跡“まとめ”の項で記したため本項では省略する。これら遺物が当遺跡に占める割合は大であるが、確固たる編年が確立されていない現在、柵に伴う遺物か否かは不明とするが、前記推察のごとく平安後半以降に位置づけされる遺物であることはほぼ誤りのないものと考えられる。このように考えた場合、柵の持つ時期観と明らかに重複する時期が伺えることから、柵との共存遺物として捕えることも可能性として存在する。しかし、これら出土する各遺構が暫定的であり、両遺跡を比較した場合に鳥海B遺跡からは、ほとんど出土せず、第2濠を含む西根遺跡南端に位置する8号住・一部ピットに限られ、他はすべて表土内からの出土である。これら出土状態を当調査地が鳥海柵の一部を構成する遺跡であるとして比較した場合、大きく矛盾することになる。鳥海B遺跡は古地図に記される本丸部分にあたるもので空壕および前述した柵列状遺構等を検出した調査地でもあるが、これらからはBI、BⅢ類に比定される遺物は全く出土していない。もし、当遺物が柵に共存するものであるとすれば、端的にその状態から推察すると、当調査地は、各遺構の分布状況も考慮に入れて柵を構成する中心部分とは考えられず、明らかにそれと区別される。しかし、調査地は後の区画整理事業で攪乱また削平されており、各遺構に及ぼしている影響も多大なものであることと、現耕作土がそれに伴う移動土壌であること等を考えれば、調査地内から当遺物が出土しない原因の一つの根拠ともなる。また、2濠、3濠に区画される台地は本調査地から東方部分が全く未調査部分で占められ、全容を明確としない部分が多いことから前記推察云々についてはあくまでも不確定要素の強い考えであり、これらは今後の調査で明らかにされる事でもあろう。なお、第3濠によって区画される台地南端に位置する鳥海A遺跡においては、表土中および各遺構検出面上から鉄滓と共に夥しい量で出土している。何れもそれは、西根遺跡と同様、BI、BⅢ類に類別される坏が共伴し、A類・C類の坏と共伴しない出土状況を示す。また、発見された遺構は、詳細は不明であるが、竪穴住居・掘立柱建物跡・柱穴状ピット群・溝・柵列跡・大型ピット遺構等が確認されている。これら遺構および遺物については鳥海A遺跡本文で記してあるため本項では省略する。また、鳥海柵擬定地との関連も同様である。

これまで両遺跡から発見された遺構と特徴的な遺物を鳥海柵との関連で比較しながら記述してきた。これら各遺構の調査結果と出土する遺物編年から柵としての存否を考えた場合、前項までのごとく明らかに柵を構成する施設であると断定するに足るべき遺構が検出されず、その存否を決定するには若干の根拠に欠けるものであった。しかし、両遺跡から発見された濠および空壕について見れば、前述のごとく要害を跨る柵とするならば、その状態からして可能性を

— 鳥海B遺跡 —

も考えることができる。また、8号住居に関しては、今後に追究されるべき問題を残すが、西根遺跡（草間氏調査）の23号住居から出土する遺物考察を引用すれば、柵に関連する施設とも把握できる可能性を持つものであるが、袈裟襷を施す陶器片等も共伴していることから、それ以降にも推察される遺構である。このように当調査地から発見された各遺構は、性格を不明とするものが多く、あくまでも可能性として推察されるに過ぎないものであり、柵としての性格を補うに足るものではなかった。また、西根遺跡・鳥海A遺跡から出土するBI・BⅢ類に分類される一群の坏・皿等の確固たる編年も西根説を証明する一つの手掛りと考えられることから今後の調査と併行しながら解明されなければならない大きな課題であろう。

最後に、このように幅の広い遺構をもつ当台地の解明が歴史的に大きな意義を持つものであることを記すと共に、柵としての性格をも解明されることを期待してやまない。

（鈴木明美・記）

### 3 出土遺物について

本遺跡に於ける出土遺物は、土師器、須恵器、鉄製品、砥石、陶器片等がある。また、坏類にあっては、特に土師器、須恵器と区分されたB類の坏群がある。

土器類の器種は、坏・台付坏・甕・長頸壺等であり、鉄製品にあっては刀子・鉄斧、紡錘車等である。陶器片は、袈裟襷文壺・常滑甕等の破片とされ、12世紀代の年代観が与えられている。

量的には坏型土器が最も多く、甕類がそれに続く。坏はすべてロクロ成形によるものであり、甕類にあっては、ロクロ不使用の例も散見する。また、唯一点ではあるが、内面に黒色処理を施した甕もみられる。

本項にあっては、特に坏型土器類を中心として進めていくが、以下は、(1)分類とその結果、(2)陶器片について、(3)まとめ、の順に記す。

#### (1) 分類とその結果

##### ・坏型土器について

本遺跡では、反転復元によるものをも含めて82点の坏類が実測された。これらの坏類は、便宜上、下記の三種類に区分した。

**A類**—くすべ色を呈し、胎土は密で焼成良好の所謂典型的な須恵器坏の一群。

**B類**—黄橙色～赤褐色を呈す坏。酸化炎焼成という観点ではC類と同様であるが、内外面に器面調整を施さない一群である。

**C類**—酸化炎焼成による坏で、内面に黒色処理、篋みがき等の調整を有す一群。

この中で、特にB類について補則しておくが、これは本遺跡内に於ける分類上の区分であって、絶対的なものとして位置づけるものではない。B類の設定については、当初から形態的な面に注目してそれを細分したのではなく、色調・焼成・成形技法等からくる各々の相違が、



第13表 鳥海B遺跡・出土坏一覧表

( )内は推定値である

遺構名	実測番号	写真番号	種類 A B C	切離し技法・調整				各部位の測定値と比						写 真 1 図 ジ 版 数 P	そ の 他
				切離し	調整	技法	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	口径 底径	口径 器高	θ°		
Ad 09 竪穴住居跡	1	1	B	?				11.9	4.8	2.7	2.5	4.4	35	23	磨滅が激しい B-I
	2	2	C	?	有	筒 みがき	体部 全面	(17.0)	(4.3)	3.9	3.9	4.3	30.5	"	内外面とも 黒色処理 C-I
	3	3	B	b	無			(11.8)	4.0	(4.8)	2.9	2.4	42	"	歪みあり B-II
	4	5	B	b	?			12.7	4.5	3.9	2.8	3.3	40	"	C-II
Ad 21 竪穴住居跡	5	6	C	b	?			14.6	4.8	5.8	3.0	2.5	47.5	"	住居跡内ビット トからの出土 C-II
	6	7	C	b	?			15.0	4.5	4.3	3.3	3.5	39	"	床面出土 C-II
	7	8	C	?				9.2	4.1	3.3	2.2	2.8	52	"	住居跡内ビット ト出土・小型 C-I
	8	9	B	?				(12.9)	5.6	4.2	2.3	3.1	46.5	"	床面出土 B-II
	9	10	B	b	無			12.2	5.1	4.2	2.4	2.9	50	"	" B-II
	10	11	B	b	?			11.5	5.0	3.2	2.3	3.6	44	24	住居跡内ビ ット出土 B-I
	11	12	B	b	無			12.9	5.8	3.8	2.2	3.4	46	"	" B-II
	12	13	B	b	?			(9.6)	(5.4)	(2.4)	1.8	4.0	49.5	"	" B-I
	13	14	B	?				(12.6)	(4.7)	(3.7)	2.6	3.4	41	"	カマド+床面 上出土 B-II
	14	15	B	?				(13.6)	(4.3)	(3.3)	3.1	4.1	33.5	"	住居跡ビット 出土 B-I
	15	16	B	b	無			(12.9)	5.8	3.6	2.2	3.6	43	"	埋土中 B-II
	16	/	C	?				(12.9)	(5.0)	(5.0)	2.6	2.6	52.5	/	床面
	17	/	B	?				(13.0)	(3.4)	(3.9)	3.8	3.3	39.5	/	"
	18	/	B	b	?			(14.3)	(5.3)	4.3	2.7	3.3	43	/	住居跡ビット+埋土 中
Ag 03 竪穴住居跡	19	23	C	b	無			13.5	6.2	4.6	2.2	2.9	50	25	
	20	96	B	?				(14.0)	(4.0)	4.4	3.5	3.2	42	33	底部欠
	21	97	C	b	?			(13.2)	5.6	5.2	2.4	2.5	53	33	
	22	98	C	?	有	筒 みがき		17.6	5.0	5.1	3.5	3.45	38	33	
	23	/	C	?				(14.7)	(6.7)	4.7	2.2	3.1	50	/	
Ah 06 竪穴住居跡	24	25	C	b	無			(16.7)	6.4	5.6	2.6	3.0	46	26	
	25	26	A	b	無			(16.0)	(7.0)	4.6	2.3	3.5	45	"	
	26	27	B	b	無			(13.2)	5.3	5.0	2.5	2.6	42	"	住居跡内ビット
	27	28	B	b	無			(12.4)	6.0	4.2	2.1	3.0	51	"	床面
	28	29	B	b	無			(14.0)	5.6	4.2	2.5	3.3	42.5	"	住居跡ビット
Ah 18 竪穴住居跡	29	34	C	b	?			(14.3)	5.4	4.3	2.6	3.3	44	27	"
	30	35	C	?				15.7	6.9	7.5	2.3	2.1	59	"	貯蔵穴
	31	36	B	?				(12.7)	(5.5)	(2.9)	2.3	4.4	39	"	埋土中
	32	/	C	b	無			(14.9)	(5.9)	(6.0)	3.4	3.3	53.5	/	"
	33	/	A	?				(13.4)	5.8	3.4	2.3	3.9	43.5	/	"

— 鳥海B遺跡 —

遺構名	実測番号	写真番号	種類 A B C	切離し技法・調整				各部位の測定値と比						写 真 1 図 版 数 P	そ の 他
				切離し	調整	技法	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	口径 底径	口径 器高	$\theta^\circ$		
Aj 50 竪穴住居跡	34	43	B	b	無			(12.6)	5.3	3.1	2.4	4.1	39	28	埋土中
	35	44	B	b	無			(12.7)	5.2	3.8	2.4	3.3	44	"	床面
	36	45	B	b	無			12.6	5.3	4.0	2.4	3.2	47.5	"	
	37	46	B	b	無			(14.7)	5.9	4.5	2.5	3.3	44.5	"	床面
	38	48	B	?				(11.5)	5.2	2.9	2.2	4.0	42	"	"
	39	49	B	b	無			(14.2)	5.9	5.0	2.4	2.8	50	"	埋土中
	40	50	C	b	無			(13.5)	6.3	4.5	2.1	3.0	52	"	
	41	/	B	?				(11.6)	(6.2)	(3.9)	1.8	2.9	52.5	/	
	42	/	C	?				15.7	6.2	5.9	2.5	2.7	50.5	/	
	43	/	B	?				(12.2)	(5.1)	3.6	2.4	3.4	44	/	
Bd 68 竪穴住居跡	44	52	C	b	無			(15.1)	(6.1)	4.4	2.5	3.4	45	29	床面
	45	53	B	b	無			(14.1)	5.2	4.8	2.7	2.9	47	"	貯蔵穴
	46	54	B	b	無			14.2	6.3	4.6	2.3	3.1	48.5	"	カマド
	47	55	B	?				(13.1)	(6.6)	3.5	2.0	3.7	46	"	床面
	48	56	B	b				(11.6)	4.6	2.8	2.5	4.1	40	"	カマド
	49	57	B	b	無			11.8	5.5	2.9	2.1	4.1	43.5	"	貯蔵穴
	50	/	B	?				(12.5)	(4.8)	(4.2)	2.6	2.9			カマド
Bd 74 竪穴住居跡	51	60	C	欠失				(13.0)	(5.8)	(4.1)	2.2	3.2	46	29	住居跡内ビット
	52	/	B	b	無			(15.1)	(5.9)	(4.1)	2.6	3.7	41.5	/	床面
Bg 62 竪穴住居跡	53	61	C	b	?			(14.7)	(6.3)	4.4	2.3	3.3	45	30	ビット
	54	62	C	b	?			(15.5)	(7.7)	3.5	2.0	4.4	40	"	
	55	63	C	?				(14.3)	6.9	4.8	2.1	3.0	47.5	"	ビット
	56	64	C	b	無			(15.6)	(6.2)	5.5	2.5	2.8	49	"	"
	57	65	C	b	無			15.5	4.7	4.9	3.3	3.2	42	"	
	58	66	C	b	無			15.0	6.1	5.5	2.5	2.7	48.5	"	ビット
	59	67	C	b	無			(13.6)	(5.0)	4.5	2.7	3.0	45	"	"
	60	68	C	b	無			16.2	6.0	6.3	2.7	2.6	51	"	"
	61	69	A	b	無			(15.7)	5.6	4.9	2.8	3.2	43	"	住居跡内ビット
	62	70	A	b	無			15.5	6.4	4.6	2.4	3.3	48	"	"
	63	71	A	?	有	手持へ ラ削り	底部	15.0	6.7	5.3	2.2	2.8	50.5	31	埋土中
	64	72	A	b	無			14.9	5.3	4.1	2.8	3.6	43.5	"	壁
	64	73	A	b	無			16.1	6.5	6.3	2.5	2.6	50.5	"	住居跡内ビット
	65	74	B	?				(14.8)	(4.6)	4.4	3.2	3.4	39	"	カマド
67	75	B	b	無			13.7	5.8	4.9	2.4	2.8	51	"		

遺構名	実測番号	写真番号	種類 A B C	切離し技法・調整				各部位の測定値と比						写 真 図 版 数 P)	そ の 他
				切離し	調整	技法	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	口径 底径	口径 器高	$\theta^\circ$		
Bj 62 竪穴住居跡	68		C	b	無	/	/	(14.7)	(6.3)	4.4	2.3	3.3	45		住居跡ビット
	69		A	b	無	/	/	(15.9)	(6.5)	(4.8)	2.4	3.3	44.5		
Bd 03 竪穴住居跡	70	80	B	b	無	/	/	14.5	5.5	4.7	2.6	3.1	41.5	32	床面
	71	81	B	?				(13.)	(5.9)	(3.5)	2.3	3.9	43.5	"	埋土
	72	82	C	b	無	/	/	(15.1)	(5.8)	4.7	2.6	3.2	45	"	カマド
	73	83	C	b	無	/	/	15.3	6.4	5.3	2.4	2.5	50.5	"	床面
	74	84	A	b	無	/	/	(12.5)	5.5	3.2	2.3	3.9	40.5	"	B類的部分もあり
	75	85	B	b	無	/	/	12.5	5.3	4.0	2.4	3.1	46	"	
	76	86	B	b	無	/	/						41	"	埋土
	77		B	b	無	/	/	(14.4)	4.0	5.9	3.6	2.4	42		埋土
Cc 53pit	78	90	B	b	無	/	/	(14.4)	(6.1)	5.1	2.4	2.8	49.5	33	
	79	91	C	?				14.1	5.9	4.7	2.4	3.0	48.5	"	
	80	92	C	b				16.3	6.9	5.1	2.4	3.2	42.5	"	
	81	93	B	b	?			13.5	5.9	4.3	2.3	3.1	48.5	"	
	82	94	C	b	無	/	/	13.6	5.3	5.3	2.6	2.6	50.5	"	

従来の知見からする土師器・須恵器とは区別し得るという性格を有す土器群を総称しているのである。従って、B類中には、広義の意味で、赤褐色土器・土師質土器・須恵系土器等と呼称される坏類をも含むものである。

出土坏類82点の内訳は、A類9点、B類42点、C類31点である。切離し技法は、判別するもので56点であるが、すべて回転糸切による。他の26点は、剝離・欠失・磨滅、あるいは再調整のため不明である。再調整を有する坏は、A類1点、C類2点の3点であるが、何れも再調整のために切離し痕が消え去っている。全体として、磨滅している例が多く、遺存状況は芳しくない。最終的に切離しの判明する各類の数は、A類7点、B類28点、C類21点である。その詳細については、前記の分類一覧表（第13表）を参照して頂きたい。

以上82点についての一覧表であるが、胎土や色調、形態的な特徴については遺構毎の出土遺物の項で記したので、ここでは計測値を中心に記した。口径：底径、口径：器高の比は、小数



第20図

点第2位以下四捨五入によるものである。また、外傾角度( $\theta$ )については、第20図を参照して頂きたい。

以下については、**a**、数値による分類、**b**、形態による分類、の順に記述していくが、遺存状況の悪い坏、特に1/2以上欠失している反転復元などによる場合のものに

ついで、適宜、取捨選択している。

a 数値による分類結果

この場合の分類は、正確な計測値を必要とするので、反転復元による坏は除外してある。従って、ここでは、A類4点、B類13点、C類12点の計29点についての分類である。29点の内訳については下表の通りであるが、各々の数値については坏分類一覧表(第13表)を参照されたい。

第14-1表

種類	実 測 番 号
A	No. 62、63、64、65
B	No. 1、4、9、10、11、36、46、49、67、70、75、76、81
C	No. 5、6、7、19、22、30、57、58、60、73、79、80

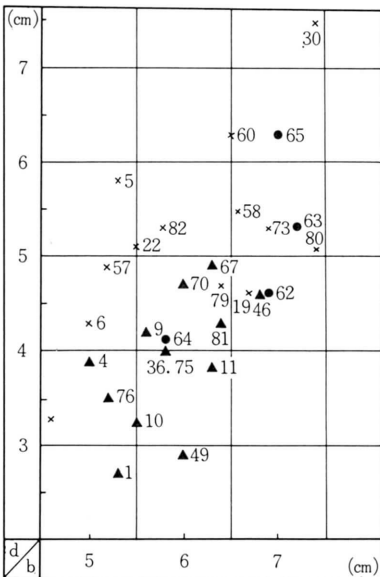
これらを数値的に分類すると、各類は各々次の様になる。

第14-2表

種類	a. 口 径	b. 底 径	d. 器 高
A	14.9 ~ 16.1 cm	5.3 ~ 6.7 cm	4.1 ~ 6.3 cm
B	11.5 ~ 14.5	4.5 ~ 6.3	2.7 ~ 4.9
C	13.5 ~ 16.2	4.5 ~ 6.9	4.3 ~ 6.3

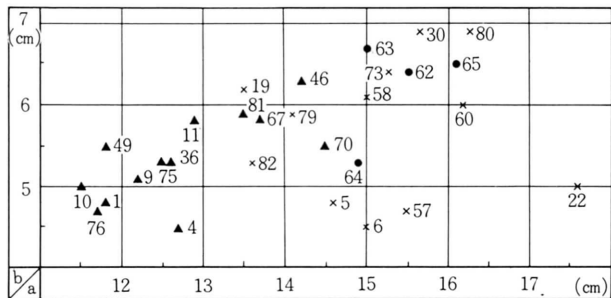
但し、C類にあって、極端に小型のNo.7を除いている。

この分布状況については、客観的にみてB類の小型化の傾向が看取されよう。これらは、度数分布に図示すると端的に表われる(第21-a図参照)。即ち、B類にあって底径値そのものの分布は、他の坏類と大差ないが、口径、器高の計測値は概ね低い分布を示していることが察せら



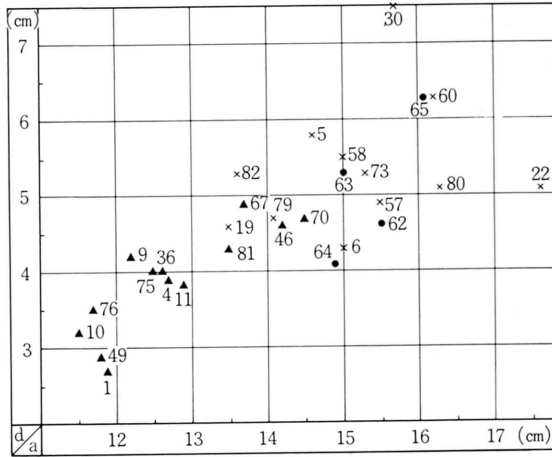
21-a図

れよう。坏の大小関係から見れば、口径の小さいことは当然のことであろうが、器高と底径との関係についてみる限りでは、C類のあり方と異なる部分がある。B類の場合は、A類もそうである様に器高計

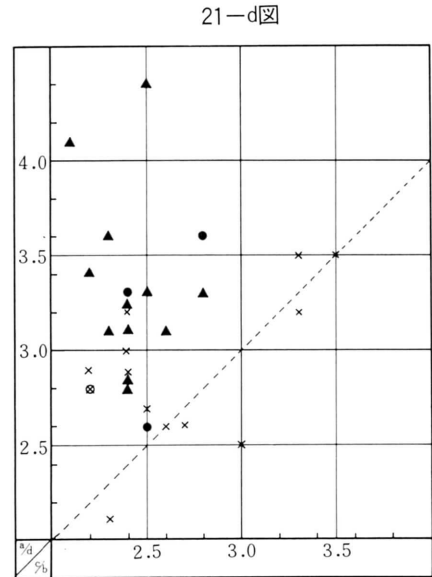


21-b図 ● - A類、▲ - B類、X - C類

測値が底径のそれを上まわることはないが、C類にあっては、各々の数値が逆転する例が4点もある(Na. 5、22、57、60)。このことは、Na. 7やNa. 76の如く小型のB類坏にほぼ類似したC類の存在と相俟って、C類自体にばらつきがあることを示している。数値からくるばらつきの度



21-c 図



合は形態的な面にも影響を及ぼすものであろうから、それだけ器形も統一性に欠ける。しかし、多様な中であっても、客観的に見て器高が高く、体部にふくらみを有するという土師器坏類の一般的な特徴を呈する例が多く見られることはいうまでもない。従って、ここでは特に計測値からくるちらばりがB類のそれより目立つという程度に留める。一方、B類の側からしてみれば、C類にみられたような形態のばらつきは同様にあるものの、数値的にはそれほど顕著ではなく、また、特に小型化しているという現象面を加味すれば、少なくともC類よりは製作段階におけるある程度の規格性が感じられよう。もしそうであるならば、このような相違は、量産を可能ならしめたB類と、再調整の伝統を失ったとはいえ、依然として黒色処理・篋みがきという旧来の仕上げ技法を踏襲し続けるC類との生産体制に関わるものと思われ、特に後者の場合は、集落内の土師器工人の個性から派生してくるものであろう。

また、A類については、計測値そのものについてみれば、C類のあり方と大差ない分布を示しているが、口径：底径、口径：器高の比率からなる分布状況では、C類と様相を異にしており、どちらかといえばB類的なあり方を示す。これはB類がそうであったように、A類であっても、器高計測値が底径のそれを上まわることがないということからくる結果である。

尚、外傾角度( $\theta$ )については、計測値を一覧表に記すにとどめる。

**b 形態・技法による分類**

形態については、体部・口縁部等の様子によって分類されるが、この他には、各々の大小関係によっても左右されることでもあろう。坯の大小関係については計測値にそのまま現われてくることでもあるから、ここでは **a** と関連づけて分類する。形態に関わる分類基準としては、体部凹凸の有無について、また口縁形では、外反・外傾・直口等の特徴を抽出した。これに、切離し後の再調整の有無等を加えて、総合的な観点から各類は次のように分類される。

- A類**
  - I 形態はA-Ⅲ類的であるが、切離し後に手持篋削りを施している。(A-I類)
  - II 体部は直線的な立ち上がりを見せ、凹凸も特に顕著。口縁は外傾し、器高は高目である。(A-II類)
  - III 体部にふくらみを持ち、底径に比して器高が低目である。(A-Ⅲ a類)
    - 上記のタイプで特に小型の坯。(A-Ⅲ b類)
- B類**
  - I 口径13cm以上、器高4.2～5.1cm内にあり、B類の中では a/d 値が相対的に低目である。口縁は外反するものが多い。体部の凹凸が目立つものと、そうでないものとが半々である。(B-I類) ※ a は口径、d は器高
  - II 口径12cm台、器高は3.8～4.2cm内に存す。口縁形は一定しないが、外傾と外反するものが同数ある。大小関係で見れば、B-IとB-Ⅲの中間的存在である。(B-II類)
  - III 口径11cm台、器高は3.5cm以下の小型坯。口縁は外傾するもので占められ、口径に比して器高が低目である。(B-Ⅲ類)
- C類**
  - I 内外面の全面、または一部に黒色処理・篋みがき等の調整を有す。切離しは不明。(C-I類)
  - II 外面に器面調整を施さない一群。判別可能の切離しはすべて回転糸切による。(C-II類)

以上、各類についての概略を記したが、以下については各々の具体例について記す。

**A類**

A類は、最終的には、A-I類1点、A-II類2点、A-Ⅲ類5点、の計8点についての分類である。底部の切離しは、再調整あるいは剝離のため不明な2点を除き、他は回転糸切によるものであり、後者は何れも無調整である。

A-I類は、Bg62竪穴住居跡出土のNo.63が該当する。これは唯一点ながらも、特に底部に手持篋削りを施していることから区分されたものである。再調整によって切離し痕は消滅しており、また、形態的には、A-Ⅲ類としたNo.25、62等に類似したものであろうが、器高が若干高めである。

A-II類は、No.61、65の2点であり、これらもBg62竪穴住居跡出土である。何れも底径に比して器高が高く、その差は各々0.2～0.7cm程度である。

A—Ⅲ類は、No.25、33、62、64、74の5点である。No.25はAh06、No.33はAh18、No.62、64はBg 62、No.74はBd03竪穴住居跡出土である。これらの坯は、体部にふくらみを有し、器高が低目になっている。底径との差は1.2～2.4cm以内に存している。このうち、No.33、74は、特に小型であることから更に細分してA—Ⅲb類とし、No.25、62、64の3点はA—Ⅲa類と分類している。A—Ⅲb類中のNo.74は、一見した限りではB類の範疇にも含まれるような色調を呈しているが、口縁の一部がくすべ色に焼けており、また、他のB類に比して硬質であることからA類と分類したものであるが、須恵器の焼き損じなのであろう。残るNo.33は、反転復元によるものであるが、明らかに小型のA類である。これらの2点はどちらかといえば、小型のB類に近い特徴を有している。

### B類

B類は、反転復元のものをも含めて42点の実測である。このうち14点が切離し不明。残る28点はすべて回転糸切による。後者において再調整があると断言できる例はなく、無調整のものだけであろうと思われる。ここでの分類は、切離しや調整等については勘案せず、特に坯の大小、形態によるものである。但し、42点全部について分類したのではなく、甚しく残りの悪い坯については除外しており、最終的には26点について記したものである。

B—I類は、No.26、28、37、39、45、46、67、70、78、81の10点。このうちNo.26、28、67、70、78の5点は、体部の凹凸が目立つものであり、他の5点はそうではない。前項a・b・c図には、No.46、67、70、81の4点を抽出して記しているが、この場合については何れもが図中のB—Ⅱ・Ⅲ類より、口径・底径・器高とも大きい数値を示している。しかし、d図にあっては、B—Ⅱ類と大差ない分布を示している。また、No.46とNo.81は同図中に於いて各部位の比が同値を示している。

B—Ⅱ類は、No.4、8、9、11、27、35、36、75の8点がある。この一群は、c図に端的に表われている。このことは分類上の観点からみれば、B—I類も含めて当然のことでもあろうが、a・b図にあってはほぼ同様の分布を示している。また、d図にあっては、B—I類に近い範囲に分布するが、このあり方は、後述するB—Ⅲ類のそれとは様相を異にしている。

B—Ⅲ類は、No.1、10、12、34、38、48、49、76の8点。端的に言って小型の坯の一群である。前項で抽出されたNo.1、10、49、76は既述の坯群と同様に、a・b・c図にあって、ある程度のまとまりを持って分布している。しかし、d図にあっては、特に口径と器高との比に於いてばらつきがみられる。これは、口径に比して特に器高が低いということからくる結果でもあるが、それだけ体部の立ちあがりや緩やかになっている。

### C類

C類は、22点についての分類である。数値的にはc図の如く口径、器高がB—Ⅱ・Ⅲ類より総じて高い。底径については、前項でも記した通り、B—I～Ⅲ類までの範囲からそれ以上にまで及び、特に一定しない。全体として器形的にはばらつきが多く、特に形態的な一面から

— 鳥海B遺跡 —

だけの分類は困難である。従って、ここでは先にも記した通り成形技法の観点に着目し、大別して二種類に分けた。

C-I類は、No. 2、7、22、23、55の5点。このうちNo. 7については、本遺跡内にあって最も小型の坏型土器で、異色の存在ではあるが、これをもって一群の設定はせず、例外として取り扱うものの、本遺跡の分類区分上において一応C-I類の条件を満たすということで、同類の範疇に含めてある。切離しの不明な点については、No. 2、22が全面にわたる再調整のため、また他の3点にあっては剝離、磨滅のためであるが、No. 23は体部下端に篋みがきの残痕があることから、本来的には前者と同様に再調整の結果に依る可能性が強い。尚、No. 2、22の2点は、坏類にあって口径の大きいものであるが、何れも体部と底部の境界が不明瞭である。

C-II類には、No. 5、6、19、21、24、29、30、40、56、57、58、59、60、73、79、80、82の17点があるが、これらは判明する切離しが回転糸切によるものであり、観察した限りでは再調整の痕跡を残していない坏群を一括したものである。ここでは、器形的に類似した坏をピックアップすることも可能であろうが、ばらつきが多いということで敢えて細分はしていない。17点中、内面に黒色処理があるものの、篋みがきの単位が不明な坏が8点あり、外面にあって磨滅しているものも多い。器形的には、直線的に立ち上がる例もあるが、大旨ふくらみを有している。また、数値的には、器高計測値が底径のそれと同値か、それ以上の値を示す例が5点ほどある。

・甕型土器について

甕型土器は33点の実測であるが、大半は反転復元に依るものであり、完形品は少ない。種別で見れば土師器が多く須恵器は微少である。従って、ここでは土師器に限定して分類することとする。ロクロ使用の有無によって大別二種に分類され、ロクロ使用の甕についてはその大小関係や調整等によって更に細分している。尚、ロクロ不使用の甕については、法量・器形等によって細分することも可能であるかもしれないが、点数が少ないため一括してK-I類としている。

- K-I — ロクロ不使用 (K-I類)
- K-II — ロクロ使用
  - a 口径17cm以下の小型、切離しは回転糸切 (K-II a類)
  - b 口径18cm以上 (K-II b類)
  - c 黒色処理、篋みがきの仕上げを有す (K-II c類)

K-I類は、No. 105、119、120、122、123、124、127の7点である。No. 105はAd21竪穴住居跡出土。他の6点はAh18竪穴住居跡出土であるが、No. 127は体部下端から底部にかけての破片である。口縁は外反するものが多く、半数以上は体部の外面に篋削り痕を残している。内面にあっては刷毛目、篋ナデ等の痕跡が若干残っている例もあるが、大半は磨滅の度合が激しく、仕上げの技法は不明瞭である。形態的なタイプとしては、口縁が体部に直結するものと、肩部に僅かながらも段を残しているものがある。口径は15.2～22.8cm内に分布し、K-II aにみら



第 15 表 鳥海 B 遺跡出土甕型土器一覽表

遺構名	実測番号	写真番号	種別	ロクロ使用の有無	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大胴径(cm)	その他の	他
Ad 09 竪穴住居跡	101	4	土師器	ロクロ使用	(22.3)			(23.2)	焼成良好。	
	103	18	"	"		5.5			体～底部片。焼成良好。	
Ad 21 竪穴住居跡	104	19	"	"	(19.0)			(15.8)	体部下半に筒削り。焼成良好。	K-IIb
	105	20	"	ロクロ不使用	(40.0)			18.5	体部中央より下位に筒削り。×印あり。	K-I
	107		須恵器	ロクロ使用	(23.5)			(21.3)	叩目痕あり。口縁部が特徴。	
	108		土師器	"					体部外面に筒削りがあると思われる。	K-IIb
Ag 03 竪穴住居跡	109	22	"	"	12.6	7.9	14.8	15.4	回転糸切、巻上げ痕がある。	K-IIa
	112	31	"	"	(19.0)			(17.0)		K-IIb
Ah 06 竪穴住居跡	113	32	"	"	11.3	5.0	9.6	11.3	回転糸切に依る。	K-IIa
	114		"	"	(18.6)			(16.0)	口縁～体部片。	K-IIb
	115		"	"	(16.7)			(15.8)	体部の凹凸が顕著。硬質で須恵器的。	K-IIa
	116		"	"	(16.7)			(16.0)	体部中央より下位筒削り。巻上げ痕あり。	K-IIa
	117		"	"	19.8			23.0	体部外面筒削りと思われるが単位不明。	K-IIb
	118		"	"	(20.1)			(20.7)	体部外面下方筒削り。凹凸が激しい。硬質。	K-IIb
	119	40	"	ロクロ不使用	17.0			(16.5)	口縁部直下より筒削り。頸部と胴部直結。	K-I
	120	38	"	"	20.0			(20.0)	外面に筒削り。内面は刷毛目か。	K-I
Ah 18 竪穴住居跡	121	39	"	ロクロ使用	18.0	(8.5)	(27.0)	18.0	体部凹凸顕著。外面筒削り。焼成良好。	K-IIb
	122		"	ロクロ不使用	(23.8)			(21.8)	口縁部直下より筒削り。内面は刷毛目。	K-I
	123	41	"	"	(22.8)			(21.0)	口縁部直下より筒削り。内面は横ナデ。	K-I
	124		"	"	15.2			(14.2)	体部外面に削りか。磨滅が激しい。	K-I
	125	42	"	不明		8.0			黒色処理・窪みがきあり。軟質である。	K-IIc?
	126		"	ロクロ使用	(15.6)				磨滅が激しいが、体部に凹凸痕を残す。	K-IIa
	127		"	ロクロ不使用		9.3			外面削りと思われる。底部の器肉が厚い。	K-I
	Bd 68 竪穴住居跡	131	59	"	ロクロ使用	10.3	7.5	10.3	11.3	回転糸切に依る。
132		58	"	"	22.5			(21.3)	外面体部中央に筒削りあり。	K-IIb
133			"	"	(18.0)			(16.3)	磨滅が激しく詳細不明。	K-IIb
Bd 74 竪穴住居跡	134		"	不明		(7.8)			磨滅が激しく成形・調整技法等は不明。	
	135		"	ロクロ使用	22.0			(20.8)	外面体部中央より筒削り。焼成良好。須恵器的。	K-IIb
Bd 03 竪穴住居跡	136		"	"	(22.0)			(20.3)	比較的硬質である。	K-IIb
	137	76	"	"	(23.8)			(22.0)	黒色処理・窪みがき。焼成良好。体部凹凸あり。	K-IIc
	138	88	"	"	(23.9)				口縁～体部片、内外面磨滅が多い。	K-IIb
	139	89	"	"	(15.2)				巻上げ痕あり。	K-IIa
	Cc 53 Pit	141		"	(19.7)				焼成良好。	K-IIb

( ) は推定値。最大胴径のそれについては、残存部分のものを含む。

れるNo.113、131のような特に小型の器種はみられない。

K-Ⅱ類は、前述の如く3タイプに分類したが、K-ⅡaにはNo.109、113、115、116、126、131、139の7点。K-ⅡbはNo.101、104、108、112、114、117、118、121、132、133、135、136、138、141の14点。K-ⅡcにはNo.137等がある。

K-Ⅱaは、口径が17cm以下の小型の甕である。最も小さいものはNo.131で、口径が10cm弱程度である。No.109、113、131の3点は、何れも回転糸切による切離し痕をそのまま残しており、これらは最大胴径の計測値が口径のそれと同じかそれ以上のものである。外面の仕上げについては、巻上げ痕を残しているNo.116に篋削りがみられるが、他のものについては反転復元による甕をも含めて明らかではない。また、口縁は外反するものばかりであるが、口唇部の形状は一定しない。

K-Ⅱbは、口径が18cm以上の甕である。土師器としては焼成がよく硬質なものも含まれ、中には須恵器的な例もある。体部外面については篋削りを施すのが普通であるが、特に硬質なものについては明瞭である。

K-Ⅱcは、特に黒色処理・篋みがきを有する甕として区分したものである。No.125はロクロ成形に依るものかどうかは判然としないが、仕上げの調整技法に着目しNo.137と同類に扱っている。

## (2) 陶器片について

### (a) 常滑片 No.143

壕と推定される遺構内からの出土であり、壕底に近い埋土下部に存在していたものである。最大巾9.2×7cm、厚さ8mmほどの破片である。輪積みの継目部分に押印を有しており、外面には、特に釉がかかっているというほどではないが、赤黒く変色した感じに見える。内面全体には、淡緑色の釉がみられるが、その色調は一様でなく濃淡がある。また、細かいひび割れ痕が無数にある。断面にみる胎土は灰白色を呈し、非常に硬質でしまっている。Cc53ピット出土の灰釉袈裟襷文壺片よりは明らかに堅くできあがっている。素地は荒い土のように思われ、1mm大の粒石が混入している。

上方部分に見える若干のくびれは肩部の付近と推察されるが、前述の如く特徴から常滑風の経甕の範疇に入る遺品であろう。

年代的には、樽崎彰一氏によって12世紀前半頃の常滑であろうとの御教示を得ており、No.140や、西根遺跡出土のNo.1との関わりの中で、同様の用途に供されたものと推察される。これらは生産の場においては時期的に差があるものの、実際場面では同じ頃に使用されたものと思われる。当然、経塚関連の遺品として論ぜられるべきものであろうが、本遺跡内<sup>注1</sup>にあって直接的に関与すると断定できる遺構は存在しない。

常滑の製品は、総体的には日常雑器として位置づけて差支えないが、宗教用の容器として貴族・社寺・武士階級に用いられた例も少なくない。現に各地で出土する常滑は、宗教的遺跡からのものが圧倒的に多い<sup>注2</sup>。岩手県内における常滑の出土例は、別表の如くであるが、本遺跡と西根遺跡の例を除き、他はすべて経塚・社寺に関連しており、同様の傾向である。このことは本遺跡にあっても、同時に出土する袈裟襷文壺の特性と相俟って、何らかの宗教遺構が存在した可能性を示唆するものであろう。以下については、古常滑と本遺跡との関わり概略について記すが、宗教的な一面での詳細については、西根遺跡・出土遺物の②陶器片についての項を参照されたい。

遺構の項でも記した通り、本遺跡は鳥海柵の擬定地内本丸と推定される部分に存在している<sup>注4</sup>。No.142は、その柵内の壕とも目される大溝からの出土である。この常滑片は、自然堆積の様相を呈す埋土内からの出土であるが、大溝の最下層、端的に言えば、基底部直上付近の層に存していたものである。他の遺物量が非常に少ない中でのあり方は、遺物の取扱いそのものについても不確定的な要素を多分に持つが、ここでは、溝を形成した時期に近い流入と捉えることも可能であろう。しかし、若しこの溝が鳥海柵に関わるものとするならば、常滑片の上限が12世紀代中葉の年代観を与えられることと、11世紀代の半ば頃に推察される同柵跡の築城年代とはかなりの隔りがあることになる。本遺跡内における大溝のあり方は、地形的にみて何らかの区画を意図したものと推されるが、結論的には性格不明である。このような大溝は、西根遺跡<sup>注5</sup>に於いても確認されているが、この場合は墓域を区画するかの如くあり方を示している。他例としては、時期、規模は異なるが、北上市尻引遺跡・水沢市石田遺跡等の集落内にも散見する。特に石田遺跡でのあり方は、掘立柱建物群や竪穴住居跡群と何らかの関係をもつと考えられる。にも拘らず、本遺跡の大溝は今の所、鳥海柵に関わる施設とみるか、それとも他の何らかの区画を意味するものであるかは明確にし難い。ただ、既述の常滑片のあり方からみれば、前者はより不確定的な要素を持つことは否定しない。

何れにしろ、この大溝の構築は、Bd03竪穴住居跡を壊していることから、それよりは新しく、また常滑片が混入する時期よりは降るものではあるまい。もち論、下限は確定するものではないが、大溝内に於ける他の遺物が殆んどないことと相俟って、少なくとも本遺跡内の大半の遺構とは、関わりが少ないと思われる。どちらかといえば、新しい時期の遺物を伴出する西根遺跡に近いものでもあろうか。若しそうであるとすれば、これは両遺跡に出土した袈裟襷文壺片の年代観に関わるものでもあろう。また、この観点では、その後あって西根遺跡は存続したものの、本遺跡の大半の遺構は、もっと早い段階で既に廃絶していたとも考えられる。

注1 経塚等の存在の想定については、本遺跡に隣接する西根遺跡の「灰釉袈裟襷文について」の項を参照して頂きたい。

— 鳥海B遺跡 —

注2 日本陶磁器全集、常滑・渥美 中央公論社、S52.1.20。

注3 同分冊、西根遺跡、第12表参照。

注4 注1に同じ。

注5 金ヶ崎町史によれば、“鳥海柵築城の年代は明らかではない。しかし、宗任の父頼時は、永承6年（1051年）に「陸奥に堀起す」と記しているが、永承の初め頃は、既に築城は完成していたのではないかと思われる。”としている。

注6 西根遺跡、岩手県埋文センター文化財調査報告書第6集、昭和54年3月。

(b) 灰釉袈裟襷文壺について No.140

Cc53ピット内からの出土破片である。埋土からの出土のため、同ピット内からの伴出土器類と明確な共伴を示すと断定できるものでもないが、本遺跡にあっては、No.142の陶器片と共に年代決定のための貴重な資料である。

No.140は、最大巾6×5.5cm、厚さ1cmほどの破片である。灰色の砂質に富んだ素地で、堅い仕上がりである。外面には薄い黄白色の灰釉が施されているが、線刻部分を除いて剝落しており、釉そのものはあまり目立たない。線刻の文様は、半截竹管による2本の平行沈線で描く所謂袈裟襷文風のものである。この種の作風を持つ遺品は、近年、渥美半島の古窯址から出土しており、他に代表的な例として、愛媛県松山市石手寺出土、岩手県西磐井郡平泉町金鶏山出土の灰釉袈裟襷文壺等が知られる。何れも経塚関連の遺構からの出土であり、写経などを納める経筒の外容器であったと考えられており、用途は限定されている。また、製作年代についても同様である。<sup>注1</sup>

時代的には、前述の2点の灰釉袈裟襷文壺が共に平安時代の作とされ、また、渥美半島古窯址との関わりで考えられている。元来、平安期から鎌倉時代にかけての経塚からは、この種の器形を呈する壺類が外容器として出土する例が多いという。しかし、その多くは常滑風のものであり、このような例はまれであるといわれている。<sup>注2</sup>

本遺跡にあっては、更にNo.143の常滑片が出土しており、また、隣接する西根遺跡からは、No.140と全く同様の袈裟襷文を有す破片が2個体分出土している。1点は住居跡内から、もう1点は南段丘面上からの出土である。今のところ、県内にあっては、中尊寺を除いて出土例の報告はなく、まさに特殊な存在といえよう。このことは、この種の遺品が限定された用途内の使用であり、また、他に転用されたものでないとする限りは、宗教的な遺構の存在を想起しなければならないことでもある。具体的には、社寺、経塚等が考えられよう。

No.140の年代観については、名古屋大学樽崎彰一氏によって12世紀前半の作とされ、産地も渥美半島古窯址であるとの御教示を得ている。これは、特に平安時代末期の遺品とされる平泉金鶏山出土の袈裟襷文壺の年代観にも近く、岩手県南地方に於ける当時の一つの文化圏を窺わせるものでもある。端的に言って、平泉藤原氏との関わりであるが、このことについては西根遺跡に一括記述しているので参照されたい。<sup>注3</sup><sup>注4</sup>

注1 日本陶磁全集、常滑・渥美、中央公論社、S52.1.20、原色日本の美術19、陶芸、小学館、S52.7.1。

注2 日本の陶磁、古代・中世編第4巻、常滑・渥美・猿投、中央公論社、時代別常滑名品図録、光美術工芸株式会社、沢田由治編、S49.11.15。

注3 原色日本の美術19 陶芸、小学館、S52.7.1。

注4 西根遺跡、灰釉袈裟襷文壺についての項参照

### (c) その他

器種不明の遺物No.142がある。No.143の常滑片が出土した壕跡内からの出土で、最大巾12.5×10cm大、厚さ約0.8cmの破片である。色調は土師器的で明褐色を呈す。胎土は比較的良質で緻密なでき上がりである。横位方向に4本の沈線を配し、1カ所には推定径1.2cm大の搾孔がある。この孔は、断面に直交する角度ではなく、若干斜め方向についている。また、断面から察する全体の形状は円筒形を呈するものと思われ、従来から知見する土師器としての器形には例がなく、中世陶器の範疇にもかかるものであろう。従って、形態的には経筒の可能性もあり、No.140、142との関連で捉えるべきものかもしれないが、詳細については<sup>注</sup>ふれない。

注 樽崎彰一氏によれば、「経筒の可能性もあるが、結論的には器種が不明であり、断定できない」としている。

### (3) まとめ

本遺跡出土の遺物の共伴関係については第16表の如くである。これらは大別して下記の2群に区分される。

即ち、I群…A、B-I・II、C、K-I・II類の共伴、II群…B-II・III、C、K-IIbの共伴による二者である。I群にはAh06、Ah18、Bg62 竪穴住居跡、II群にはAd09、Ad21、Aj50、Bd68 竪穴住居跡等が挙げられる。これら両群に共通する土器は、B・C類、K-IIbである。各群設定の根拠は、端的に言って細分したB類の各々のあり方と、A類との共伴関係に依るものである。つまり、I群は須恵器A類を含み、B類にあってはB-IIIとした小型の坏類が存在しない遺構であり、II群はA類がなく、B類を含むという相違で大別したものである。これらの他に、前述の如き明瞭な共伴関係を示さないAg03、Bd03 竪穴住居跡等があるが、これらはI群に近い範疇として捉えても大過ないあり方を示す。この中でBd03 竪穴住居跡は、A類とB-III類を含むという点で、I・II群の過渡期的な様相を呈しているともいえる。

I群に於けるAh18 竪穴住居跡にはロクロ不使用のK-I類が主体的に出土しており、片寄った傾向をみせているが、他のI群とした遺構にも破片ながら適量の出土がみられることはいうまでもない。また、ここではK-IIaとしたロクロ使用の小型の甕が一点を除いて、I群としたものやそれに近いと考えられる遺構に集中しているのが特徴であり、同類におけるセットを構成するものとも解される。

B類は、第16表にみられるように、B-I単独の出土例はあるが、B-IIかB-IIIの場合は、(B-I・B-II)、(B-II・B-III)、(B-I・B-II・B-III)という組み合わせで存在して

第 16 表 鳥海B遺跡出土遺物分類毎共伴一覧表

遺構名	分類区分	A-I	A-II	A-III	B-I	B-II	B-III	C-I	C-II	K-I	K-IIa	K-IIb	K-IIc	その他
Ad09 竪穴住居跡						No. (3)、4	No. 1	No. 2			No. 101			刀子
Ad21 竪穴住居跡					No. (14)、(18)	No. 8、9、11、(13)、(15)、(17)	No. 10、(12)	No. 7	No. 5、6	No. 105	No. 104、108			高台付坏 長頸甗片 鉄器
Ag03 竪穴住居跡					No. (20)			No. 22、23	No. 19、21		No. 109			砥石
Ah06 竪穴住居跡				No. 25 (A-IIIa)	No. 26、28	No. 27			No. 24		No. 113、115、116	No. 112、114、117、118		高台付坏
Ah18 竪穴住居跡				No. 33 (A-IIIb)		No. (31)			No. 29、30	No. 119、120、122、123、124、127	No. 121、126		No. 125	高台付坏
Aj50 竪穴住居跡					No. 37、39	No. 34、35、36、(43)	No. 38、(41)		No. 40					高台付坏 石 砥
Bd68 竪穴住居跡					No. 45、46、(47)	No. 50	No. 48、49		No. (44)		No. 131	No. 132		
Bd74 竪穴住居跡					No. (52)				No. (51)		No. 133			No. 134
Bg62 竪穴住居跡	No. 63	No. 61、65		No. 62、64 (A-IIIa)	No. 67、(66)			No. 55	No. 56、57、58、59、60			No. 135、136		鉄器
Bd03 竪穴住居跡				No. 74 (A-IIIb)	No. 70、(77)	No. (71)、75	No. 76		No. 73		No. 139	No. 138	No. 137	鉄器
Cc53 ヒット					No. 78、81				No. 79、80、82			No. 141		袈裟褌文 壺 片

( )は残存状態不良の坏である。

いる。これは相対的にではあるが、B—II・IIIを出土する遺構にはB—Iが少ないことや、B—IとB—IIIだけの組み合わせはないという現象面からみれば、B類が小型化する傾向の一つのあり方を示唆しているともいえよう。II群に於けるB—I・B—II・B—IIIのあり方は、正に小型坏出現の過渡期的様相にもとれる。

B—III類の坏は、県内にあつてはA類が消滅し、C類もまた漸次同様の経過を辿っていく時期に於いて出現してくるものとして捉えられており、多賀城研の10類—bとして広く11世紀後半以降に位置づけられている坏類にも近いものでもある。ただ、本遺跡のそれは法量<sup>注2</sup>が若干大きく、口径が10cm以下の例はない。10類—b相当の類例は、隣接する西根遺跡<sup>注1</sup>にみられるが、遺物のあり方は異なっている部分が多い。西根遺跡の場合は、A類は皆無に等しく、C類も極少の出土で、大半がB類相当の坏で占められ、更に本遺跡B—IIIより小型の坏(口径10cm以下)が相当量みられるのである。従つて、西根遺跡のある一時期が本遺跡に後続するという観点でみれば、B—IIIはまだ小型化が進行する過程における所産とすることも可能であり、多賀城研の10類—b的な坏類に先行するものとも考えられる。本遺跡と同じように内黒のC類を共伴し、B類がまだ10類—b的なものに成り得ないという段階の類例は、鬼柳西裏遺跡<sup>注3</sup>にも求めることができるであろう。

B—IとB—IIIの先後関係については、既述の観点や、B—I類似の坏が北上市相去遺跡・都南村百目木遺跡、同下羽場遺跡等で代表される一時期で既に存在していることなどから、小型のものよりは先行するものと考えられる。但し、B—I類的な坏は集落内での消費の場に於いて、B—Iにとって換わつてB—IIIが出現してくるというのではなく、セットとして残る部分があるので、B—Iの系譜の中でB—III類的な坏が派生してきたであろうというのが大筋の解釈である。事実、西根遺跡や特徴は異なるが毛越A遺跡<sup>注4</sup>にあつても両様が残っているようである。また、A—IIIb類とB—III類の関わりからみれば、A類にあつても小型化への志向があつたかもしれないが、確証は得ない。尚、A—IIIb類似の小型坏は口縁形が若干異なるが矢巾町宮田A遺跡にも散見する。

一方、C類は各遺構に万遍なくみられることから、I・II群にあつてセットの一部として捉えられるものである。C類が確実に共伴する段階では、B—III類はまだ小型化への過渡期的なものとして捉えられ、A類のみならずC類もまた消滅する頃になつて、西根遺跡のB<sub>2</sub>的(口径10cm以下)な坏類が定着してくるものなのであろう。

他遺跡における坏類のセットの具体例としては、山形県軍町遺跡と多賀城今村邸内遺跡、金ヶ崎町西根遺跡第23号住居跡等があり、軍町、今村邸内遺跡では表杉ノ入式土器と10類—aとの共伴で10類—bは含まれず、第23号住居跡では10類—aと10類—bの共伴とされている<sup>注5</sup>。隣接する西根遺跡ではこの両様のセットに類似した例をみせるが、本遺跡にあつては10類—aと

— 鳥海B遺跡 —

10類—b 類似の坏だけの遺構はない。が、しかし、組み合わせとしては多様なあり方をみせているのが特徴である。ただ、ここではB類と多賀城研10類が併行すると捉えることは大過ないものの、B類に類似した坏類の始源が須恵系土器発生以前にも捉え得る東北北部のあり方からみれば、すべてが同一の系譜と断定するものではない。現段階では、大勢として須恵系土器の範疇にもかかるものもあろうが、須恵系土器発生以前に於けるB類類似の坏類からの系譜もあり得るとのみ述べておく。

次に、12世紀前半の作とされる袈裟襷文壺片を出土したCc53ピットについてふれるが、ここでは他にC—II類を3点出土している。単一埋土内下部の近いレベルで伴出したものである。このピットは、性格や他の遺構との関わりについては不明であり、また袈裟襷文壺片一点だけのあり方そのものも不自然なことから、明確な共伴関係について云々することは避けたい。ただC類的な坏は、江刺市蔦ノ木遺跡や鬼柳西裏遺跡等にも散見することから、12世紀代に近い頃までの存続はあり得ると推察される。

最後に、本遺跡の具体的な編年観についてふれてみたい。I・II群に存在するC類は、所謂表杉ノ入式土器の範疇にあると把握されるものであるが、このことと量的には少ないがA類の共伴関係、あるいはB類等のあり方から、I群は11世紀代に近い10世紀後半頃から、II群は広く11世紀代と考えている。この観点は、多賀城に於いて須恵器と須恵系土器の消長関係が明確になり、後者の土器群が隆盛を極める11世紀代以降という年代観に関わるものでもある。本県に於けるこの時期の土器編年は未だ確立していないが、若干の問題点を残しながらも、大筋として多賀城のあり方に併行する形で捉えられていることは否定しない。この立場で本遺跡のおおよその下限について言及するならば、広く11世紀代というものの、II群にあってC類がまだ確実に存在し、B—III類が多賀城研10類—b 的な坏になりつつある頃、即ちC類が表杉ノ入式土器の下限に近く、更にB—III類が10類—b の上限に若干先行する時期として、11世紀中葉からやや下降する頃にも求められよう。とすれば、本遺跡は比較的短期間の存続ということになるが、12世紀代前半の年代観を有す袈裟襷文壺片との関係からすれば、集落そのものは上述の時期に消滅していったとしても、12世紀代に於ける西根遺跡と併行する何らかの遺構の存在や再利用は考えられる。このことは、大溝で壊された住居跡の存在と相俟って、本遺跡の集落が胆沢川に依って開析された低湿地に面す段丘面上を避けて、沢を越えた対面にある西根遺跡に移行していったものであるか、あるいは本遺跡とは全く異なった系譜の集落が西根の地域に出現してきたことなのでもあろうか。何れにしろ、このような仮説は、本遺跡と鳥海柵擬定地との関係や、降って平泉文化等の関わりを否定しないものとすれば、当時の歴史的考証から、ある程度予察される背景を多分に有すが、ここでは特にふれない。 (八重樫・記)

注1 岩手県文化財調査報告書第X集、東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書、昭和55年。



注2 多賀城周辺における古代坏型土器変遷、岡田茂弘・桑原滋郎 研究紀要Ⅱ、宮城県多賀城跡調査研究所。

注3 岩手県文化財調査報告書第50集、東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書、昭和55年。

注4 岩手県文化財調査報告書第54集。東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告書Ⅵ

注5 注2に同じ。

## V 分析・<sup>14</sup>C測定結果

本遺跡出土の科学的処理については、木炭に含まれる放射性炭素<sup>14</sup>Cの濃度測定と須恵器坏A類の胎土分析の2件について実施した。

<sup>14</sup>Cの測定については日本アイソトープ協会に、また胎土分析については照井一明氏に委託し、昭和55年12月段階でその結果を得ている。但し、後者の分析については、他遺跡との関わりから一括して他項で記すこととしているため、本項では<sup>14</sup>C測定結果のみについて記す。

### (1) 放射性炭素<sup>14</sup>C濃度測定結果

本遺跡 Ah06 竪穴住居跡内出土の木炭片が測定試料である。出土状況は僅かに床面より高い埋土下部にあったものである。

測定結果は、 $1090 \pm 80$  yB.P. ( $1060 \pm 80$  yB.P.)と計算されている。換算年代は780～940年となり、年代誤差の数値を2倍にして算出すると700～1020年となる。

本遺跡内の出土遺物からなる Ah06 竪穴住居跡の編年的位置は10C代と推察されているが、測定年代の後半にも相当するものである。

なお、年代は<sup>14</sup>Cの半減期5730年(カッコ内はLibbyの値5568年)にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数(years B.P.)として示されています。年代誤差の範囲を2倍にするのは、その範囲に含まれる確率を高めるための一作業である。



# と のみ 鳥 海 A 遺 跡

遺 跡 名：鳥海 A (略号 T N72)

遺 跡 所 在 地：胆沢郡金ヶ崎町大字西根字二宮後

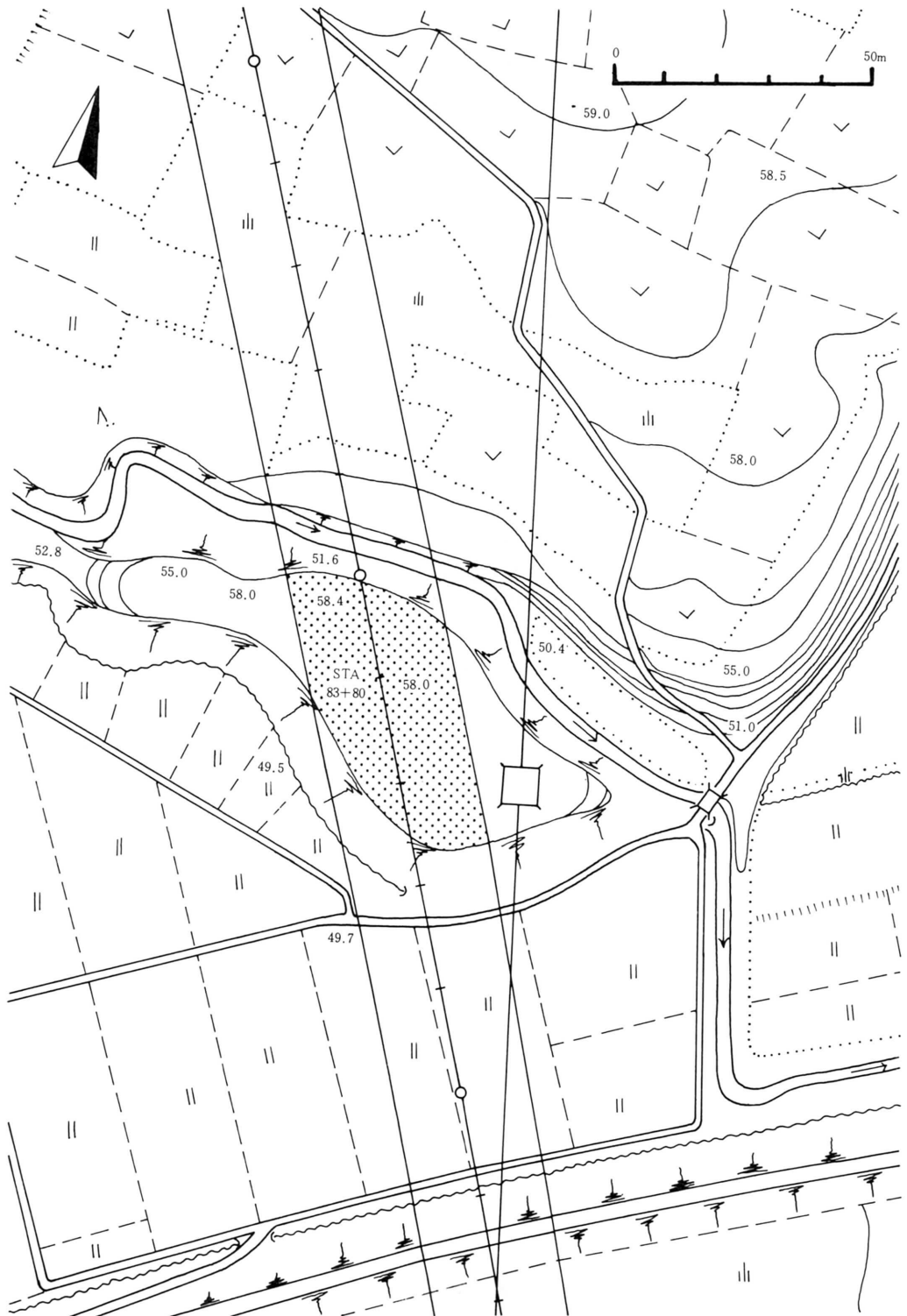
調 査 期 間：昭和47年8月1日～9月15日

調査対象面積：3,000m<sup>2</sup>

発掘調査面積：2,000m<sup>2</sup>



— 鳥海 A 遺跡 —



第1図 遺跡の地形と調査範囲

## I 遺跡の位置と立地 (第1図)

調査地は国鉄東北本線「金ヶ崎駅」の南方約1.2 kmに位置し、低位の金ヶ崎段丘の南東端段丘崖に沿って占地する。段丘崖の南約200 m付近で水沢川を合流した胆沢川は更に東流して約2.5 kmで南流する北上川に注ぐ。

調査地は標高約58 mでほぼ平坦な段丘面であり、南面は胆沢川による氾濫原で段丘面との比高は約9 mを測る。北側は東に流れる巾約3 mの小川による巾15 m内外の開析谷があって北に続く段丘面と隔している。段丘面と谷底との比高は約8 mである。

谷をはさんで北に鳥海B遺跡・西根遺跡と東北縦貫自動車道関連遺跡が位置し、縦街道古墳・原添下住居跡群・桑木田小丸塚・揚場古墳等の諸遺跡も立地する。また、胆沢川を渡った対岸に水沢市今泉・玉貫・膳性・胆沢城跡等の遺跡もある。

なお、調査地を含めた近辺は古くから前九年の役における安倍氏関連の鳥海柵に擬せられている一つ<sup>(1)</sup>でもある。したがって、前述の開析谷としたものは、人工が加わった可能性も否定できない。

注(1) 鳥海の柵擬定地——東磐井郡大東町興田字鳥海、胆沢郡金ヶ崎町金ヶ崎大字西根字鳥海、胆沢郡金ヶ崎町永岡字細野鳥海、胆沢郡前沢町前沢字鳥海、二戸郡鳥海村字稲荷の5カ所がある「岩手県史」第1巻上代篇。

## II 調査地の基本層序 (第2図)

調査地における基本的な層序で、遺構にかかわるのはI層からIII層に大別される。

I層は暗褐色の表土層で、15 cm～20 cm内外の厚さをもち比較的柔らかく草木根が多い。

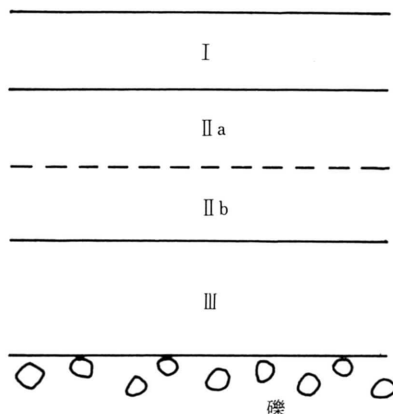
II層は黄褐色を呈する礫の少ない粘質土である。IIa層では淡黄褐色粘質土で、IIb層に比較し粘質度にややおとり、約20 cmの厚さを有しこの層上面が遺構検出面となる。

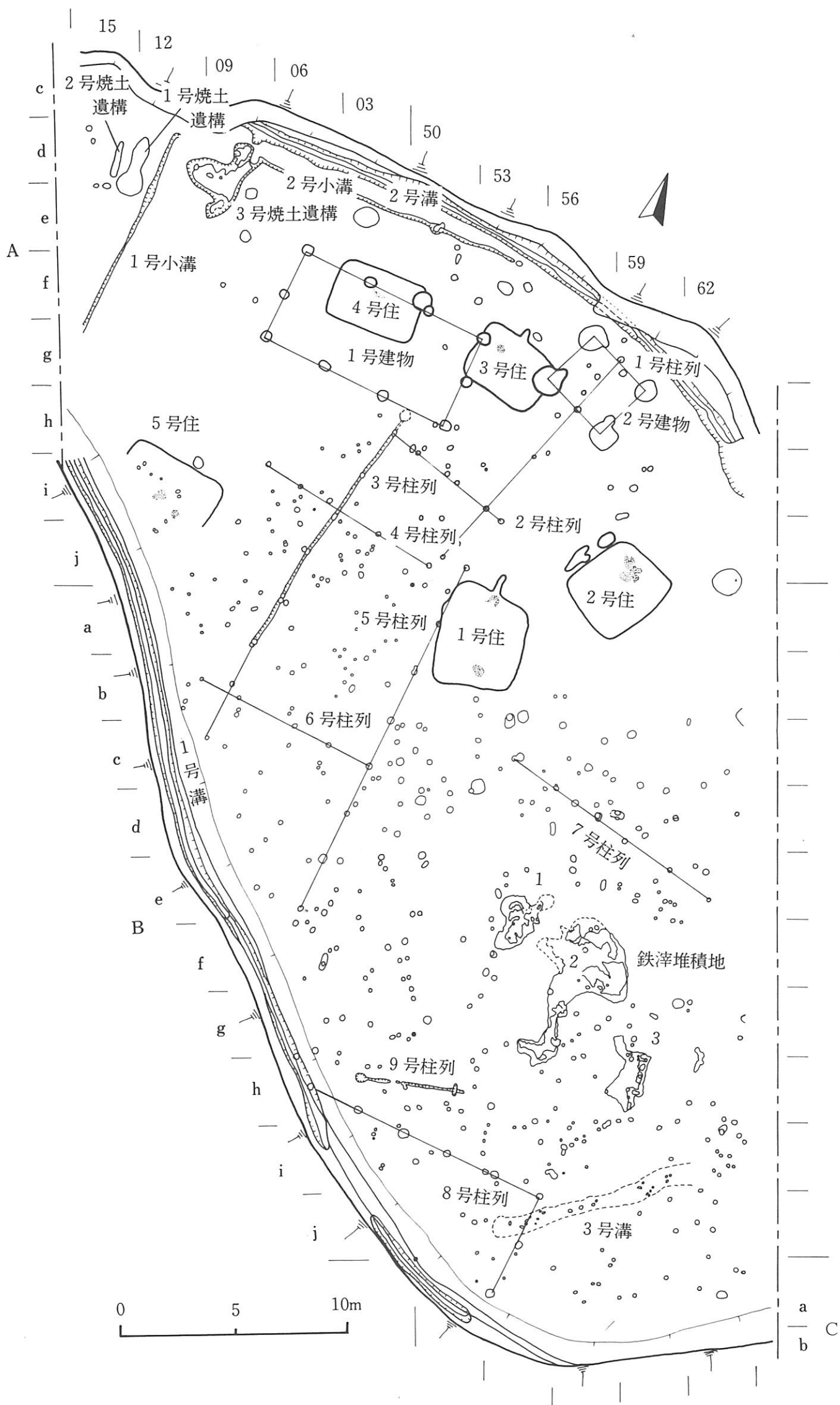
IIb層は黄褐色粘質土で、IIa層に比較して粘質度があり、約20 cmの厚さをもつ。

III層は白色に近い色調をもつ粘土層で、グライ化しやや青味をもつ部分もある。約30 cmほどの厚さでこの下に礫層がみられる。

以上の基本層序であるが、一方、段丘崖縁辺は削平のためIIa層が薄くなる部分があり、北縁では整地層が認められるが、その範囲は調査時の観察に欠け不明である。整地の時期は平安時代末と推察するが詳細は後述する。

第2図 層序模式図





第3図 遺構配置図

### Ⅲ 検出された遺構と遺物

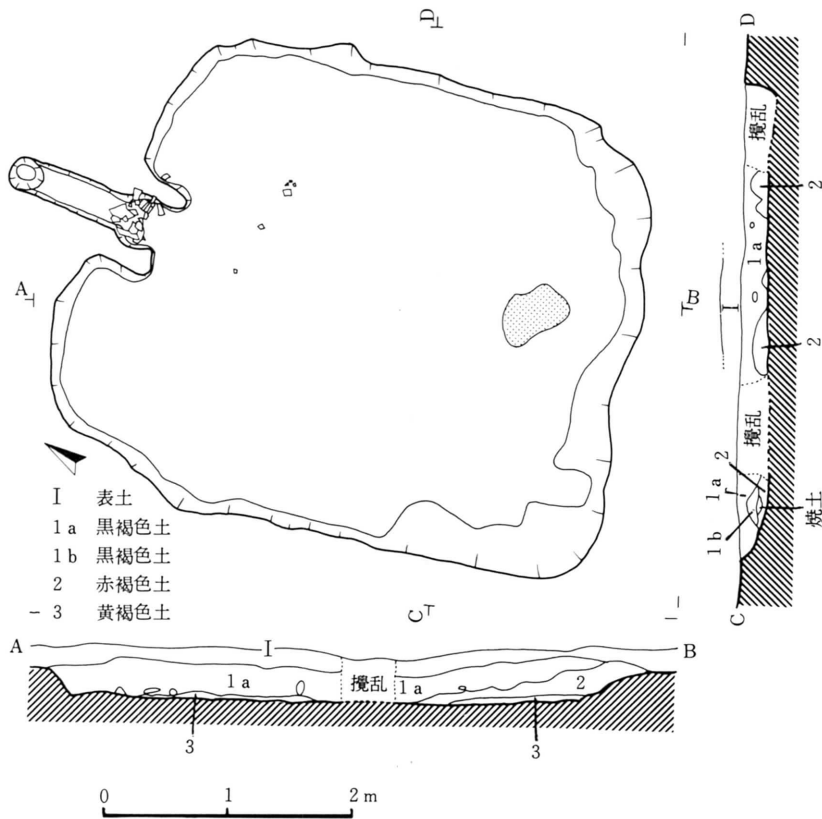
検出された主な遺構は、奈良時代の竪穴住居跡1棟、平安時代末の竪穴住居跡4棟、掘立柱建物跡2棟、柱列および溝を伴う柱列9列、小溝2本、溝3本、焼土遺構3基、その他である。遺物は酸化焰焼成でロクロ使用回転糸切り無調整の坏（小型坏<小皿>も含む）が主体で、酸化焰焼成内黒の回転糸切り無調整の坏および、還元焰焼成土器は坏、甕の破片にみられるが極度に少ない。縄文地文の土器2片をみるが詳細は割愛する。

#### 1 竪穴住居跡

##### 1号（Ba 50）竪穴住居跡（第4図 図版1）

〔遺構の確認〕 調査地の中央からやや北寄りの Bab 50～53のⅡa層面での確認である。遺構は後世の掘さくで床面の一部が破壊されていた。

〔重複〕 他遺構との重複は認められない。



第4図 1号住居跡



〔平面形・規模〕 隅丸方形で東西 3.8 m、南北 4.2 m を測り、煙道方向はほぼ真北を指す。

〔埋土〕 1a層は黒褐色土でパサパサし可塑性に欠ける。b層は粒状の地山土を多く含む、2層の赤褐色土はしまり強く少量の炭化物を含み、3層黄褐色土は地山土を主体に若干の黒褐色土を含む。後世の攪乱が溝状に入っており、住居跡埋土を分断している。

〔床面・壁〕 床面は地山面をそのまま利用しており、一部後世の破壊を認めるがほぼ平坦である。壁の立ち上がりはやや外傾し、遺存する壁高は約20cmを測る。

〔柱穴〕 確認できない。

〔かまど〕 北壁のほぼ中央に位置し、地山粘質土を叩き固めて構築した袖をもつ、焚口の間口は約40cm、奥行約30cmで、煙道は上巾約30cm、検出面からの深さ約8～14cmで、北へ65cmのびて煙出しに達する。煙出しは径約25cmの円形で検出面から約20cmの深さをもつ。

〔その他の施設〕 南壁中央付近の床面に30cm×50cmほどの範囲で現地性の焼土を認めたが性格は明確ではない。

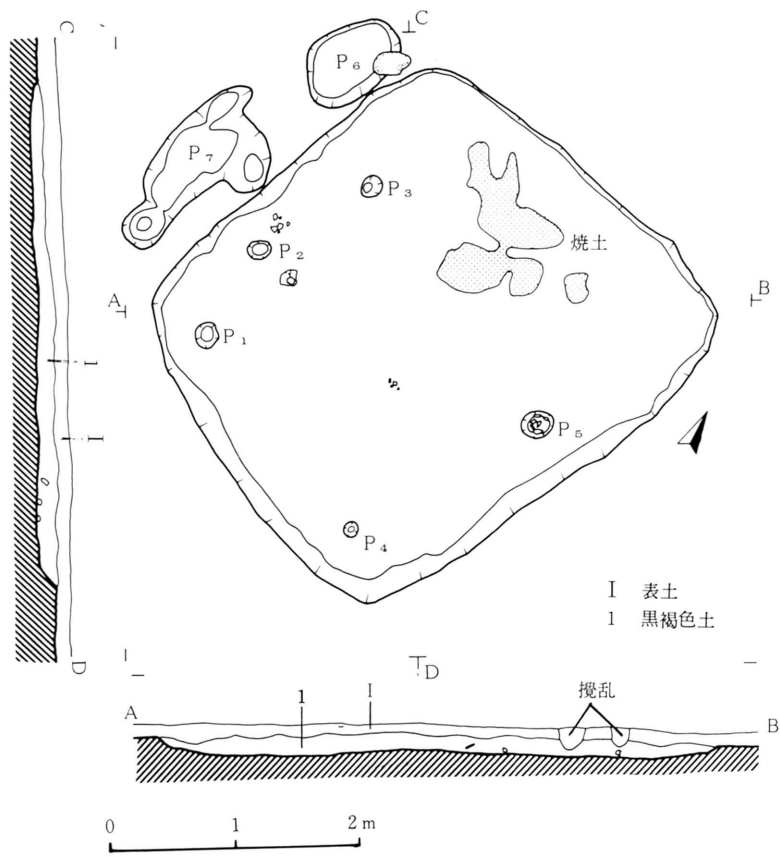
〔出土遺物〕 主な出土遺物は坏2個体、甕2個体の完形土器で、いずれもロクロ未使用である。坏1(第23図1 図版5)は酸化焰焼成で黒褐色を呈し内面黒色処理を施すが、摩滅が著しく剝離があってミガキ調整等は不明瞭である。体は丸味をもって立ち口縁の変化はない。体・底境が有段であり対応する内面に陵を認め、段に残る痕跡から体は横ナデをし、底は丸底風である。口縁径14.4cm、底径5cm、器高5cmである。2の坏(第23図2 図版5)も酸化焰焼成で外面はにぶい橙を呈し、内面は黒色処理を施すが摩滅が著しくミガキ調整痕は不明瞭でない。体は丸味をもって立ち口縁での変化はない。体・底境に段の痕跡をとどめるが顕著でなく内面の陵はない。底部は丸底風であり、口径17.4cm、底径4cm、器高4.1cmである。坏1・2はかまど付近からの出土である。

3の甕(第23図3 図版5)は酸化焰焼成の長胴甕である。外面はにぶい黄橙や灰黄褐色を呈し、口縁は横ナデ、体部は縦方向を主体に刷毛目調整、内面は灰黄褐色を呈し、口縁部で横ナデ、体部は下端で横位の刷毛目、上半は摩滅で不明瞭であるが不定方向の刷毛目かとみられる。体外面の下半は火熱によって赤変があり煤の付着も認める。頸部に段をもち口縁は「く」字状に外反し口唇を上につまみ出す。最大径は口径で21cm、底部は「八」字状に若干外に開き木ノ葉痕をもち径9.3cmあり、器高は33.8cmを測る。4の甕(第23図4 図版5)は酸化焰焼成で内外面ともににぶい黄橙を呈し、口縁は内外面とも横ナデ、体外面は縦方向を、内面は横方向を主体にする刷毛目調整を施す、外面に火熱による赤変を認める。頸部有段で口縁は比較的長く「く」字状に外反し口唇を上方につまみ出す。最大径は口径にあり19cm、底部径6cmでナデ調整かとみられるが摩滅で不明瞭である。器高は22.3cmを測る。4・3の甕とも調整の刷毛目が荒いこと、器面に輪積痕の凹凸をみること、かまど内からの検出であることなどが共通する。

2号 (Aj 56) 竪穴住居跡 (第5図 図版2)

〔遺構の確認〕 Aj 56～59・Ba 56～59内のIIa層面での検出である。南西約2 mに1号住、北西約7 mに3号住居跡がある。

〔重複〕 認められない。



第5図 2号住居跡

〔平面形・規模〕 ややいびつな隅丸方形で東西3.35 m、南北3.75 mであるが、西辺は3 mと短い、南北方向は真北に対し約22° 東に傾く。

〔埋土〕 住居跡の埋土はパサパサし粘性に欠け、多量の草木根と細片化した土器片と黄褐色

— 鳥海A遺跡 —

土を含む黒褐色土1層のみである。

〔床面・壁〕 床面は地山面をそのまま利用しほぼ平坦である。壁は外傾するが遺存状況が悪く本来の様相は不明確である。壁高は最も高い東壁で15cmである。

〔柱穴〕 配置からみてP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>が柱穴かと推察される。それぞれの径および深さは次のようになる。P<sub>1</sub> 20×20cm 24cm・P<sub>2</sub> 15×20cm 8cm・P<sub>3</sub> 18×19cm 6cm・P<sub>4</sub> 12×13cm 10cm・P<sub>5</sub> 23×24cm 10cm と一般的に径が小さく浅い。

〔かまど・炉〕 かまどは認められない。北半中央付近に90×125cmの不整な状況で現地性の焼土が検出され地床炉かとも考えられる。

〔その他の施設〕 住居跡内では認められない。西壁沿い住居跡外のP<sub>6</sub>は径58×85cm、深さ14cm、P<sub>7</sub>は径55×145cm、深さ17cmのもので、性格および住居跡との関連は不明である。

〔出土遺物〕 床面から坏1個体、埋土から3個体の坏が出土した。

5の坏(第23図5 図版5)は、酸化焰焼成の回転糸切り無調整で分類上B<sub>1</sub>類としたもので、埋土出土の坏6(第23図6)・坏7(第23図7 図版5)・坏8(第23図8)も同様である。ただし坏8は底部を欠く。他にB類坏片27点、C類坏片2点がある。

### 3号(Ag53)竪穴住居跡(第6図 図版2)

〔遺構の確認〕 Ag50～56 Ah53内のIIa層面での検出であるが、埋土に整地土が認められることから遺構廃棄後に上面を削平整地したものと考えられ遺存状況は良くない。

〔重複〕 西壁を1号掘立柱建物跡の柱穴4に切られ、北東隅では2号掘立柱建物跡の柱穴4に切られており、1・2号掘立柱建物跡はいずれも本住居跡よりも新しく、特に1号掘立柱建物跡柱穴4は整地層に掘り込まれている。

〔平面形・規模〕 隅丸長方形を呈し、東西3.7m、南北2.8mで、南北方向はほぼ真北に近い。

〔埋土〕 埋土は大筋1層からなる。すなわち、黒褐色土に鉄滓の塊および粉状化したもの、炭化物を含んだ層で、住居跡外の西方まで広がる。2層は黒褐色土に黄褐色土と鉄滓の小塊を含む、1層は整地層の一部とみられる。

〔床面・壁〕 床面は地山面を利用しほぼ平坦であり、壁は削平のためか遺存状況は極めて悪く本来の様相を把握できなく高い場所で約10cmある。

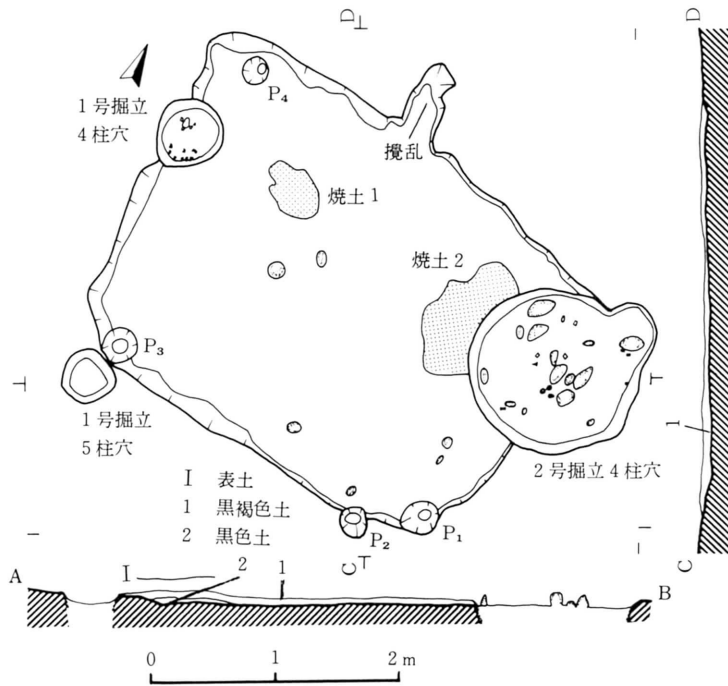
〔柱穴〕 配置的にP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>に可能性がある。その径と検出面からの深さは、P<sub>1</sub> 26×30cm 23cm・P<sub>2</sub> 21×23cm 16cm・P<sub>3</sub> 30×30cm 30cm・P<sub>4</sub> 20×23cm 28cmを測り、北東隅にも存在した可能性が強い。

〔かまど・炉〕 かまどは認められなく、床面に焼土1の35×50cm、焼土2の45×85cmの現地

性焼土があり地床炉とも推察できる。なお焼土2は2号掘立柱建物跡柱穴4に切られる。

〔その他の施設〕 認められない。

〔出土遺物〕 B<sub>2</sub>類に分類した酸化焰焼成で回転糸切り無調整の皿状の小型坏(第24図29) 1個体が出土した。



第6図 3号住居跡

#### 4号 (Af 03) 竪穴住居跡(第7図 図版2)

〔遺構の確認〕 北段丘崖に沿い3号住居跡の西約3mに位置し、Af 06・03・50 Ag 03内のIIa層面での検出である。

〔重複〕 1号掘立柱建物跡の柱穴2とP<sub>2</sub>が本住居跡を切る。したがって、P<sub>2</sub>が本住居跡より新しく、更にP<sub>2</sub>を1号掘立柱建物跡の柱穴3が切ることと、前述の柱穴2の状況から1号掘立柱建物跡が最も新しい。

〔平面形・規模〕 隅丸長方形で東西4m、南北2.75mを測り、南北方向はほぼ真北を向く。

〔埋土〕 1層は黒褐色土で土器の小破片と鉄滓塊を含み住居跡外まで及ぶ整地層である。2層の黄褐色土も鉄滓塊を含み整地土の可能性が高い。

〔床面・壁〕 地山面をそのまま利用した床面ではほぼ平坦である。壁は削平のため遺存状況が極めて悪く、北側では痕跡を残す程度であり南壁の最も高い部分で14cmである。

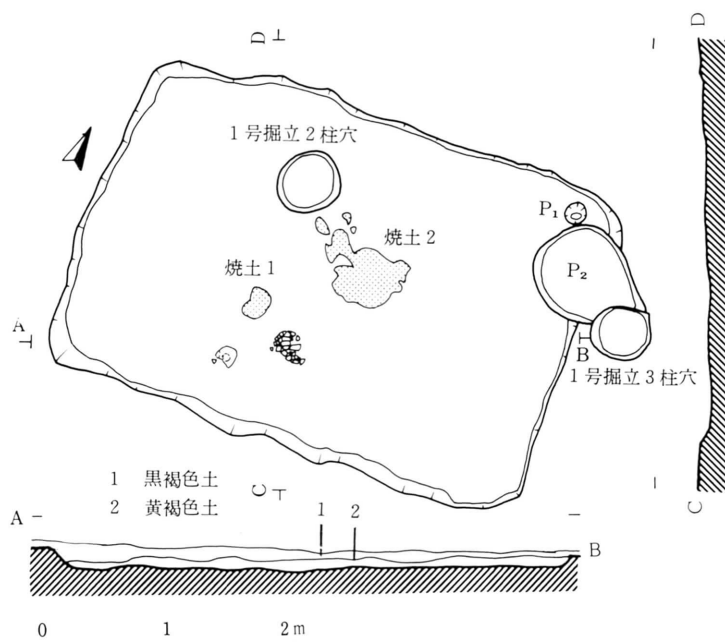
— 鳥海A遺跡 —

〔柱穴〕 確認できない。

〔かまど・炉〕 かまどは認められない。床面中央付近に焼土1・焼土2を認めた。焼土1は床面からやや浮く様相をもつ、焼土2は50×70cmの範囲に不整形の広がり薄い、しっかりし現地性のもので地床炉の可能性が高い。

〔その他の施設〕 住居跡内の北東隅にP<sub>1</sub>を認めた。径17×20cm 深さ14cmで柱穴状の小ピットであるが、1本のみで柱穴としての確証もなく性格不明である。

〔出土遺物〕 酸化焙焼成で回転糸切り無調整のB<sub>1</sub>類とした坏3個体、坏9（第23図9 図版5）・坏10（第23図10 図版5）・坏11（第23図11 図版5）がいずれも南壁寄りの床面で検出された。また、北西寄り埋土中から坏12（第23図12 図版5）・坏13（第24図13）が検出され、ともにB<sub>1</sub>類である。他にB類坏片41点、C類坏片2点がある。



第7図 4号住居跡

5号(Ah12) 竪穴住居跡(第8図)

〔遺構の確認〕 4号住居跡の南西約9m、南西側段丘崖沿いに位置し、Ah12 Ai 09・06 Aj 09 内のIIa層面で検出された。

〔重複〕 他遺構との重複は認められない。

〔平面形・規模〕 南側が削平によって不明確であるが、遺存部分から推定すると隅丸長方形

の平面形が考えられる。東西4.5 m、南北は2 m +  $\alpha$ であり、南北方向はほぼ真北を指す。

〔埋土〕 削平のため遺存が極めて浅かったことから埋土の記録はない。

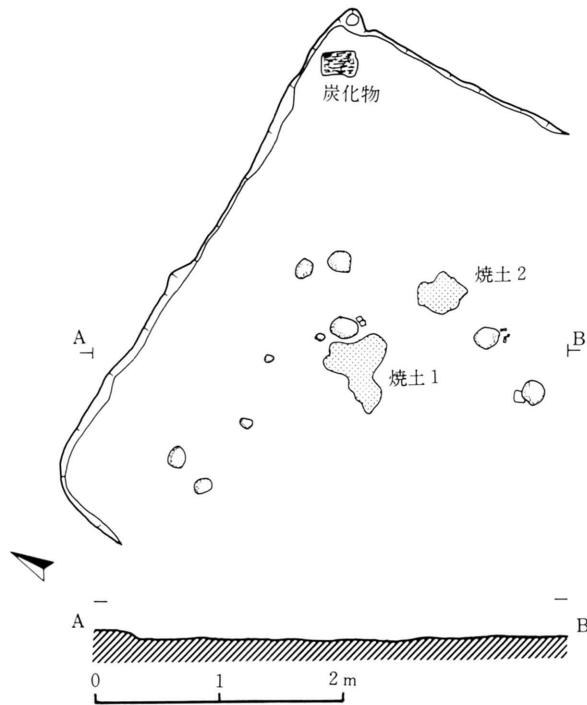
〔床面・壁〕 地山面をそのまま利用したほぼ平坦な床面であり、検出時に床上に径20 cmほどの川原石数個を認めたと、本来的なものか流れ込みかその性格等は不明である。壁の遺存は極めて悪く、北側で約5 cmの高さを測る。

〔柱穴〕 確認できない。

〔かまど・炉〕 かまどは確認できない。床面中央付近に焼土1が50×60 cm、焼土2が30×35 cmの不整な範囲に広がり、いずれも現地性の焼土であって地床炉の可能性が強い。

〔その他の施設〕 確認できない。

〔出土遺物〕 西南寄り床面から高台付坏1個体(第24図14)が検出された。酸化焰焼成の内面黒色処理を施すもので、内面のミガキ調整、底部切り離し技法は摩滅が著しく不明瞭であるが、かすかにミガキ調整痕が認められ、回転糸切り痕も確認できる。なお、口縁部を欠き全体的形態、法量は把握できない。他にB類坏片47点、C類坏片1点がある。



第8図 5号住居跡

## 2 掘立柱建物跡

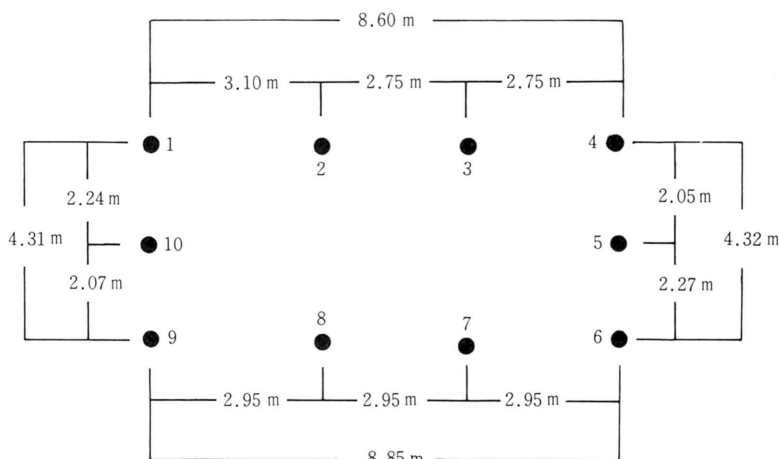
北側開析谷沿いに2棟検出された。いずれも、その一部が整地層を掘り込んでいる。

### 1号 (Af 06) 掘立柱建物跡 (第9・10図 図版3 第1表)

〔遺構確認〕 北側開析谷に沿い2号掘立柱建物跡の西約3.5mに本遺構の東梁行がある。北列桁行柱穴2・3・4、東列梁行柱穴5は黒褐色または暗褐色土の整地層面で、他はIIa層面での検出である。

〔重複〕 柱穴2・4がそれぞれ4号住居跡と3号住居跡を切っており本遺構が住居跡より新しい。

〔規模〕 東西3間×南北2間の東西棟で西列梁行方向が真北より2°西を向く、桁行、梁行、柱間寸法は下の模式図に示す通りである。



第9図 1号掘立柱建物跡模式図

柱間寸法の測定は、柱痕を認めるものはその中心、認めないものは柱穴の中心を測点として、1尺を0.30mとして換算しまとめると、北列桁行柱穴1～4では3.10m(10.3尺)+2.75m(9.2尺)+2.75m(9.2尺)=8.6m(28.7尺)・南列桁行は柱穴6～9で2.95m(9.8尺)+2.95m(9.8尺)+2.95m(9.8尺)=8.85m(29.5尺)・東列梁行柱穴4～6では2.05m(6.8尺)+2.27m(7.6尺)=4.32m(14.4尺)・西列梁行柱穴9～1で2.07m(6.9尺)+2.24m(7.5尺)=4.31m(14.4尺)を測る。

桁行北列は2間で9尺台の等間、南列は3間とも9尺台等間となるが、同じ9尺台でも北列と南列では1間で0.6尺の差があり統一されない。しかも総長で南列が0.25m(0.8尺)長く、したがって建物全体の平面がややゆがみをもつ。一方、梁行東西列は1間7尺前後と7尺5寸

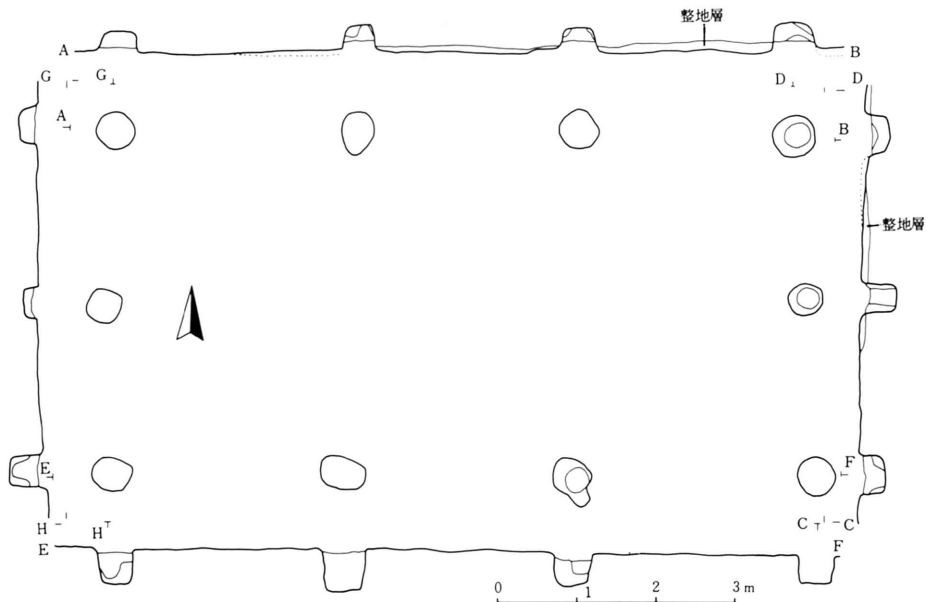
前後からなるものと推察され、総長は同じ数値を示す。

以上から本建物跡は1間7尺～9尺台で桁行8.85 m（29.5尺）×梁行4.32 m（14.4尺）規模とみることができる。ただ、南列桁行柱間寸法の2.95 mは1尺 = 0.295 m<sup>(1)</sup>で換算すると10尺の完数となり、3間が一致することから1尺を0.295 mとする造営尺も考えられる。

〔柱穴〕 平面形は円形を主体とするが楕円形、隅丸方形等に近いものもある。径の最大は55 cm、最小は40 cmで平均49 cmである。柱痕は柱穴4・5・7では平面的に確認できた、ただ4のものは浅く疑問が残る。柱痕は円形で径30 cm内外である。柱穴2・3・6・9では断面で柱痕が確認できる。柱穴埋土は黒褐色土に黄褐色土が混在し酸化焰焼成土器の小破片を含むものもあるがほぼ単層を示す。柱痕は大むね黒色腐植土である。

柱穴底面の最も低いのは柱穴5の57.62 mで最も高いのは柱穴10の58.00 mである。総じてみると57.70～57.80 m台になり、検出面からの深さでは柱穴8が最も深く52 cm、最も浅いのは柱穴10の19 cmである。

〔出土遺物〕 柱穴埋土から酸化焰焼成の土器細片が出土した。実測復元可能土器はない。



第1表 柱穴計測値一覧 ※面高は標高

柱穴	大きさ	深さ	検出面高	底面高	柱穴	大きさ	深さ	検出面高	底面高	柱穴	大きさ	深さ	検出面高	底面高
	cm	cm	m	m		cm	cm	m	m		cm	cm	m	m
1	50×47	26	58.22	57.96	5	30×26	48	58.10	57.62	9	50×40	44	58.26	57.82
2	40×55	31	58.13	57.82	6	48×49	36	58.14	57.78	10	40×40	19	58.19	58.00
3	50×50	30	58.12	57.82	7	50×40	42	58.18	57.76					
4	50×50	40	58.10	57.70	8	55×48	52	58.24	57.72					

第10図 1号掘立柱建物跡



2号 (Ag 56) 掘立柱建物跡 (第11・12図 図版3)

〔遺構確認〕 北側開析谷沿いに位置し、1号掘立柱建物跡の東列梁行から約3.5m東に本遺構の西列がある。柱穴4は3号住居跡の埋土、すなわち、整地層からの掘り込みで少なくとも一部は整地層面からの構築とみられるが、全体に及ぶものかは記録資料からの判断はし得ない。

〔重複〕 3号住居跡を柱穴4が切っており、本遺構がより新しい。

〔規模〕 右図に示す通り東西

1間×南北1間で東西真北から12°東を指す。

柱穴1～3では柱痕の中心を、柱穴4では2・3の柱痕の中心を結び平行移動して得た点を測点として計測した結果を、1尺を0.30m換算しまとめると、東西は3.4m (11.3尺)、南北は2.7m (9尺)となる。

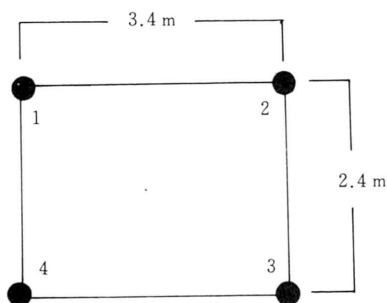
〔柱穴〕 平面形は柱穴2が円形で、他の1・3・4はだるま状を呈しているが、柱の抜き取りまたは切り合いは認められない。径は柱穴1から順次1.15×1.10m・0.95×1.05m・1.30×1.20m・1.40×1.30mで比較的大きな掘り方である。

柱穴1～3に認められる柱痕は、それぞれ0.45×0.50m・0.35×0.35m・0.34×0.32mを測り円形である。

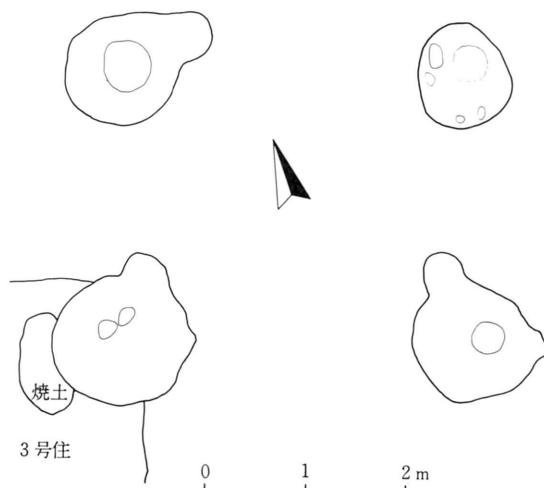
柱穴は完掘しなかったため、埋土および深さ等の詳細は不明である。ただ柱穴1の柱痕は完掘しており検

出面からの深さが73cmあることから、他もほぼ近似の規模と推察される。

〔出土遺物〕 柱穴埋土を若干掘り下げた地点で、いずれもB<sub>2</sub>類とした酸化焰焼成の回転糸切り無調整の皿状小型坏が検出された。坏30～32 (第24図30～32)は柱穴4、坏33 (第24図33)



第11図 2号掘立柱建物模式図



第12図 2号掘立柱建物跡

は柱穴1、坏34（第24図34）柱穴3からである。

注(1) 高橋与右エ門 つなぎⅢ遺跡の掘立柱建物跡で1尺=0.295mの造管尺を算出している「御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書」（財）岩手県埋蔵文化財センター

### 3 柱列と溝を伴う柱列

検出された柱穴状の小ピットは約500個である。個々についての断面は記録しなかったが埋土は暗褐色土を主体としたもので、検出面からの深さは約30cm内外であり、ほぼ円形の平面を呈し、径30～40cm大のものが多い。多少の木痕跡等も含まれると思われるが、総じてしっかりしたピットである。

図面上で復元を試みた結果、建物跡は確認できないが、近似あるいは規則的な柱間寸法をもち直線上に乗る柱配列を一単位としたとき、9列の柱列が見出された。うち、2列が溝を伴うものである。しかし、更に詳細に検討するなら数を増す可能性も否定できない。

なお、個々のピットには各柱列を通した番号を付し、1尺=0.30mで換算した。他遺構との関連は第3図遺構配置図・第18図柱列配置図を、各柱列の規模については各々の実測図を参照されたい。

#### 1号（Ag59）柱列（第13図）

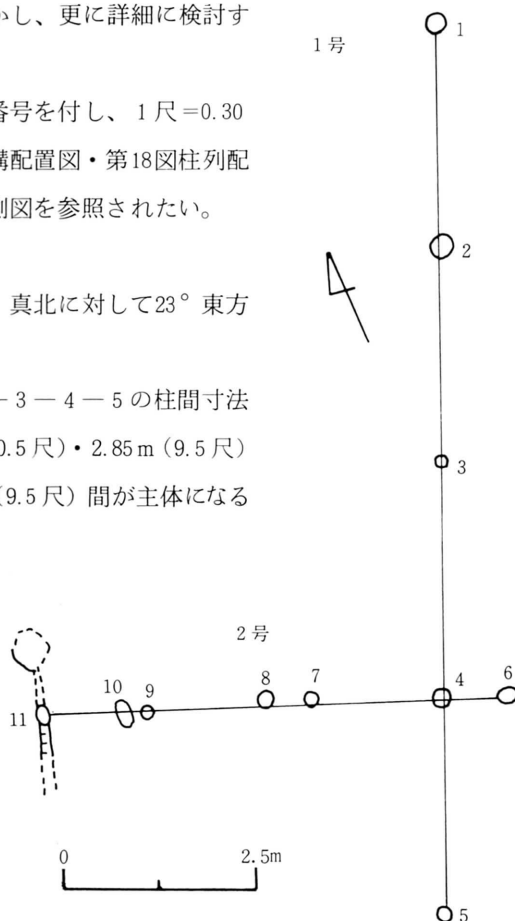
柱穴1～5が直線上に乗る4間の柱列で、真北に対して23°東方向を指す。

総長は11.75m（39.2尺）を測り、1—2—3—4—5の柱間寸法は2.9m（9.7尺）・2.85m（9.5尺）・3.15m（10.5尺）・2.85m（9.5尺）となり、3—4間がやや広くなるが、2.85m（9.5尺）間が主体になるとみて大過ないと推察する。

#### 2号（Ah03）柱列（第13図）

柱穴6～10もしくは11の列で、1号柱列に直交する配列である。

幾通りかの配列が考えられ、6～11を総長とした場合、5.65m（18.9尺）を測り柱間寸法は、①6—4—7—8—9—10—11で、0.85m（2.8尺）・1.7m（5.7尺）・0.6m（2尺）・1.6m（5.3尺）・0.3m（1尺）・1.1m（3.7尺）と



第13図 1・2号柱列実測図

— 鳥海A遺跡 —

なり、②6-7-9-11では2.55m（8.5尺）・2.2m（7.3尺）・1.4m（4.7尺）の3間、③6-4-8-10-11では0.85m（2.8尺）・2.3m（7.7尺）・1.9m（6.3尺）・1.1m（3.7尺）を測る。①の場合7-8・9-10、特に後者は間隔が狭くなるが構築技術上の何らかの理由によるものか不明である。4-6・7-8・9-10の狭い柱間を中に配した構造となる。

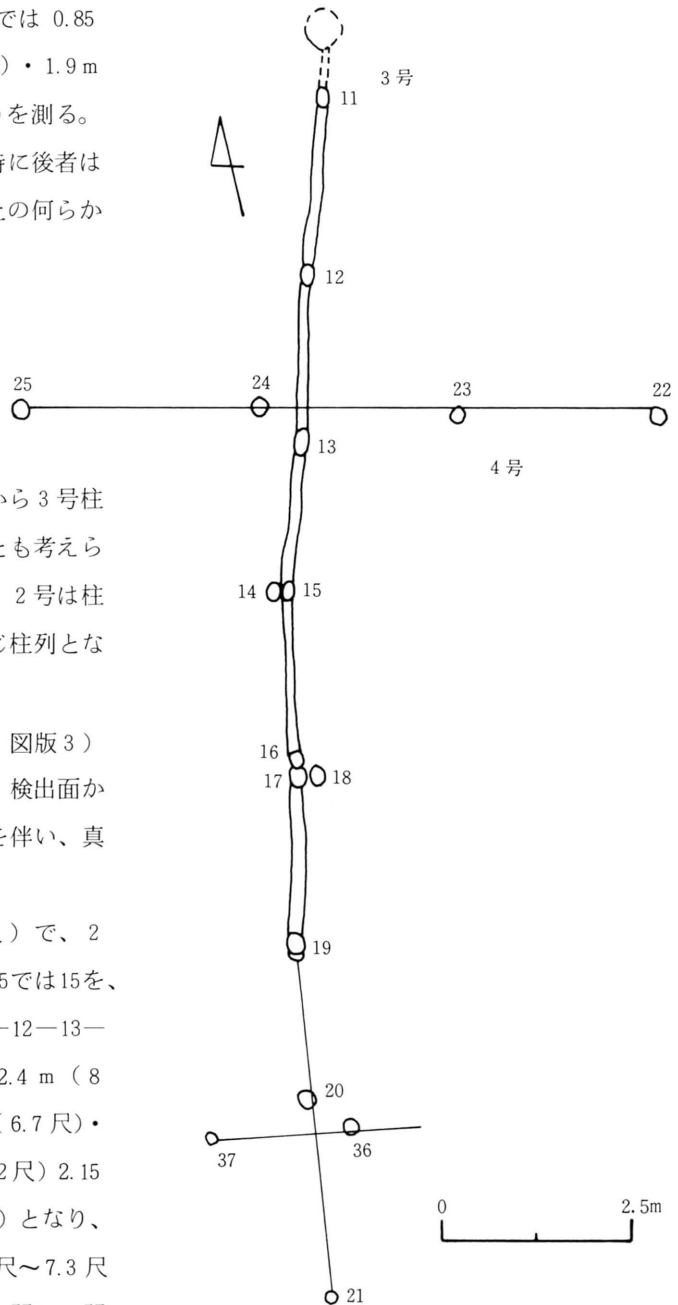
②・③の場合は改築が考えられるし、交する角度から3号柱列11とは直結しなかったことも考えられる。しかし、直交する1・2号は柱間寸法に差異をもつが、同じ柱列となる可能性がある。

3号（Ah03）柱列（第14図 図版3）

柱穴11～21で巾30cm内外、検出面からの深さ10cm内外の浅い溝を伴い、真北に対し約18°東を指す。

7間で総長15.9m（53尺）で、2個以上の柱穴が集まる14・15では15を、16～18では17をもって、11-12-13-15-17-19の柱間寸法は、2.4m（8尺）・2.2m（7.3尺）・2m（6.7尺）・2.4m（8尺）・2.15m（7.2尺）2.15m（7.2尺）・2.6m（8.7尺）となり、8尺～8.7尺台が3間、6.7尺～7.3尺台が4間あり、後者は前者の間に2間ずつ入る様相にある。

なお、19-20の間は溝が確認されず



第14図 3・4号柱列実測図

本来的か削平のためか不明である。また、14・15、16～18で同個所に複数の柱穴をみるが、補修、改築等があったものと推察される。

#### 4号 (Ai09) 柱列 (第14図)

柱穴22～25で東西に走り3号柱列と交叉する。真北に対し104°東を指す。

総長は8.4m(28尺)で、3間の22—23—24—25の柱間寸法は、2.65m(8.8尺)・2.6m(8.7尺)・3.15m(10.5尺)であり8尺台等間が2と10.5尺間が推察される。

#### 5号 (Aj50) 柱列 (第15図)

柱穴26～33の列で南北に走り、途中の柱穴30地点で6号柱列が交叉する。真北に対し8°東方向を指す。

総長は16.8m(56尺)で7間、26—27—28—29—30—31—32—33の柱間寸法は、

2.85m(9.5尺)・2.25m(7.5尺)・2.4m(8尺)・2.25m(7.5尺)・2.37m(7.9尺)・2.3m(7.7尺)・2.4m(8尺)となり、26—27の9.5尺を例外として、30—31の7.9尺を8尺と、31—32の7.7尺を7.5尺と読み換えると7.5尺と8尺間が交互になり規則性が認められる。

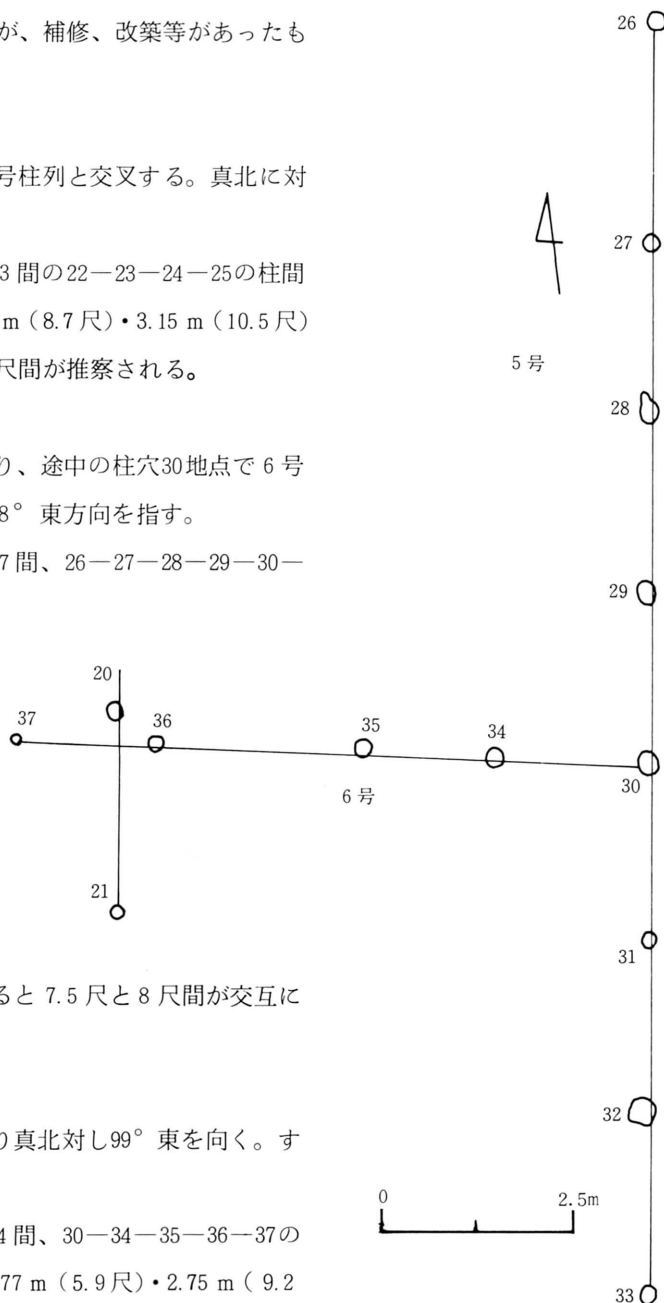
#### 6号 (Bb12) 柱列 (第15図)

柱穴30・34～37で東西に走り真北対し99°東を向く。すなわち、5号柱列に直交する。

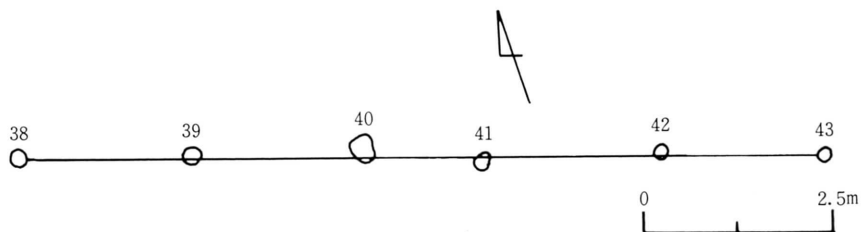
総長は8.3m(27.7尺)で4間、30—34—35—36—37の柱間寸法は、2m(6.7尺)・1.77m(5.9尺)・2.75m(9.2尺)・1.8m(6尺)となる。

#### 7号 (Bc53) 柱列 (第16図)

柱穴38～43で東西に走り真北に対し110°東方向を指している。



第15図 5・6号柱列実測図



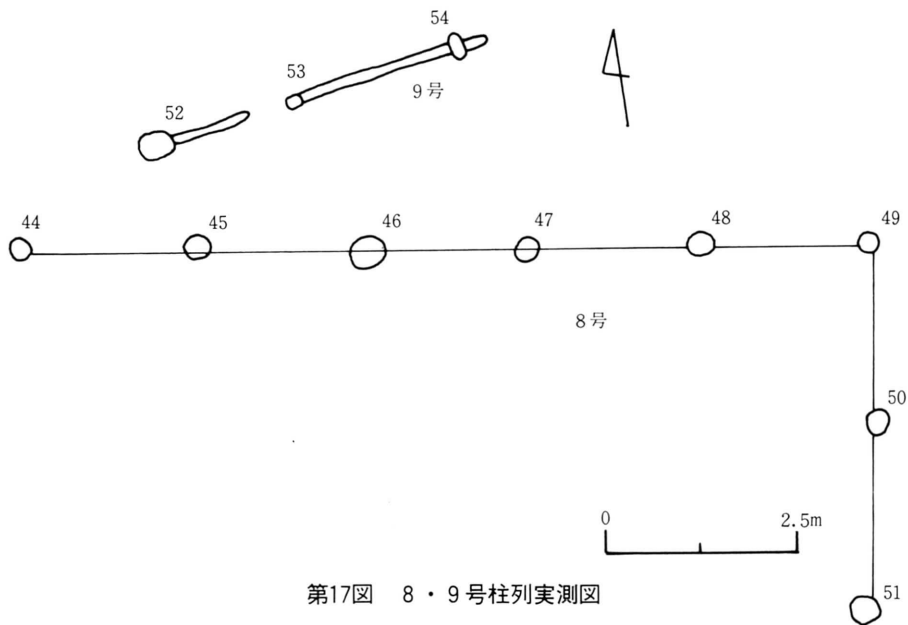
第16図 7号柱列実測図

総長は 10.8 m (36尺) で 5 間、柱間寸法は、38—39—40—41—42—43 で、2.25 m (7.5尺)・2.25 m (7.5尺)・1.77 m (5.9尺)・2.4 m (8尺)・2.15 m (7.2尺) となり、40—41 間でやや狭く、7.5 尺が 2 間、7 尺台、8 尺とやや統一に欠く。

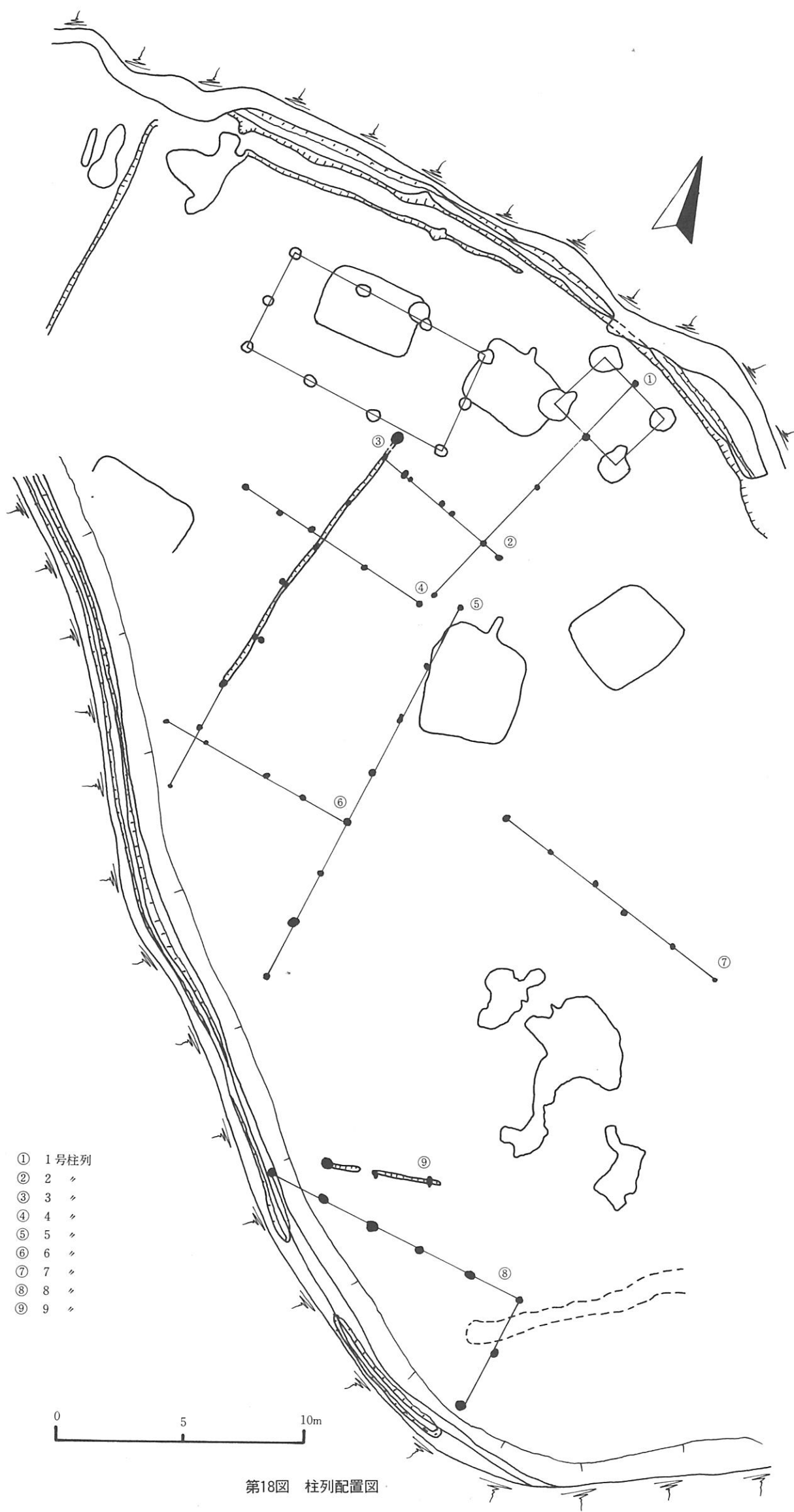
**8号 (Bh 06) 柱列 (第17図 図版4)**

柱穴44～51の柱列で、調査地の南側段丘崖に向けて「カギ」状に位置する。東西は44～49まで5間、南北が49～51の2間である。49～51の南北方向は真北に対し8° 東を指し、5号柱列と同じ方向を示す。

東西方向の44～49の総長は 11.35 m (37.9尺) で、柱間寸法は、44—45—46—47—48—49 で、



第17図 8・9号柱列実測図



- ① 1号柱列
- ② 2号柱列
- ③ 3号柱列
- ④ 4号柱列
- ⑤ 5号柱列
- ⑥ 6号柱列
- ⑦ 7号柱列
- ⑧ 8号柱列
- ⑨ 9号柱列

第18図 柱列配置図

2.37 m (7.9尺)・2.25 m (7.5尺)・2.15 m (7.2尺)・2.37 m (7.9尺)・2.25 m (7.5尺)となる。

柱穴49地点で直角に南に折れ、49～51の南北列となる。総長は4.8 m (16尺) 2間で、49—50—51の柱間寸法は、2.4 m (8尺)・2.4 m (8尺)となる。

東西列では、46—47間が7.2尺と狭いが、他は7.5尺2間、7.9尺2間であり、しかも、それが交互の様相を呈する。一方、南北列は8尺等間を示し、総じて明瞭な規則性をもっている。

柱間寸法は7.5尺および8尺近似の数値が示され、しかも、それが交互の様相で配されることと、南北方向が真北に対し8°東を指す状況は、5号柱列とほとんど同じであると言える。

#### 9号(Bh03)柱列(第17図 図版4)

柱穴52～53で、3号柱列と同様に巾30cm内外で検出面からの深さ10cm内外の浅い溝を伴うものである。東西方向に走り真北に対し80°東を向く。

総長4.25 m (14.2尺)の2間で、柱間寸法は、52—53—54で、2 m (6.7尺)・2.25 m (7.5尺)を測る。

## 4 小溝

溝は5項で述べる段丘崖沿いの溝と合せて4条検出されているが、ここで扱う溝は位置的に前者と異なり、柱列を伴う溝と同規模の比較的小さな溝についてである。なお、呼称は5項で扱う溝との混同を避けるため「小溝」とした。

#### 1号(Ad12)小溝(第1・18・20図 図版4)

南北に走る溝で、真北に対し約7°30′東方向を指す、この方向は、5号柱列および8号柱列の南北列とはほぼ同じである。

検出された北端はAd12グリットで、北側開析谷崖近くで東に折れる様相を呈し、2号小溝に直結していた可能性もある。

北端から南へ約10m走りAg15グリットで調査区外に出る。上巾30cm、下巾10cm内外で、検出面からの深さは10cm内外であり、3号・9号の溝を伴う柱列溝とはほぼ同じである。

溝の北半西側に1号・2号焼土遺構、東側に3号焼土遺構が隣接して位置する。

#### 2号(Ad09)小溝(第1・18図)

Ad09グリット内3号焼土遺構の北東端から、北側開析谷沿いの2号溝に沿って東西に走り、真北方向に対し約93°東を指し、西延長線は1号小溝の北端にほぼ直交する。なお、3号焼土遺構との関連を確証づける資料に欠け明確でないが、むしろ、1号小溝とは規模および前述した状況から同機能をもった関連施設と考えられる。

検出された長さは、約12.5m、巾約30cm、深さ10cm内外を測り、1号小溝と全く同様の規模と認められる。

## 5 段丘崖縁辺溝その他

南側段丘崖および北側開析谷沿いの1号・2号溝、土器集積の3号溝とがある。

### 1号(Ai 18)溝(第1・18図)

南側段丘崖に沿う溝で、段丘崖肩から約2m内外を測る内側から外に向けて巾約0.8mほどが高低差10cm内外の非常にゆるやかな傾斜をもって低くなり、巾約1mほどの平坦面が段丘崖に沿い帯状にあり、犬走りのなものかとも推察される。

この平坦Ⅱ層面に検出された。途中断続するが、長さ約43mあり、巾0.5m内外で深さは約10~15cmほどの比較的浅い溝である。埋土は暗褐色土を主体に多くの土器細片を含む。

### 2号(Ad 09)溝(第1・18図)

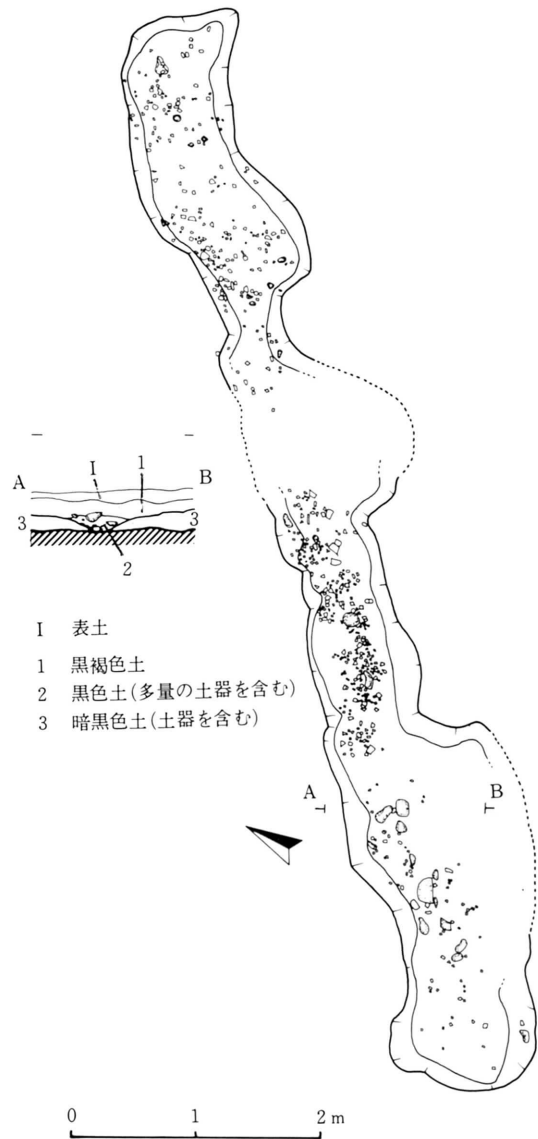
北側開析谷崖沿いの平坦Ⅱ層面に、ほぼ東西に走り検出された。長さ約25mで、西端は崖に落ちこみ、東は調査地外に延びるものと推察される。巾0.5m内外で深さは15cm内外を測る。

### 3号(Bj 53)溝(第19図)

Aj 53~59グリットへかけて東西に走り西端が8号柱列柱穴49-50間に入る溝で、状況からすると溝と断定しかねる点もあり、溝状遺構とする方がよいとも思われるが、一応「溝」と呼称する。

検出面は、第19図の断面に示すように、3層とした暗黒色土上面で、地山面ではない。すなわち、遺構は地山面の上に乗る3層を掘り込んでいて、整地層の存在も推察されるが明確ではない。

溝は真北に対し約45°東を指し、長さ約9mを測り、上端、下端とも出入りが多く巾は一定しないが、大旨1m内外であり、検出面からの深は25cm内外である。断面は



第19図 3号溝



逆台形に近く、埋土は2層の黒色土が主体をなし、多量の土器片と礫を含み、人為的に短期間に埋没したものと考えられる。1層・3層とも土器片を含むが2層ほどではない。なお、3層は粘性があり固い層であり、1層は粘性の少ない草木根をかなり含む層である。

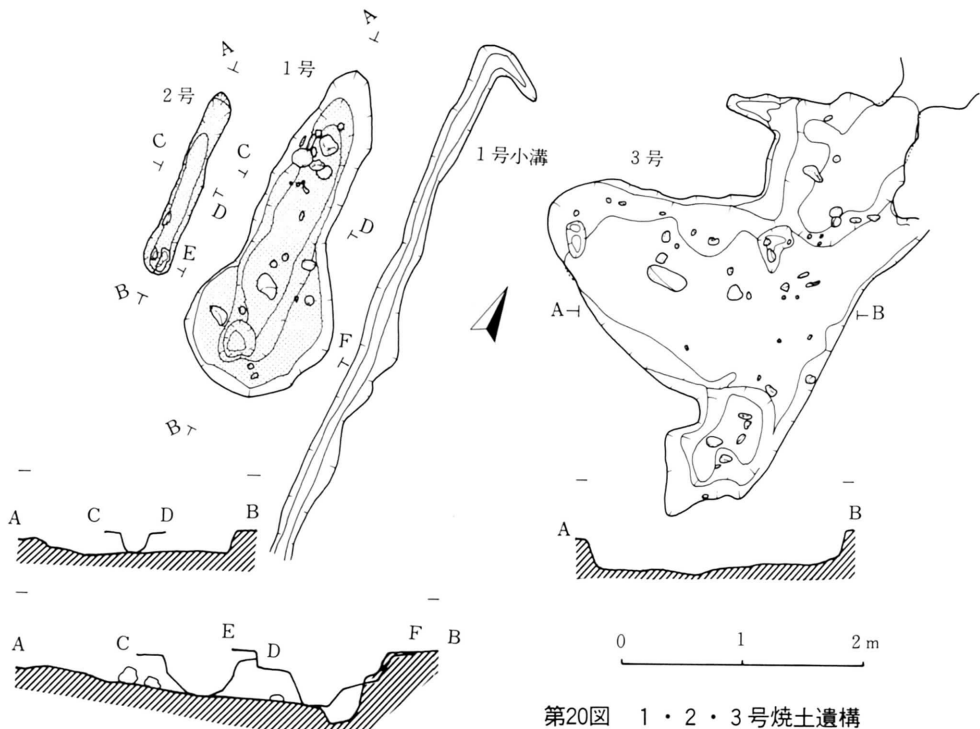
溝内出土遺物は土器で、実測可能なもの3点、坏18（第24図18）・坏63・64（第25図63・64）である。坏18はB<sub>1</sub>類、坏63・64はB<sub>2</sub>類としたものである。その他は破片で約280点で細片も含めると相当量になる。280点中、A類とした還元焰焼成のもの7点、C類とした酸化焰焼成で内面黒色処理のもの20点で、圧倒的にB類の酸化焰焼成土器が多く、底部観察可能なものはすべて回転糸切りである。

## 6 焼土遺構

いずれも、調査地の北西端で北側開析谷縁辺で検出され、1号・2号焼土遺構と3号焼土遺構の間を1号小溝が南北に走る。

### 1号（Ad12）焼土遺構（第20図 図版4）

Ⅱa層面の検出で、長楕円と円形を合した様相で、長だるま状の平面形を呈し、長軸はほぼ真北を向く。機能的には竈的なものが考えられ、<sup>(1)</sup>円形部分が焚口で長楕円部分が燃焼部かと推



第20図 1・2・3号焼土遺構

察される。

長軸は 2.8 m、短軸は燃焼部中間で 65 cm、焚口で 1.2 m を測り、検出面からの深さは燃焼部中間が 40 cm、焚口最深部で 60 cm を測り、焚口は一段と落ちこみ燃焼部先端へゆるやかな傾斜をもって上がる。

壁はやや外開きに立つが概して傾斜はきつく、床は凹凸が少ない。全般に壁および床とも強い火熱によって瓦礫状に焼けている。床面に径 20 cm 大の焼けた礫を認めたが、その性格は不明である。

### 2号 (Ad15) 焼土遺構 (第20図 図版4)

1号焼土遺構の西側に平行し隣接する位置で、IIa層面で検出された。溝状の平面形を呈し、1号焼土遺構とは形態的に異なり、同じ機能を考えるより位置的関連からすると1号焼土遺構に付属する施設とも考えられる。

長軸 1.6 m、短軸 24 cm で、検出面からの深さ 20 cm、長軸断面の北側が傾斜し上がることから北に先端があるものと思われる。

壁はやや外開きであるが、傾斜はきつく、床はほぼ平坦である。壁・床とも焼けている。

### 3号 (Ad12) 焼土遺構 (第20図 図版4)

1号焼土遺構の約 2 m 東に位置し IIa層面の検出である。平面形は凸状をなす不整の三角形状を呈する。形状からすると、東西方向を向く施設と考えられるが、確認する条件に欠ける。

東西軸は 2.6 m、南北軸は底辺部分で 3.6 m を測る。検出面からの深さは 25～30 cm あり、壁はほぼ直に立ち、床面は若干の凹凸をみるが総体的には平坦である。

しかし、南東端に長径 1.2 m、短径 80 cm、底面からの深さ 10 cm の楕円状の落ちこみと、これに対する北東端に長径 1.45 m、短径 90 cm、底面からの深さ 10 cm の楕円状の落ちこみが認められ、ともに長軸が南北方向を指す。これらが遺構の中で如何なる機能をもつものか、または、まったく別個の遺構になり得るものか不明な点である。

いずれにしても、3号とした本遺構の底面に火熱をうけ焼土化した部分を全般的に認めたことから一括し3号焼土遺構としたものである。なお、1号・2号焼土遺構に比し火熱のうけ方は弱い。

注(1) 和賀町梅ノ木第I地区1号焼土遺構など多くの例をみる。

「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告書IX」 岩手県教育委員会

## 7 鉄滓等堆積地

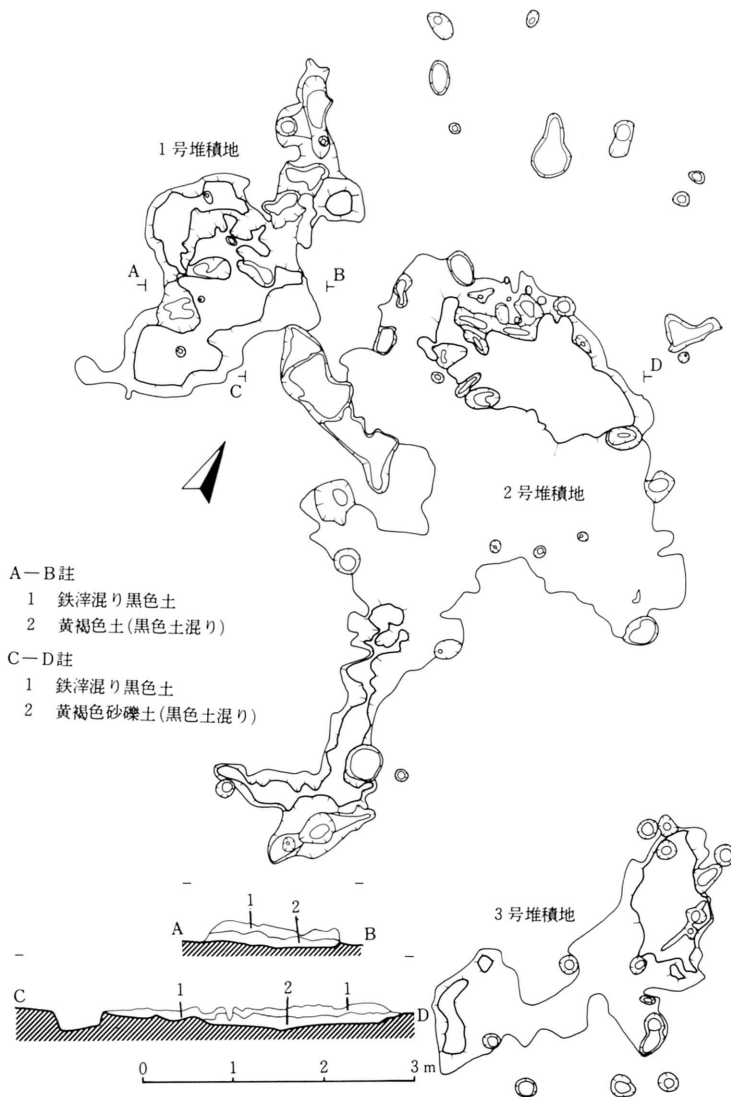
Be～Bh53～59グリット内に大小3カ所の鉄滓等の堆積地が認められた。

### 1号堆積地 (第21図 図版4)

3カ所の堆積地中、北西に位置し、約4 m × 2 mの不整の範囲に堆積する、断面A—Bに示す如く、2層に黒色土混りの黄褐色土があり本来の地山ではない。その上面は鉄滓塊混りの黒色土が、最も厚い部分で10 cm内外の堆積を示す。

### 2号堆積地（第21図 図版4）

3カ所中、中に位置し最も広い範囲をもつ、約4.5 m × 3 mの範囲を中心に更に南へ約4 mの半島状の広がりをもつ、断面C—Dで堆積の状況を見ると、1層が鉄滓含みの黒色土で、その下に黒色土混りの黄褐色砂礫土があり、上面の一部は熱をうけて焼土化している部分があり、また層中に焼土も含む。1層は最も厚い部分で10 cm内外、2層は15 cm内外である。



第21図 鉄滓堆積地

### 3号堆積地（第21図）

最も南に位置し、1.2 m × 3.7 mの範囲の不整状に広がる、堆積の様相は1号・2号と同様であるが、1層部分が非常に薄い状況である。

#### 1号～3号をまとめて

堆積の中心は2号堆積地である。3者を通じ鉄滓含みの1層は一面の広がりをもつものではなく、斑点状に広がり、特に、1号堆積地の南半と2号堆積地の北半が厚い、1、2層とも比較的焼土を含み、断面から推察して若干の掘りこみをもって投棄したものと考えられる。なお含まれている鉄滓は<sup>(1)</sup>柔らかく焼成温度が比較的低いものと観察される。

注(1) 釜石市在住鉄研究者新沼鉄夫氏に現地指導をいただき、実見されたところでは低温加熱でいわゆる鉄滓とするものではないと指摘されたが、適当な用語を得ないため「鉄滓」と呼称している。

## 8 整地層

整地層の存在は、3号住居跡および4号住居跡の埋土1層がそれぞれ住居跡外にまで及んでおり、しかも、1号掘立柱建物跡の柱穴がこれらの層に掘り込まれていることから確認した。

整地層については記録しなかったので、その範囲と層厚、土性等については他資料からの推察になるが、以下のように考えられる。

推察される範囲は、3号住居跡、4号住居跡の埋土1層を整地層とみると、3号住居跡の東壁から4号住居跡の西壁までは、少なくともその範囲とすることができるし、1号掘立柱建物跡の柱穴2・3・4と2号掘立柱建物跡の柱穴4は明らかに整地層を掘り込んでいることから言える。それ以上の広がりについて、西方では1号掘立柱建物跡の西梁行の1・10・9柱穴がⅡa層面検出で整地層への掘り込みを認めないことから、4号住居跡の西壁付近までとみることができる。一方、東方については、明確さを欠くが、後述する土器片出土量と整地層が関連あると仮定するならば、2号掘立柱建物跡の西半を含む辺までであろうかと推察される。

南北範囲は、1号掘立柱建物跡の柱穴5と南列桁行の柱穴6～9でみると、5は整地層を掘りこみ、6～9はⅡa層面の検出であることから、整地層は、1号掘立柱建物跡南列桁行まで及んでいないことになり、柱穴5は、3号住居跡の南壁に沿うことから、3号・4号住居跡の南壁を結ぶ線から若干南に広がる範囲かと考えられる。北については、推察する資料に欠く。

以上から、東はAh56グリットの北東隅と南西隅の対角線、西はAf06グリットの北東隅と南西隅の対角線、南はAh56グリットの南西隅からAf06グリットの南西隅を結ぶ線が推定され、北側については明確でない。

整地層と推察した理由は前述したが、3号・4号住居跡の埋土1層がともに黒褐色土に鉄滓塊と土器の細片を多く含み、しかも住居跡外に広がりをもっており、グリットごとの土器の分布量（第22図）をみても密度が高く、住居跡廃棄後の短時に廃棄土器もからめ整地したものと

考えられる。

## 9 遺構外の検出遺物

遺構外から検出された遺物には数点の鉄片を含むが、形態を把握できぬ細片であり割愛し、土器についてのみ述べる。

検出された土器は約4,570点に及び、復元、実測可能土器は、いずれもロクロ使用の酸化焰焼成の坏（第2表 第23・24・25図 図版6）のみであり、B<sub>1</sub>類としたものが、坏15・16・19～27、B<sub>2</sub>類とした皿状の小型坏が、坏28・41～62・65～70である。坏の分類についてはまとめの項で後述するが、B<sub>1</sub>類としたものは、口径13cm以上のいわゆる环形土器であり、B<sub>2</sub>類は口径10cm以下で器高の低い小型の皿状の土器である。

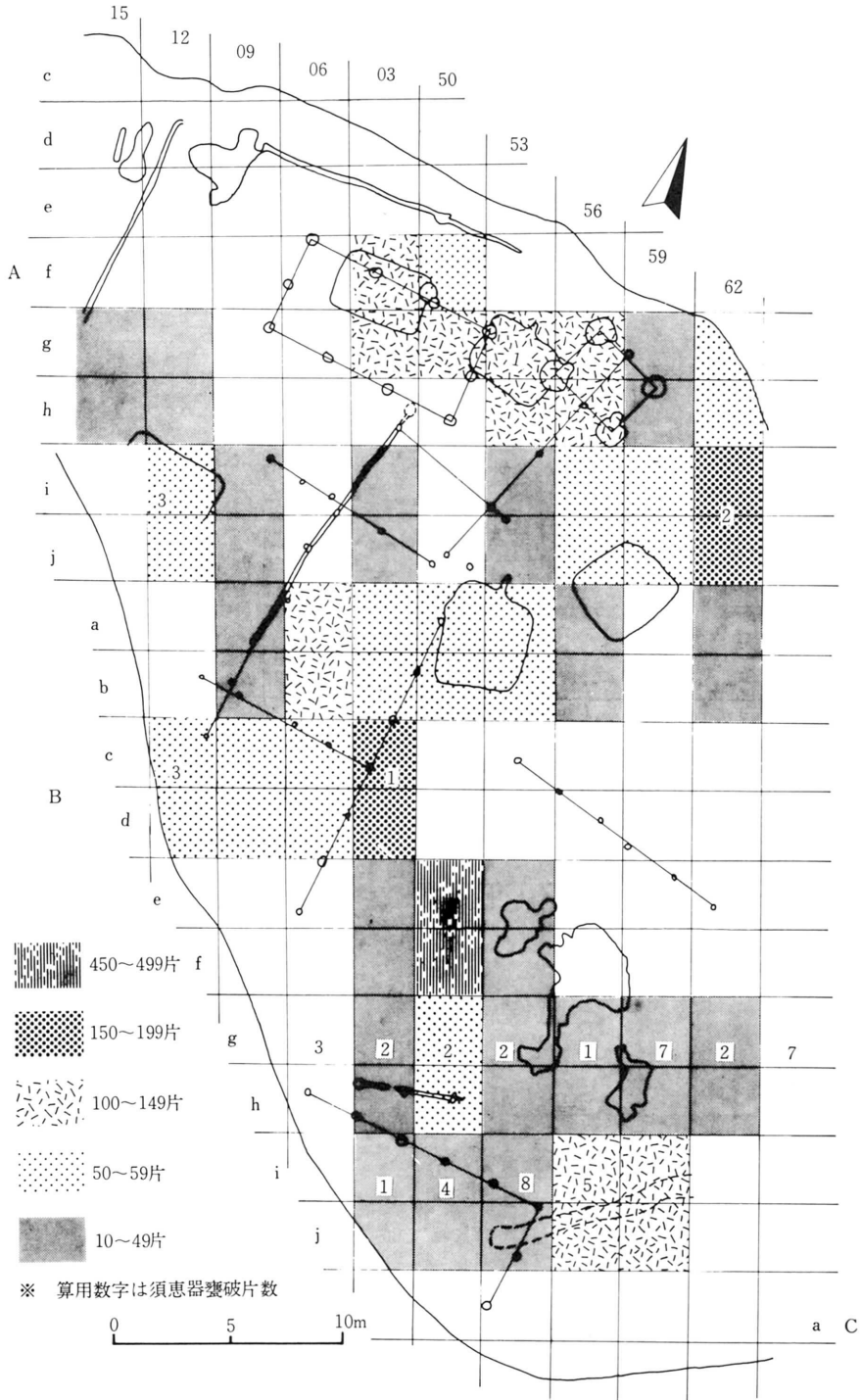
以上からみると、復元、実測可能土器はB<sub>1</sub>類が11点、B<sub>2</sub>類が30点と後者が多い、しかし器の大・小の関係で細片化する度合の相違があり、このことをもって単純にB<sub>1</sub>類とB<sub>2</sub>類の比率を示すものとは言えない。事実この期の土器は軟質のものが多く、細片化し摩滅が著しく破片をもってB<sub>1</sub>類とB<sub>2</sub>類の区別のつけがたいものが多く、むしろ小型なるが故、B<sub>2</sub>類の残りが良い傾向にある。

したがって、破片については、B<sub>1</sub>類とB<sub>2</sub>類について詳細に分けることをせず、焼成方法のちがいで、A類を還元焰焼成、B類を酸化焰焼成、更に坏については酸化焰焼成で内面黒色処理の坏をC類として、その比率とそれらをまとめて調査地における分布状況を示す。

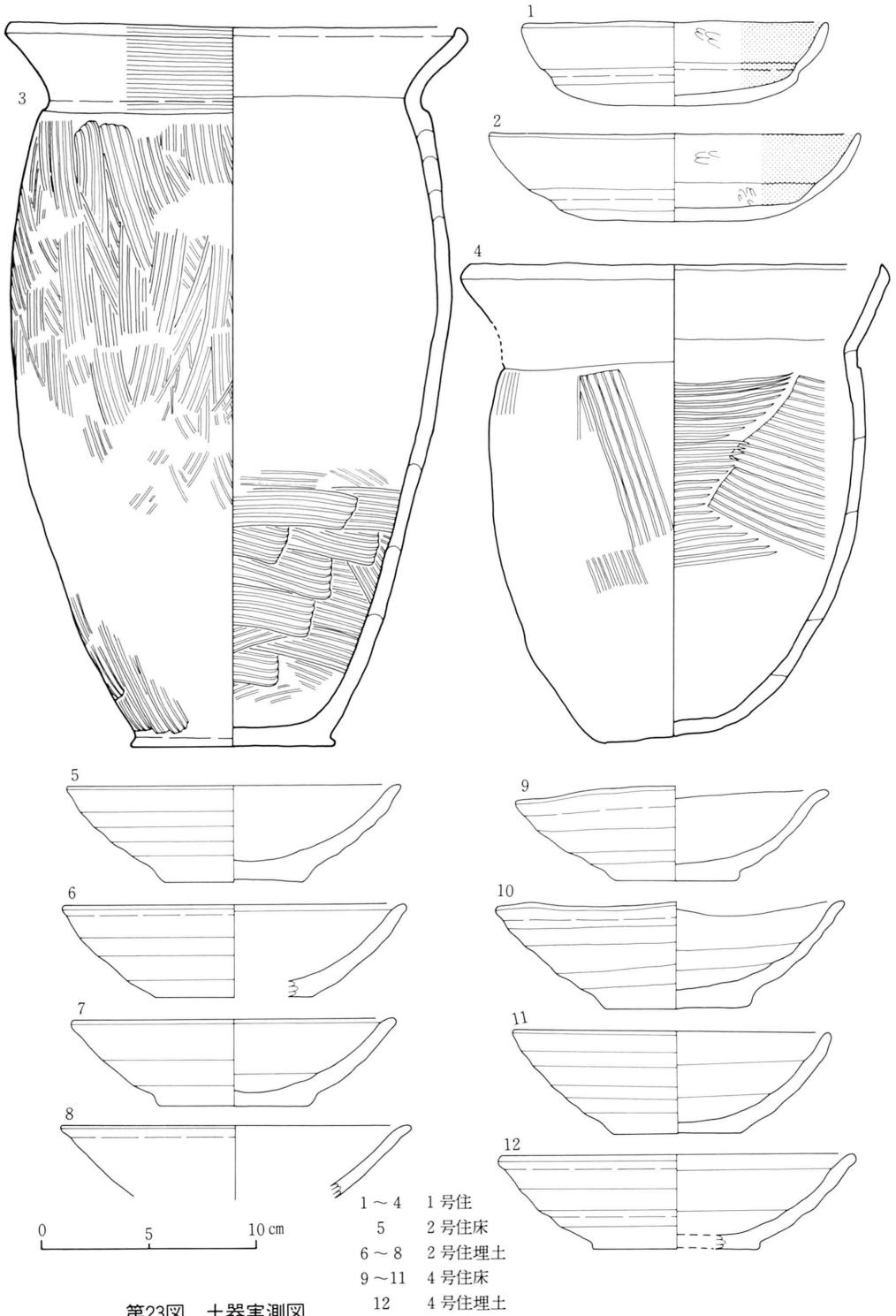
約4,570点中、A類坏が約40点で0.9%、A類甕は約80点の1.8%、B類坏が約4,300点で94%、B類甕が約70点で1.5%、C類坏が約80点の1.8%となり、圧倒的にB類の坏が高い比率をしめる。

各器種、類ごとの部位では、A類坏で口縁部5点、底部6点が認められ、底部は1点の摩滅による不明を除き、回転糸切り無調整である。B類坏では、口縁部約310点、底部は約380点で、摩滅で不明の約60点を除き、回転糸切り無調整のものである。C類坏では口縁部11点、底部15点で、うち、9点は回転糸切り無調整で他は不明である。甕類ではA類が口縁2点のみで他はすべて体部のみであり、平行叩き目文様のものが多い。B類では口縁5点、底部5点で切り離しは摩滅で不明である。器種の上では、坏が主流をしめ、A類、B類とも甕は少量の出土である。

土器片の分布状況は第22図に示す通りであるが、北側整地層のある3号・4号住居跡付近、2号住居跡の北Aij 62グリットおよび鉄滓堆積地周辺が多く、特にA類とした須恵器甕片が集中することが、3号溝周辺と合せて特徴的である。

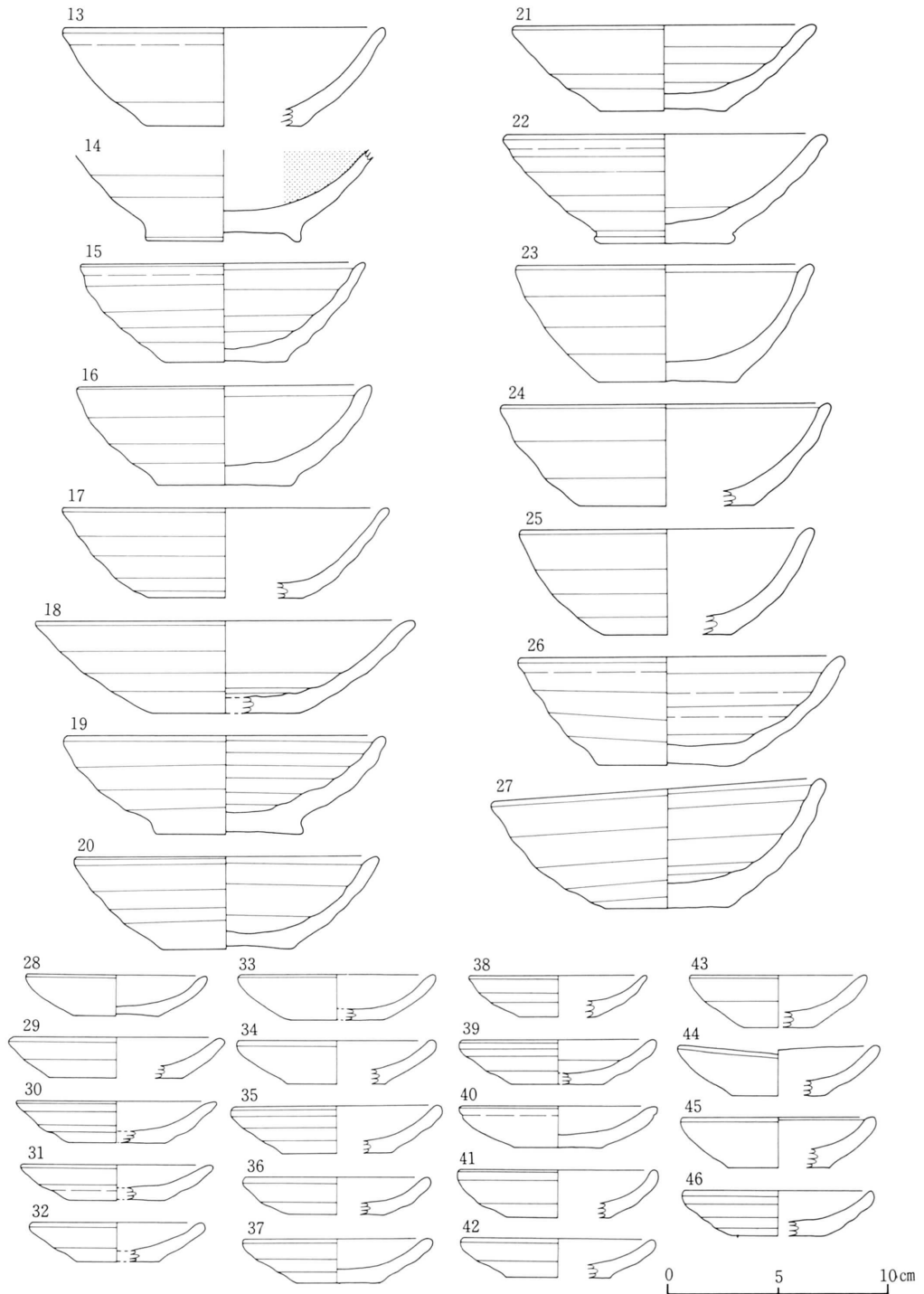


第22図 土器片分布状況



第23図 土器実測図

— 鳥海A遺跡 —



13. 4号住埋土

14. 5号住床

17. 2号溝

18. 3号溝

19. 3号住

30~32. 2号建物柱穴4

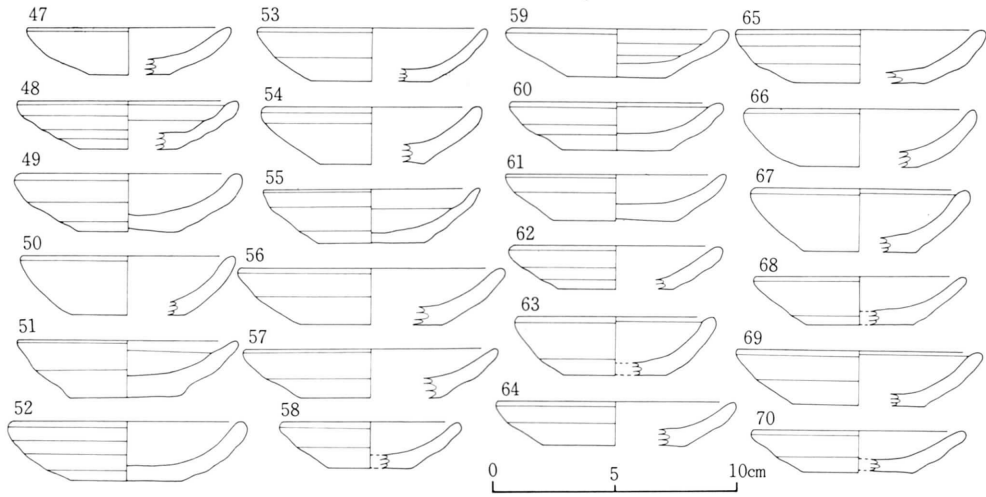
33. 2号建物柱穴1

34. 2号建物柱穴3

35~39. 2号溝

第24図 土器実測図





63 64 3号溝

第25図 土器実測図

第2表 土器一覧表

分類	計測値					色調	残存率(%)	図化	出土地点	登録番号	挿図番号
	cm 口径(a)	cm 底径(b)	cm 器高(c)	(%) (b)/(a)	(%) (c)/(a)						
B <sub>1</sub>	15.4	6.4	4.5	42	29	7.5YR7/4 にぶい橙	60	反転	2号住床	23-9	23図-5
"	15.8	7.2	4.3	46	27	7.5YR6/3 にぶい褐	20	反転	2号住埋土	147-79	" 6
"	15.0	7.0	4.1	47	27	7.5YR7/6 橙	30	反転	" "	147-80	" 7
"	16.2	/	(3.3)	/	/	7.5YR8/3 浅黄橙	20	反転	" "	148-89	" 8
"	14.6	5.6	4.4	38	30	" "	80		4号住床	24-10	" 9
"	16.0	7.0	5.0	44	31	7.5YR8/6 浅黄橙	90		" "	11-6	" 10
"	14.6	6.0	5.0	41	34	7.5YR7/3 にぶい橙	70		" "	11-5	" 11
"	16.4	7.6	4.4	46	27	10 YR8/4 浅黄橙	40	反転	4号住埋土	5-3	" 12
"	14.6	7.0	4.5	48	31	7.5YR7/3 にぶい橙	20	反転	" "	10-4	24図-13
内黒台付坏	/	7.0	(3.9)	/	/	7.5YR8/3 浅黄橙	35	反転	5号住床	7-87	" 14

— 鳥海A遺跡 —

分類	計測値					色調	残存率(%)	図化	出土地点	登録番号	挿図番号
	口径(a) cm	底径(b) cm	器高(c) cm	(b)/(a) (%)	(c)/(a) (%)						
B <sub>1</sub>	13.0	5.5	4.5	42	35	10 YR8/3 浅黄橙	70		鉄滓北端	135-62	24図-15
"	13.2	6.0	4.5	45	34	5 YR7/4 にぶい橙	30	反転	"	135-63	" 16
"	14.8	7.0	4.1	47	28	2.5 YR6/8 橙	20	反転	2号溝	138-72	" 17
"	17.2	6.6	4.2	38	24	5 YR7/4 にぶい橙	20	反転	3号溝	159-86	" 18
"	14.5	6.6	4.5	46	31	5 YR7/6 橙	90		南斜面埋土	14-7	" 19
"	13.6	6.0	4.2	44	31	7.5 YR6/4 にぶい橙	50	反転	"	1-1	" 20
"	13.8	5.8	3.9	42	28	5 YR6/4 にぶい橙	30	反転	"	1-2	" 21
"	14.4	5.8	5.0	40	35	10 YR7/4 にぶい黄橙	20	反転	Aij12	61-20	" 22
"	13.4	6.3	5.3	47	40	5 YR6/6 橙	40	反転	Aj59	72-27	" 23
"	14.8	8.0	4.7	54	32	5 YR7/6 橙	20	反転	Bgh50	114-49	" 24
"	13.2	5.8	4.8	44	36	5 YR7/4 にぶい橙	20	反転	Bf50	125-56	" 25
"	14.6	6.2	4.9	42	34	10 YR7/4 にぶい黄橙	40		不明	34-13	" 26
"	15.0	5.7	5.4	38	36	7.5 YR8/6 浅黄橙	80		"	31-12	" 27
B <sub>2</sub>	8.2	3.8	1.9	46	23	5 YR7/4 にぶい橙	25	反転	Ba53	29-11	" 28
"	9.4	6.0	1.9	64	20	5 YR5/4 にぶい赤褐	20	反転	3号住	21-8	" 29
"	9.2	4.4	1.9	48	21	7.5 YR7/4 にぶい橙	20	反転	2号建物柱穴4	140-75	" 30
"	8.6	4.2	1.6	49	19	7.5 YR8/3 浅黄橙	20	反転	"	140-76	" 31
"	7.8	3.8	1.8	49	23	"	15	反転	"	140-77	" 32
"	8.8	4.2	2.1	48	24	5 YR7/4 にぶい橙	20	反転	" 1	142-78	" 33
"	8.8	4.4	2.0	50	23	5 YR7/6 橙	10	反転	" 3	139-74	" 34
"	9.2	5.0	2.1	54	23	7.5 YR7/4 にぶい橙	20	反転	2号溝	138-64	" 35
"	8.4	4.4	1.7	52	20	7.5 YR8/3 浅黄橙	20	反転	"	138-69	" 36
"	8.4	3.6	2.0	43	24	7.5 YR7/6 橙	45	反転	"	138-70	" 37
"	8.0	3.4	1.9	43	24	5 YR7/8 橙	20	反転	"	138-71	" 38
"	8.8	4.1	2.1	47	24	7.5 YR7/4 にぶい橙	20	反転	"	138-73	" 39
"	8.8	4.0	1.9	45	22	5 YR5/6 明赤褐	25	反転	Aef50	50-18	" 40
"	8.8	4.6	2.2	52	25	5 YR4/6 赤褐	20	反転	Agh62	69-26	" 41
"	8.6	4.8	1.8	56	21	5 YR5/4 にぶい赤褐	20	反転	Ai59	58-19	" 42

分類	計測値					色調	残存率(%)	図化	出土地点	登録番号	挿図番号
	cm 口径a)	cm 底径b)	cm 器高c)	(%) (b)/(a)	(%) (c)/(a)						
B <sub>2</sub>	8.0	3.0	2.4	38	30	7.5YR8/4 浅黄橙	20	反転	Aij 62	66-23	24図-43
"	9.0	4.2	2.3	47	26	5 YR7/6 橙	25	反転	Bab 6	85-34	" 44
"	8.8	4.6	2.3	52	26	5 YR6/4 にぶい橙	20	反転	"	86-35	" 45
"	8.6	4.2	2.1	49	24	7.5YR7/4 にぶい橙	20	反転	Bc 9	93-37	" 46
"	8.4	3.4	1.9	40	23	5 YR8/4 淡橙	20	反転	Bcd 3	94-88	25図-47
"	9.0	4.0	2.0	44	22	7.5YR8/3 浅黄橙	30	反転	Bcd 6	98-39	" 48
"	9.4	4.2	2.4	45	26	7.5YR7/3 にぶい橙	35	反転	"	98-40	" 49
"	8.6	4.6	2.4	53	28	5 YR8/4 淡橙	20	反転	Bcd 12	99-41	" 50
"	9.0	4.6	2.4	51	27	7.5YR7/6 橙	90		Bef 50	102-42	" 51
"	9.4	4.6	2.4	49	26	" "	40	反転	Bf 50	104-45	" 52
"	9.2	4.8	2.2	52	24	5 YR6/6 橙	25	反転	"	104-46	" 53
"	8.8	4.2	2.4	48	27	7.5YR7/4 にぶい橙	20	反転	"	125-52	" 54
"	8.8	4.4	2.2	50	25	7.5YR7/6 橙	40	反転	"	125-53	" 55
"	10.8	5.8	2.3	54	21	5 YR7/6 橙	20	反転	"	125-54	" 56
"	10.4	5.8	2.0	56	19	" "	20	反転	"	125-55	" 57
"	7.2	3.4	1.9	47	26	5 YR6/4 にぶい橙	20	反転	Bgh 56	117-50	" 58
"	8.8	4.0	2.0	45	23	7.5YR8/3 浅黄橙	45	反転	Bij 56	155-84	" 59
"	8.6	4.4	2.0	51	23	5 YR7/6 橙	20	反転	Bij 62	158-85	" 60
"	9.0	5.0	1.9	56	21	7.5YR8/2 灰白	60	反転	B区 Z	40-17	" 61
"	8.4	4.8	1.8	57	21	7.5YR6/4 にぶい橙	20	反転	B区 西端	122-51	" 62
"	8.0	4.2	2.4	53	30	5 YR7/6 橙	20	反転	3号 溝	149-81	" 63
"	9.8	5.8	1.8	59	18	" "	20	反転	"	149-82	" 64
"	10.2	5.2	2.2	51	22	" "	20	反転	西半部	133-57	" 65
"	9.4	4.8	2.4	51	26	5 YR7/4 にぶい橙	20	反転	"	133-58	" 66
"	8.6	4.6	2.6	53	30	" "	20	反転	"	133-59	" 67
"	8.6	4.4	2.0	51	23	" "	20	反転	"	133-60	" 68
"	10.0	5.4	2.2	54	22	5 YR7/6 橙	20	反転	Z Z	34-15	" 69
"	8.6	4.4	1.7	51	20	5 YR5/4 にぶい赤褐	20	反転	"	36-16	" 70

#### IV まとめ

前項において、調査によって得られ資料にもとづき、事実の記載をしたが、以下、それを整理し若干の予察を加えながらまとめる。

##### 1 遺構について

###### (1) 竪穴住居跡

5棟検出された住居跡の中で、1号住居跡は構造の一部と共伴遺物が、他の2号～5号住居跡と異なる。すなわち、北壁中央にかまどをもつこと、出土した土器は、いずれもロクロ不使用で、坏は出土2個体とも、酸化焰焼成の内面黒色処理をしたいわゆる内黒土師器であり、底・体を区画する段もしくは痕跡をもち、底部は丸底風を呈する、口径の比較で14.4cmと17.4cmで大・小があり、出土甕の2点の比較でも、長胴の大型の甕と中型の甕のセットからなる。

2号～5号住居跡にあっては、下の第3表に示すように、いずれも、かまどを有せず、地床炉と目される焼土を認める。平面形は、2号住居跡がややゆがみをもつが正方形に近い形を呈し、南北方向が約22°東を向くのに対し、3号～5号住居跡は平面形、規模および方向とも近似の様相をもつ。

共伴遺物は、B類とした酸化焰焼成の坏が、各住居跡とも主流をなし、2号・4号・5号住

第3表 2～5号住居跡一覧表

	平面図	規模 (東西×南北)	検出面から の深さ	炉	柱穴	方向 (南北軸)
2号住	隅丸方形	3.35 × 3.75 m	15cm	1	5	約22°東
3号住	隅丸長方形	3.70 × 2.80	10	2	4	ほぼ北
4号住	隅丸長方形	4.00 × 2.75	14	1	不確認	ほぼ北
5号住	隅丸長方形	4.50 × 2 + α	5	2	不確認	ほぼ北

居跡でC類坏片1～2点、特徴的なものでは5号住居跡の酸化焰焼成で内面黒色処理で口縁部を欠損した高台付坏がある。これらの土器は、観察可能な限りすべて回転糸切り無調整のものである。

1号住居跡と2号～5号住居跡は、構造的にも共伴遺物の上からも明らかに一時期を画するもので、前者は後者に比べ遺物の上でも多様なセットを示すが、後者は坏形の土器のみで、甕形の土器が見出せない。このことは、遺構外検出土器片の類別比率からも言えるし、また、A類とした坏を共伴しないのも同傾向である。

2号～5号住居跡については、住居跡の示す様相と共伴遺物からして、ほぼ同時期のものと推察され、規模、方向等の共通性、3号・4号住居跡埋土1層とされる整地層の存在は、同時廃棄の可能性も考えられる。

1号住居跡と同じ共伴遺物を出す住居跡を近隣する地区に求めると、本調査区の北方約300mの「西根(原添下)遺跡」がある。調査報告書では出土坯の年代観を奈良時代あるいはそれ以前から平安時代初頭までとしており<sup>(1)</sup>、本住居跡もその範疇に入るものであり、さらに、後述する共伴遺物の年代観からすると奈良時代中葉に比定されるものかと推察する。

前出の西根遺跡検出の23号住居跡は、長辺約8.5m、短辺約3.7mの隅丸長方形を呈し、柱穴をもち、その配置から切妻式の屋根を想定している。床面に焚火跡が二カ所認められ、かまどと思われるものはない。出土遺物は土師器、須恵器、鉄器類、甕口がある<sup>(2)</sup>。この中で土師器坯は、本調査地出土のB<sub>1</sub>類・B<sub>2</sub>類坯に類似する。以上の様相は、規模の差異はともかく、基本的構造と出土坯は2号～5号住居跡と同様である。西根遺跡23号住居跡は平安時代中期の年代観が与えられている<sup>(3)</sup>。

一方、年代は中世と新しくなるが、かまどを有しない竪穴住居跡は、盛岡市「つなぎⅢ遺跡」、二戸郡安代町「上ノ山遺跡」<sup>(5)</sup>、花巻市「古館遺跡」<sup>(6)</sup>、北上市「丸子館跡」<sup>(7)</sup>などがあり、年代が下ると、竪穴住居跡にかまどをもたなくなるのが一般的である。すなわち、2～5号住居跡は、中世の竪穴住居跡へ移行する過程の中に位置づけられることと、後述する共伴遺物の年代観等を総合するならば、平安時代後半の時期が推察される。

また、2号～5号住居跡と他遺構との関連をみると、2棟の掘立柱建物跡は、3号・4号住居跡より新しく、同時施設とは言い得ないが、柱列および鉄滓堆積地、焼土遺構、小溝、溝等は、直接的に関連を示す資料をもたず確証を得ないが、同時施設と仮定した場合、住居跡の規模、方向の共通する点に意図的なものが推察され、恣意的ではあるが、一般集落の住居跡とは異なる様相を考える。

- 注(1) 草間俊一 「金ヶ崎町西根遺跡」 金ヶ崎町教育委員会 昭和34年  
(2)(3) 草間俊一 「西根古墳と住居址」 金ヶ崎町教育委員会 昭和43年  
(4) 「御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書」 (財) 岩手県埋蔵文化財センター  
(5) 現地説明会資料 (財) 岩手県埋蔵文化財センター 昭和55年10月28日  
(6) 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」 岩手県教育委員会 昭和56年  
(7) 板橋源 「北上市丸子館調査報告書」 北上市教育委員会 昭和45年

## (2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡は、開析谷崖線に平行し位置する東西3間×南北2間の東西棟で廂は認められない。1尺=0.03m換算で桁行29尺、梁行14尺台規模で、それぞれ9尺台と7尺台の柱間寸法を測る。

一方、2号掘立柱建物跡は、1号掘立柱建物跡の約3.5m東に開析谷崖線に接するかたちで平行し位置する東西1間×南北1間の建物である。東西11尺3寸、南北9尺を測る。

2棟とも、3号・4号住居跡廃棄直後のものと推察される整地層を掘り込んでおり、柱穴埋

— 鳥海A遺跡 —

土からの出土遺物がB類土器に限定されることから、3号・4号住居跡廃棄直後の造営と考えられ、同整地層への掘り込みからみて、同時存在の可能性が考えられる。

柱間数と使用柱の相異から、別機能をもった建物と推察され、1号掘立柱建物跡は、確認できないが、鉄滓堆積地などの存在から近辺に工房的遺構が存在する仮定がゆるされるなら、倉庫などの可能性もある。2号建物は、崖線に接近し、しかも平行することと、柱痕径が30cm～50cmで認められ、相当太い柱を使用したとみられ、4本柱であることなどから、対岸と結ぶ位置に配された門、または櫓等が推察される。ただし、1号柱列が建物の東西列の中間を北にぬけることから、同時存在であった場合は後者の可能性が強い。なお、対岸と結ぶ橋等の施設は確認できなかった。

(3) 柱列と溝を伴う柱列

1～9号の9列を確認したが、さらに増す可能性もある。3号・9号は細い溝を伴うものであり、それぞれの測定値は第4表に示した通りである。

第4表 柱列測定値一覧表（2号を除く）

1尺 = 0.30 m

項目	柱列	1号	3号	4号	5号	6号	7号	8号	9号	計
5.50尺～5.99尺						5.9×1間	5.9×1間			2
6.00尺～6.49尺						6.0×1間				1
6.50尺～6.99尺			6.7×1間			6.7×1間			6.7×1間	3
7.00尺～7.49尺			7.2×2間 7.3×1間				7.2×1間	7.2×1間		5
7.50尺～7.99尺					7.5×2間 7.7×1間 7.9×1間		7.2×2間	7.5×2間 7.9×2間	7.5×1間	11
8.00尺～8.49尺			8.0×2間		8.0×2間		8.0×1間	8.0×2間		7
8.50尺～8.99尺			8.7×1間	8.7×1間 8.8×1間						3
9.00尺～9.49尺						9.2×1間				1
9.50尺～9.99尺		9.5×2間 9.7×1間			9.5×1間					4
10.50		10.5×3間		10.5×1間						4
計		6間	7間	3間	7間	4間	5間	7( $\frac{5}{2}$ )間	2間	41
総長		39.2尺	53尺	28尺	56尺	27.7尺	36尺	37. $\frac{9}{16}$ 尺	14.2尺	
方向		N-23°-E	N-18°-E	N-104°-E	N-8°-E	N-99°-E	N-110°-E	N-98°-E N-8°-E	N-80°-E	

総長はもちろん、柱間寸法も5.9尺台から10.5尺台までの巾をもち、統一されないようであるが、個別にみた場合、あるまとまりを見出すことができる。すなわち、1号柱列では9.5尺～10.5尺・3号柱列では6.7尺～7.4尺・8尺～8.7尺・4号柱列の8.7尺～8.8尺・5号柱列7.5尺～8尺・6号柱列の5.9尺～6.7尺、7号柱列は7.2尺～8尺・8号柱列7.2尺～8尺・9号柱列の6.7尺～7.5尺となる。柱列によっては、1間だけまとまりからぬけて狭いもの、もしくは広いものがあり、これらを例外とすると、その長短差は1尺以内に包括され、配列状況から建物とは考えられず厳密な寸法を必要としない施設とするならば許容される差ではなかろうか。

また、総体的関連からは、7尺から8尺台までに23間、これに近値の6.7尺間を含めると26間が集中し、過半数を越す。しかも、1号柱列・6号柱列は、それぞれ9.5尺以上と6.7尺以下の間尺に統一されるから、これらの9間を除くと、さらにその比率は高まる。一方、各柱列相互に同一柱間寸法を示すものがあり、直接、間接の相関を知見できる。とりわけ、5号・8号柱列は顕著で、しかも、長短交互の配置まで類似する。

以上から、一見、不統一の様相を呈する柱間寸法も、整理すると共通性を見出すことができ、多少の時期的差はあったとしても、2号柱列も含めほぼ同年代と推察する。

さて、柱列を、走る方向で大別すると、南北方向に走る群として、1号・3号・5号があり、それぞれ真北に対する角度は、 $23^{\circ}$ ・ $18^{\circ}$ ・ $8^{\circ}$  東を指す。東西方向に走る群は、2号・4号・6号・7号・9号があり、真北に対し、 $113^{\circ}$ ・ $104^{\circ}$ ・ $99^{\circ}$ ・ $110^{\circ}$ ・ $80^{\circ}$  東に傾むく、8号柱列は東西列と南北列をもち、前者は真北に対し $98^{\circ}$  後者は $8^{\circ}$  東へ傾むく、すなわち、東西列と南北列のなす角は直角であり、東西列の東端から南へ南北列が走る。

これらから、南北方向列では、<sup>①</sup>5号と8号柱列の南北列が $8^{\circ}$  で一致し、これに東西方向列を相関させると、6号と8号柱列の東西列が $99^{\circ}$  と $98^{\circ}$  ではほぼ一致し、しかも、前者に対し直角の関係にある。<sup>②</sup>1号と2号柱列は、 $23^{\circ}$  に対し $113^{\circ}$  で直交の関係にあり、2号にはほぼ近い方角を示すのが、7号柱列の $110^{\circ}$  である。また、<sup>③</sup>3号と4号柱列が $18^{\circ}$  と $104^{\circ}$  で直交に近い。9号柱列のみ他との差があり関連づけができない。

以上の①～③と柱間寸法の関係は、①の5号と8号柱列で、7.5尺～8尺近値の柱間が長短交互の配置を主流とし、強い関連を示し同時施設と見なし得る。柱間寸法では統一されないが、6号柱列も可能性がある。②・③は必ずしも統一された柱間寸法をもたない。したがって、総合し明確なものは①のみで、更に①では、5号柱列北端26から段丘崖まで66.7尺(20m)あり、その中間約33尺で6号柱列が直交すること、5号柱列から東50尺(15m)に8号柱列南北列があることから一層の規則性を認める。②・③は方角的な面から同時期になろうかとの可能性をもつが断定できない。なお、配置状況からして、①～③が同時存在であったものではなく、多

少の先後関係があるように推察するが実態は不明である。

機能を確証づけるものはないが、考えられるのは塀ないし垣等の施設である。秋田県「払田柵跡」政庁地区で塀跡とみられる板材痕をもつ溝（巾30～35cm、深さ30～35cm）が検出されている。<sup>(1)</sup>年代、規模、様相に差異をもつが、3号・9号柱列に伴う溝が板材等を施設したものとすることが可能である。一方、大筋の方向が東西ないし南北に一定し、先後関係はともかく2号～5号住居跡、1号・2号掘立柱建物跡、1号・2号小溝、地形等の関連の中で施設されたものと推察され、地区割りの施設としての塀・垣等でなかろうか。

注(1) 第28次発掘調査現地説明会資料 「払田柵跡」 秋田県払田柵跡調査事務所 昭和54年9月8日

#### (4) 小溝・溝・他について

1号・2号小溝の規模は、3号・9号柱列に伴う溝とほぼ同じであり、1号小溝は真北に対し7°30′東に傾むき、5号柱列および8号柱列の南北列とはほぼ一致する。2号小溝の西延長は、1号小溝北端とほぼ直交する。1号小溝は5号・8号柱列南北列と平行することになり、しかも、5号柱列の西66.7尺(20m)と一定の区切りをなす。したがって、1号・2号小溝と5号・8号柱列は強い相関をもち、同時施設の可能性がある。

1号・2号小溝の機能は、5号・8号柱列の関連から区割り施設も考えられるが、上部構造の施設痕がなく、一方、区割りと排水兼用も考えられるが、確証できない。

段丘崖と開析谷崖縁辺の溝1・2号は、壇塀ないし壇垣などの施設痕とも考えられるが、特定づける資料はなく不明で、今後類例を求め検討しなければならない。

焼土遺構・鉄滓堆積地の詳細は割愛するが、後者について、現場および周辺の調査地内では工房的施設は認められなかった。

## 2 遺物について

### (1) ロクロ不使用の土器

坏2個体(第23図1・2 図版5)、甕2個体(第23図3・4 図版5)で、いずれも1号住居跡での検出である。器形、特徴については、遺構と出土遺物の項で前述したことを参照にし、ここでは坏の年代観について若干述べる。

2個体の坏は、東北北半の編年の中で、前期または第I型式<sup>(2)</sup>とされた範疇に入り、東西南半の編年では、いわゆる国分寺下層式<sup>(3)</sup>にも類似する。

坏1(第23図1 図版5)は、器面の摩滅が著しく調整の細部は不明であるが、体部と底部境に明瞭な段をもち、その中に横ナデの痕跡を認めることから、体部も横ナデ調整であった可能性がある。外面の段に対応する内面にも稜を認める。坏2(第23図2 図版5)も坏1同様



摩滅のため調整は不明であるが、体・底境の段は全く形式化されたものであり、坏1と異なる。

桑原滋郎氏が、多賀城跡の西を流れる砂押川の改修に際し採集した坏をA～Eに細分した上で、技法上、形態上からもA～Eは、AとB～Eとに大別できるとし、Aの坏のみ出土した宮城県「塩沢北遺跡」、B～Eに共通した特徴をもつ坏のみに出土した宮城県「糠塚遺跡」に具体例をあげ、A—栗罌式 B～E—国分寺下層式とし、ただしAについては一つの型式をなりたらしめるものかも知れないとし、更に、報告された東北北半の資料を検討の上、B～E（国分寺下層式）が第I型式に併行するものとしている<sup>(4)</sup>。

さて、1号住居跡検出の坏を桑原氏のA～Eに比較する。技法は不明瞭なため、形態のみになるが、坏1はAに類似し、坏2はB～Eに、とりわけB・Cに類似するものかと思われる。しかも、坏1は、体部横ナデが推察され、体・底境の段が強く、対応する内面の稜が明瞭である点では栗罌の技法を要素としてもちながら、形態的には、器が浅く、体が外傾し低部の丸味が小さくなり、新しい段階の要素ももつ。いわゆる過渡期的なものであろうか。

これらの土器に対する年代観は種々あるが<sup>(5)</sup>、おおむね奈良時代に、下っても平安時代初頭までに含まれる。その中で、桑原氏は事例検討をふまえ、8世紀後半から9世紀半にかけての年代観を与えており<sup>(6)</sup>、1号住居跡検出の坏を対比するとき、坏1の存在から、桑原氏の言う8世紀後半より古くなる可能性があり、諸条件の相異を考慮すると短絡的には言い得ないにしても、8世紀中半を下らない年代が考えられる。

- 注(1) 草間俊一 先史期「盛岡市史」 盛岡市  
(2) 桜井清彦 東北地方における集落址の研究「館址」 東京大学出版会 1958  
(3) 氏家和典 陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって——奈良・平安期の諸問題——  
「柏倉亮吉教授還暦記念論文集 山形県の考古と歴史」 山教史学会 1967  
(4) 桑原滋郎 東北地方北部および北海道の所謂第I型式の土師器について  
「考古学雑誌」第61巻 第4号 日本考古学会 昭和51年3月  
(5) 草間俊一 奈良時代あるいはそれ以前から平安時代初頭  
「金ヶ崎町西根遺跡」金ヶ崎町教育委員会 昭和34年 前掲(1)他  
桜井清彦 奈良時代後期 前掲(2)  
氏家和典 8世紀後半中心 前掲(3)  
(6) 前掲(4)

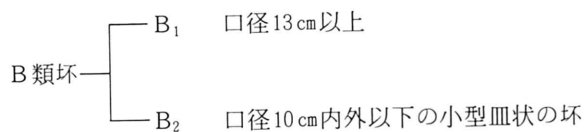
(2) ロクロ使用の土器

出土遺物のほとんどをしめ、しかも破片で実測可能土器(第2表 第23~25図 図版5、6)も反転実測が大半である。

焼成によって、還元焰焼成をA類、酸化焰焼成をB類、酸化焰焼成で黒色処理のあるものをC類とした。B類が圧倒的に多く、器種別では坏で、甕は辛じて遺存する程度で、この傾向はA類、C類坏においても言い得る、主流はB類坏である。その中で、5号住居跡検出の酸化焰焼成で内面黒色処理の高台付坏(第24図14)1個体が特徴的である。

以上のような土器のあり方、および土器そのものが、本調査地の北約300mに位置し、その調査報告が本書に所収されている「西根遺跡」に類似する。そこで、分類については「西根遺跡」に順じておこない、記号も同様にした。

すなわち、甕、A・C類坏については特に細分をせず、B類坏についてのみ分類した。この場合も、器形的な面については、ほとんど規格化され、その差は微少であるとみられることから、特に配慮していない。B類坏は次のように大別される。



実測可能B類坏は、第2表にあげた挿図番号5~13・15~70の65点である。65点中5~13・15~27の22点がB<sub>1</sub>類、28~70の43点はB<sub>2</sub>類である。

B<sub>1</sub>類は口径13cm~17.2cm、底径5.5cm~7.6cm、器高3.9cm~5.4cm内に分布し、口径に対する底径比率の平均は42.4、同じく器高は31を示す、体は直に外傾するものが多く、口縁も外反するものが少なく、体からそのままぬけ出るのが一般的である。総じて器肉が厚く軟質のものが多く器面もザラザラする。橙、黄橙系の色調をもつ。

B<sub>2</sub>類は口径7.2cm~10.8cm、底径3.0cm~6.0cm、器高1.6cm~2.6cm内に分布し、口径に対する底径比率の平均は50、同じく器高は23.6を示し、小型で浅く、体は外傾し口縁はそのままぬけ出るものが多い。器肉は厚く軟質で器面もあらいものが多く、色調はB<sub>1</sub>類と類似する。

以上がB<sub>1</sub>類、B<sub>2</sub>類の特徴であるが、B<sub>2</sub>類はB<sub>1</sub>類に比し相対的に口径に対する底径比率が大きく、器高比率が小さいことから、浅い皿状であることが知れる。

B類坏は、前述したように「西根遺跡」<sup>(1)</sup>のB類坏、および「鳥海B遺跡」<sup>(2)</sup>、「西根(原添下)遺跡」<sup>(3)</sup>23号住居跡等に見られるものと同類であるが、「鳥海B遺跡」<sup>(4)</sup>にあっては、口径10cm以下のB<sub>2</sub>類的なものはなく、B<sub>1</sub>類とB<sub>2</sub>類の中間的な坏(B-Ⅱ)が認められ、小型化するB類の変遷が想起されており、11世紀代を中心とした年代観を与えている。「鳥海B遺跡」<sup>(4)</sup>は本調査地の北開析谷をはさんで隣接し、その北に「西根遺跡」が所在し、後者の遺物のあり方が本

調査地と類似することは、周辺遺物、遺構のあり方を考える上で、今後の検討課題と言える。

B類坏、特にB<sub>2</sub>類の年代比定については、八重樫良宏氏が「西根遺跡」出土遺物の項で、北上市「大竹廃寺」、紫波町「樋爪館」、「平泉館」、「無量光院跡」、「毛越寺跡」、「毛越A遺跡」等にその類例を求め検討し、具体的には、多賀城研10類bに比定し、12世紀を中心とする年代観<sup>(5)</sup>を与えている。

すなわち、前述の「鳥海B遺跡」B-Ⅱ類が、B<sub>2</sub>類への変遷過程とする仮定が許されるならば、B-Ⅱ類→B<sub>2</sub>類となる。しかし、急激に変化する技術的、社会的要因がなければ、変遷過程の中で新・旧が重複し存在する期間があり得る。この観点からするなら、B<sub>2</sub>類坏は11世紀代から求められても矛盾はない。ただし、「鳥海B遺跡」ではB<sub>2</sub>類を認めない。

一方、土器全体の器種別では、甕型土器が、坏では、いわゆる須恵器（A類）内黒土師器（C類）が極めて少量で、器種は坏に、坏はB<sub>1</sub>類、B<sub>2</sub>類に限定され、A類、C類の坏はほとんど消滅する時期と推察され、多賀城研の坏の分類と編年によれば、A類坏の下限は10～11世紀境、C類坏は11世紀末とされる。<sup>(6)</sup>

以上を総合し考えるとき、非常に短絡的であるが、本調査地出土の土器は11世紀代の後半以降に求められ、主流は12世紀となると推察されるが、下限については検討を要し特定しない。

なお、白橙色を呈しB<sub>2</sub>類より軟質で稚拙なつくりで、ゆがんだ燈明皿タイプの、平泉周辺にみられる坏類と、B<sub>2</sub>類とを同類とみることに難点があることは「西根遺跡」と同様である。

注(1)・(2) 本書所収

(3) 「西根古墳と住居址」 金ヶ崎町教育委員会 昭和43年3月

(4) 本書所収「鳥海B遺跡」

(5) 本書所収「西根遺跡」 出土遺物とそのあり方に類似性があり、遺物の見方・まとめも大筋西根遺跡に順ずる。

(6) 岡田茂弘 桑原滋郎 「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」  
研究紀要Ⅰ 多賀城調査研究所

### 3 まとめ

検出された遺構・遺物からⅢ期にみることができる。

I期 段丘中央部に検出された隅丸方形の平面をもつ竪穴住居跡が構築された時期である。住居跡は北壁中央部にかまどを作り、煙道が外に出ているものである。この、かまど内とその周辺に、いずれもロクロ不使用の内面黒色処理をした土師器坏と長胴甕が共伴し、坏は桜井清彦氏の第I型式、草間俊一氏の前期、氏家和典氏の国分寺下層式と言われるものに類似し、奈良時代中頃と予察した。

これは、隣接する「西根(原添下)<sup>(1)</sup>遺跡」の竪穴住居跡に類例がみられ、本調査地の住居跡は、それら集落址や「継街道古墳」等の周辺古墳群との関連の中に位置づけられるものと考えられることができる。

Ⅱ期 段丘中央から北周縁部に沿って検出された4基の竪穴住居跡が構築された時期である。これらの住居跡は、形態、伴出遺物等で非常に共通した点が多い。

すなわち、隅丸長方形で、いずれもかまどや煙道がなく、床面に1~2カ所の焼土の堆積があり、地床炉とみられることと、伴出遺物がほとんど坏に限られている点である。坏の特色は、黄橙色等を基調とし、器肉は厚く作りは粗末である。全てロクロ使用で回転糸切り無調整の土器群で、小型皿状の坏が認められる。胆沢城構築期よりも新しく11世紀後半から12世紀の時期と推察される。

Ⅲ期 段丘北周縁部に検出された2棟の掘立柱建物が構築された時期である。その1棟は、径およそ30cmの柱による3間×2間の南面する建物であり、他の1棟は、径およそ30cm~50cmの柱痕が認められる1間四方の建物である。

この2棟の建物跡で着目される点は、2棟とも、その柱穴が、第Ⅱ期の竪穴住居跡を明らかに切り込んで構築されている点であり、時期的に後で構築されたことを意味している。しかし柱穴埋土検出の遺物は、Ⅱ期の項で述べた遺物のみ限定され、2棟とも、Ⅲ期の住居跡廃棄直後の整地層上にあることから、Ⅲ期よりおくれるが絶対年代はそんなに差のない時期に相当すると考えられる。

以上、Ⅰ~Ⅲ期が想定されるが、遺構としては、柱列、小溝、段丘崖縁辺溝、焼土遺構、鉄滓堆積地など、どの時期に属するか不明である。しかし、遺構の性格上からⅠ期のものではなく、Ⅱ・Ⅲ期のいずれかと思われる。

また、予察したように柱列が塀や垣であるとするならば、類例を求めなければ断定できないとしても、一般的集落と様相が異なり、鉄滓堆積地と関連づけると一層その感が強い。

古代末期、奥六郡を支配した在地豪族安倍氏の鳥海柵擬定地の一つとして、遺跡の立地する台地は空濠などによって区切られており、調査地北側の開析谷としたものも濠的要素をもつも

のと想定し調査したが、崩壊等があり人工的施設は確認できなかった。しかし、空濠をもつ台地は、地形的にも、一般集落以外の施設を想定するに十分であり、さらに、資料をもって検討する要があろう。

注(1) 報告書では「金ヶ崎町西根遺跡」となっているが、本書所収「西根遺跡」との混同を避けるため所在地の「原添下」を付し便宜上用いたものである。



## 岩石学的方法による分析結果

照井 一 明

### I はじめに

土器の製作地推定のため岩石学的方法で分析を行なった。

### II 資 料

### III 分析方法

- ① 資料25個をカナダバルサムで固定し、100分の3mmの厚さの薄片を各3枚ずつ作成した。
- ② 偏光顕微鏡を用い、鉱物組成、特徴、岩片の種類及び構成を調べた。
- ③ 1つの資料について500～1,000個の粒子について検討を行なった（0.05mm以下の鉱物は基質として扱った。）
- ④ 鉱物、岩種別構成から、粘土の産地の地質を推定し、製作地を考察した。

### IV 結 果

- ① 各資料の鉱物組成・岩片構成・特徴は、別表のとおりである。
- ② 灰色、緻密で硬い須恵器・土師器はかなりの高温（トリデマイト、ムライトが生ずる以上の温度）で焼かれたことが確認された。
- ③ どの土器についても、石英・斜長石の鉱物の破片結晶が大半を占め、少量の輝石・角閃石・黒雲母の他にジルコンザクロ石・リン灰石・ルチル鉄鉱を含むことがある。
- ④ 岩片としては、チャート・珪岩・ホルンフェルス・花崗岩・花崗斑岩・アプライト及び安山岩が含まれる。
- ⑤ 共存する岩片や顕微鏡下の特徴から推定すると、石英・斜長石・黒雲母・角閃石はほとんどが花崗岩起源であり、ジルコン・リン灰石なども花崗岩中によく含まれている鉱物である。これらの鉱物は全く円磨された証拠は認められない。
- ⑥ 輝石類の供給源は、多くが自形の柱状結晶であること、変質が少ないこと、脱ガラス化しない新鮮な火山ガラスと共存すること、安山岩片はかなり少ないことなどから考えると、ローム起源であることが推定される。
- ⑦ 粘土の供給源としては、チャート・ホルンフェルス・珪岩などからなる古生層と花崗岩類が分布し、さらに安山岩質のロームにおおわれる地域が推定される。
- ⑧ 肉眼的および顕微鏡の特徴から8つのタイプに区分された。

type A：灰色、緻密、硬く、石英・長石類を主とし輝石を伴う。岩片としてはチャートホルンフェルス、花崗岩を含む 資料No. 1. 4. 6. 8. 9. 11. 13. 17. 18. 22

type B：type Aに鉱物、岩片の組成が類似するが少々異なり、色や製作上の技術にも差がみられるタイプ 資料No. 3. 7. 15. 16. 19. 20. 25

type C：輝石安山岩、文象斑岩を多量に含むタイプ 資料No. 10

type D：レンガ色で軟らかく、チャート、ホルンフェルス岩片と石英・長石類より構成され、輝石を含まない。 資料No.12

type E：レンガ色、緻密、細粒で硬く、石英・長石類で構成され有色鉱物を含まないタイプ

type F：こげ茶色で花崗岩起源の石灰・長石および珪岩から構成される。 資料No.21

type G：黒雲母・角閃石・ホルンフェルス・花崗岩などから構成される。 資料No.23.24

type H：灰色、緻密、輝石、角閃石の有色鉱物と流紋岩・ホルンフェルス・チャート岩片を含む 資料No.2

各タイプの供給源は、type A、Bは古生層、花崗岩、ローム。type Cは輝石安山岩・花崗岩類。type D、E、F、Gは古生層、花崗岩。type Hは古生層、花崗岩、酸性火山岩地帯である。

type AやBのように、異なる時代及び比較的離れた地域で同類あるいは類似のものが見られることは非常に興味ある問題を含んでいる。今後さらに時間的、面的な資料の分析を行ない検討することが大切になる。

#### 《分析結果に関する若干の問題提起》

胎土分析の結果は以上のとおりである。分析の目的は古代各期の土器流通検討の基礎資料の蓄積にある。現状での即断は避け、提起された新しい問題点のみをあげておく。

(1) 素地粘土の供給源に、北上川河東の地域が想定されるものが多い。それは奥羽山脈直近の大地渡出土のものにも該当するところであった。したがって製品のみならず、素地粘土の移動の可能性をも想定する必要が出てくる。今後は北上河西の粘土の分析が不可欠となる。さらに、既検出の須恵器窯跡周辺地域の粘土の分析も当然必要である。なお高橋文明氏によると、江釣子村（北上市藤沢窯跡と同一段丘崖、その西方）にも平安時代初期（ヘラ切り・無調整）の窯跡の存在が考えられる由である。

(2) 奈良時代末期集落出土の須恵器の素地粘土の供給源も同様に想定されたところから、該期における須恵器の在地（岩手県南部）製産の可能性をも想定する必要がある。これは既に沼山源喜治氏の発表されたところでもあった。宮城県北の資料の分析・比較、窯跡そのものの深査などが必要である。

(3) 江別式土器も同様であった。この種土器の製作者に一定の定着性を想定できることとなり、従来から看取された“土着的要素”の背景説明の一つとなしえよう。土師器類と比較し、その含有物が大きく異なる事実もあり、東北地方出土の同種資料、土師器・弥生式土器などとの比較が必要となる。

(4) より基礎的作業とし、(1)で述べた粘土類の耐火性その他の須恵器の素地粘土としての適否の分析・確定を急ぐ必要もある。

(5) 分析対象器種をさらにふやす必要がある。とくに円筒埴輪などの分析も不可欠である。



末筆ではあるが試料を提供された北上市教育委員会、江刺市教育委員会、水沢市教育委員会に深甚の謝意を表す。これらの協力なしには本試みはなしえなかったであろう。

(文責 相原康二)

胎土分析用試料一覽

No	遺跡名	遺構名	種別	技法	備考
1	盛岡 太田方八丁	Rh 06 住 床	須惠器 坏	へら切りかへら削り	志和城擬定地 官衙遺跡内の住居跡
2	水沢 胆沢 城	C 区 SD190 9層下部	"	口縁部	"
3	江刺 瀬谷 子	床	"	回転糸切り、無調整	窯 跡
4	北上 藤 沢		"	"	"
5	紫波 杉 の 上		"	回転へら切り、無調整	"
6	水 沢 見 分 森		"	口縁部	"
7	" 南 矢 中	Bc 71 住	"	回転へら切り	集落跡
8	" 石 田	Da 30 住	"	口縁部	"
9	" " "	Bj 65 住 P <sub>6</sub>	"	体 部	"
10	" " "	Ch 71 遺構	江別式?	"	集落跡内の掘り込み
11	" 西 大 畑	Cj Da 27 Ib	須惠器 甗	"	集落跡内の包含層
12	" " "	Cf 53 住	土師器? "	" ロクロ	集落跡 酸化焰焼成
13	" 今 泉	Cc 09 住 埋土	須惠器 甗	"	"
14	" " "	Ai 62 住	土師器? 坏	口縁部 ロクロ	" 酸化焰焼成
15	" " "	Bd 12 住 埋	須惠器 甗	体 部	"
16	金ヶ崎町 鳥ノ海 A	5号住 床	土師器? 坏	回転糸切り、無調整	" 酸化焰焼成
17	" 鳥ノ海 B	Bg 62 住	須惠器 坏	口縁部	"
18	" 西 根	Ba 71 住 埋	"	"	"
19	" " "	Cf 03 pit	土師器?	" ロクロ	" 酸化焰焼成
20	" 上 餅 田	Bc 59 住 No28	土師器 "	丸底、ミガキ、内黒	" "
21	" " "	Cc 53 住 No19	須惠器 甗	体 部	"
22	石鳥谷 大地 渡	Cf 65 住	" 坏	口縁部	"
23	" " "	De 50 住 Q <sub>2</sub>	土師器? "	" ロクロ	" 酸化焰焼成
24	" " "	" "	土師器 "	"、ロクロ、内黒	" "
25	水 沢 袖 谷 地	Bi 15 住	須惠器 甗	体 部	"

資料分析結果

(Q:石英, Pl:斜長石, K-F:カリ長石, Bi:黒雲母, Ho:角閃石, Py:輝石)

No	遺跡	時代	遺構	種別	技法	性格	肉眼的特徴	鉱物組							備考	
								Q	Pl	K-F	Bi	Ho	Py	成岩		源岩
1	太田方八丁	平安時代(初)	Rh06住	須恵器 坏	ヘラ切り か ヘラ削り	官衙内 住居跡	(色) (組織) (鉱物) (岩片) 灰 砂質シルト岩状緻密 石英、無色鉱物 白色	+++	+	+	-	-	+	Chert ≧ Granitic Rocks (Aplite)	層岩 生崗 + 花崗 - ロ - ム (輝石安山 岩質)	Plate 1 1~4
2	胆沢城	同 上	C区 SD190 9層下部	同上	口縁部	官衙	(色) (組織) (鉱物) (岩片) 灰 緻密、硬い 多量の無色鉱物と少量 の有色鉱物を含む 白色	+++	+	+	-	+	+	Chert ≧ Hornfels ≧ Rhyolite (?)	層岩 生崗 + 花崗 + 酸性火山岩 + ロ - ム (単斜輝石 安山岩)	Plate 3 1
3	瀬谷子窯跡	平安時代		同上	回転糸切 り 無調整	窯跡	(色) (組織) (鉱物) (岩片) 灰 外側こげ茶、中央部黒 緻密、硬い 無色鉱物 > 有色鉱物 白色	+++	+	-	-	-	+	Chert ≧ Gramils	層岩 生崗 + 花崗 + ロ - ム (斜方輝石 安山岩)	Plate 2 1~4
4	藤沢窯跡	平安時代?		同上	"	同上	(色) (組織) (鉱物) (岩片) 灰 粗粒、硬い 無色 > 有色 白色	+++	+	+	-	-	+	Chert ≧ mudstone	層岩 生崗 + 花崗 + ロ - ム (斜方輝石 安山岩質)	Plate 3 2~4
5	杉の上窯跡	平安時代(初)		同上	ヘラ切り 無調整	同上	(色) (組織) (鉱物) (岩片) 灰 緻密、硬い 石英結晶がめだつ。 無色鉱物も多い。 細かい白色岩片、茶色	+++	+	+	-	-	-	Chert ≧ Quartzite	層岩 生崗 + 花崗	Plate 4 1~2
6	見分森窯跡	同 上		同上	口縁部	同上	(色) (組織) (鉱物) (岩片) 灰 緻密 無色鉱物 > 有色鉱物 白色	+++	+	+	-	-	+++	Chert ≧ Aplite (あるいは Quartzite)	層岩 生崗 + 花崗 - ロ - ム (複輝石安 山岩質)	Plate 5 1~4

No.	遺跡	時代	遺構	種別	技法	性格	肉眼的特徴	鉱物組							成岩	源	備考
								Q	Pl	K-F	Bi	Ho	Py				
7	南矢中	平安時代	Bc71住	須恵器環	回転へら切り?	集落	ネズミ (色) (組織) (鉱物) (岩片) 緻密 石英がめだつ 白色細粒岩片	+++	+++	+	+	+	+	+	Chert ▽ ガラス質安山岩	古生崗岩 + 花崗岩 + ローム (安山岩質)	Plate 6 1~4
8	石田	奈良時代(末)	Da30住	同上	口縁部	同上	淡灰 (色) (組織) (鉱物) (岩片) 細粒・緻密 石英がめだつ 少量の白色岩片	+++	+++	-	-	-	+	+	Chert ▽ Aplite あるいは Quartzite)	古生崗岩 + 花崗岩 + ローム (斜方輝石 安山岩質)	Plate 7 1~4
9	同上	平安時代(初)	Bj65住	同上	体部	同上	灰 (色) (組織) (鉱物) (岩片) 細粒・緻密 少ない 無色鉱物>有色鉱物 白色	+++	+++	-	-	-	+	+	Chert ▽ Granite Porphyry	古生崗岩 + 花崗岩 + ローム (単斜輝石 安山岩質)	Plate 4 3~4
10	同上	奈良時代?	Ch71遺構	江別式	同上	集落内の溝状遺構	表面こげ茶、中央黒 (色) (組織) (鉱物) (岩片) 細粒・緻密 肉眼的にはほとんど認められない。 少量	+++	+++	-	-	-	++	++	Chert Hornfels ▽ Pyroxene Andesite ▽ Granophyre Porphyrite	古生崗岩 + 輝石安山岩 + 花崗斑岩 + 玢岩類	Plate 8 1~4 Plate 9 1~2
11	西大畑	平安時代	CjDa27	須恵器壺	同上	遺物包含地	灰 (色) (組織) (鉱物) (岩片) 細粒・緻密・硬い 石英斑晶が自立つ 無色及び有色鉱物を含む 白色	+++	+++	-	-	-	++	++	Chert ▽ Hornfels Quartzite あるいはAplite) ▽ Pyroxene Andesite	古生崗岩 + 花崗岩 + 輝石安山岩 (及びローム)	Plate 10 1~4
12	同上	古墳時代(末)	Cf53住	土師器環?	同上	集落	レンガ色 (色) (組織) (鉱物) (岩片) 軟質 石英が認められる。 赤レンガ色、白色	+++	+++	-	-	-	-	-	Chert ▽ Hornfels	古生崗岩 + 花崗岩	Plate 9 3~4

No	遺跡	時代	遺構	種別	技法	性格	肉眼的特徴	鉱物組							成岩	源岩	備考
								Q	Pl	K-F	Bi	Ho	Py	片			
13	今泉	不明	Ca09住埋土	須恵器 甕	体部	集落	(色) 灰 (組織) 細粒・緻密 (鉱物) 無色鉱物>>有色鉱物 (岩片) 白色	++	+++	-	-	-	-	++	Chert Quartzite	古生崗岩 + 花崗岩 + ローム (斜方輝石安山岩)	Plate 11 1~2
14	同上	平安時代	Aj 62住	酸化燻 焼成 環	ロクロ 口縁部	同上	(色) レンガ色 (組織) 細粒・緻密 (鉱物) 無色鉱物のみが認められる。 (岩片) 認められない。	++	++	-	-	-	-	-	Chert	古生崗岩	Plate 11 3~4
15	同上	同上	Bd 12住	須恵器 環	体部	同上	(色) 灰 (組織) 細粒・緻密 (鉱物) 石英が多く認められる。 (岩片) 白色	+++	++	-	-	-	+	Chert Quartzite Rhyolite (?)	古生崗岩 + 花崗岩 (流紋岩) + ローム (斜方輝石安山岩質)	Plate 12 1~3	
16	鳥ノ海 A	平安時代(未?)	5号住 床面	酸化燻 焼成 環	回転糸切 り 無調整	同上	(色) 黄灰 (組織) 粗粒・軟質 (鉱物) 無色鉱物>>有色鉱物 (岩片) レンガ色が多い。	+++	++	-	-	-	+	Chert Hornfels Quartzite Andsite Porphyrite	古生崗岩 + 花崗岩 + 安山岩 + ローム (輝石安山岩質)	Plate 13 1~4	
17	鳥ノ海 B	同上	Bg62住	須恵器 環	口縁部	同上	(色) 灰 (組織) 細粒・緻密 (鉱物) 石英めだつ有色鉱物も 多い。 (岩片) 白色	+++	++	-	-	-	++	Chert Quartzite Granophyre	古生崗岩 + 花崗岩 + ローム (斜方輝石安山岩)	Plate 14 1~4	
18	西根	同上	Ba71住 埋土	同上	同上	同上	(色) 灰 (組織) 細粒・緻密・硬い (鉱物) 細粒の石英が認められる。 (岩片) 細粒の白色岩片	+++	++	-	-	-	+	Chert Quartzite Granophyre	同上	Plate 15 1~4	

No	遺跡	時代	遺構	種別	技法	性格	肉眼的特徴	鉱物組成							備考	
								Q	PI	K-F	Bi	Ho	Py	岩片		源岩
19	西根	平安時代(末?)	Cf 03 ピット	酸化焙成 焼環	クロロ 口縁部	集落内 ピット	(色) レンガ色 (組織) 粗粒、軟らかい (鉱物) 石英・長石、黒雲母及 びその他の有食鉱物 (岩片) 白色、黒色	+++	+	-	+	-	+	Pyroxene Andside Granite Chert	安山岩 + 崗生岩 花崗生層	Plate 12 4
20	上餅田	奈良時代(初?)	Bc59住 No.28	土師器 環	丸底 内黒	集落	(色) こげ茶 (組織) 粗粒、軟らかい、淘汰 不良 (鉱物) 石英を多く含む柱状の 有色鉱物が認められる。 (岩片) アズキ色、白色	+++	+	+	-	-	++	Chert Quartzite Hornfels Granite	古生層 崗生岩 + ム (輝石安山 岩質)	Plate 16 1~3
21	同上	平安時代	Cc53住 No.19	須恵器 甕	体部	同上	(色) こげ茶 (組織) 粗粒、硬い (鉱物) 無色鉱物多い (岩片) 茶色	+++	+	-	-	-	-	Quartzite	古生層 崗生岩	Plate 16 4
22	大地渡	同上	Cf 65住	須恵器 環	口縁部	同上	(色) ネズミ (組織) 細粒・緻密、硬い (鉱物) 石英めだつ、有色鉱物 を含む。 (岩片) 白色のみ	+++	+++	-	-	-	+	Chert Sandstone	古生層 崗生岩 + ム (複輝岩安 山岩)	Plate 17 1~2
23	同上	同上	De50住 Q <sub>2</sub>	酸化焙成 焼環	同上	同上	(色) 黄灰 (組織) 粗粒、硬い (鉱物) 石英多い。柱状の有色 鉱物を含む。 (岩片) micaを含む。 灰、白色をかなり含む。	+++	+++	+	+++	+++	-	Granite Hornfels	花崗生層 + ム	Plate 17 3~4 Plate 18 1~4
24	同上	同上	同上	土師器 環	クロロ 内黒	同上	(色) 黄灰 (組織) 細粒・緻密、硬い (鉱物) 石英、有色鉱物まれ (岩片) 白色	+++	+	-	-	-	-	Chert Hornfels Granite	古生層 崗生岩	Plate 19 1~4
25	袖谷地	同上	Bi 15住	須恵器 甕	体部	同上	(色) 表面灰色、中央部褐色 (組織) 緻密、不規則 (鉱物) ラミナ状 石英 無色鉱物>有色鉱物 (岩片) レンガ色及び灰褐色	+++	+++	+	-	-	+	Chert Quartzite (あるいは Aplite)	古生層 崗生岩 + ム	Plate 20 1~4

## 参考資料 1

### 岩手県南部における古代の土器群編年試案

最後に巻末に掲げた編年表の簡単な説明を行なう。編年にあたっては“組みあわせ”を重視した。それは器種・技法ともにである。また諸先学の諸業績に従ったのはもちろんである。紙数の関係からその詳細な説明は省き、結論のみを記す。

**第Ⅰ群土器** 水沢市高山TK 02住居跡、同西大畑遺跡溝跡出土資料。表では併記したが、後者が若干古くなる可能性もある。器種組成の詳細は未詳であるが、器台の不在が特徴的である。南半の塩釜式に類似しよう。

**第Ⅱ群土器** 江釣子村猫谷地遺跡の仮称Ⅰ期の住居跡群（CH 74・DA 62・C J 50住など）出土資料。これらも器種組成は未詳である。同様に南小泉式のやや古い部分に相当しよう。

**第Ⅲ群土器** 水沢市面塚S I 02住居跡、同西大畑C f 53 住居跡出土資料。後者の組成内容は比較的良好である。報告書によると、長胴甕型に近い甕も存在するらしい。南小泉式の新しい部分であろう。坏型への赤色顔料塗彩が見られる。

**第Ⅳ群土器** 水沢市膳性G 15住居跡出土資料。器種組成は不明であるが、内外面赤色顔料塗彩の丸底坏を有する。引田式的な色彩が強い。

**第Ⅴ群土器** 同膳性E 06住居跡出土資料。坏への黒色処理の開始期とも思われる。肩部無段で、胴部下半に最大径のある甕型が伴う。南半の住社式に類似する。坏体部にミガキが存在する。

**第Ⅵ群土器** 水沢市今泉・膳性、金ヶ崎町上餅田、江釣子村猫谷地の仮称Ⅱa期その他の出土資料が該当する。器種組成はきわめて豊富になる。20個体前後が一セットをなす。坏はより大型品が多い。特異な器種の須恵器を伴う。坏体部には同様にミガキが存在する。栗圀式に類似する。

**第Ⅶ群期** 甕型に肩部の無段化、底径の大型化と平坦化の傾向が現われ、坏型に小型化・無段化（沈線化）・平底化の傾向が顕著になる。甕・高坏の存在が少なくなる。二分しうる。

**Ⅶa 群** 水沢市玉貫の各住居跡、同石田C i 30 住居跡他出土資料。先の特徴は既に見えるが、坏に大型品も散見でき、かつ、須恵器が日常容器としてのセットになり切っていない段階。

**Ⅶb 群** 水沢市石田D d 03、同東大畑、江釣子村猫谷地BF 21、同鳩岡崎E a 12 住居跡、出土資料、須恵器が日常容器に組み込まれる段階。須恵器器種は遺跡毎の異同があり一様ではない。本群は宮城県糠塚例に極似し、国分寺下層式に相当し、奈良時代後半～末期を占めよう。

Ⅶa群は適当な型式名を知らないが、奈良時代前半期のものではあろう。

**第Ⅷ群期** 類例が激増する。本群にはロクロ使用土師器が共伴しはじめる。土師器は甕・坏

ともにロクロ使用と不使用のものが混在するが、その在り方は遺跡により異同がある。まず、ロクロ不使用坏がやや多く、甕はすべてロクロ不使用の長胴・球胴型からなる例がある。坏は無段・平底のロクロ不使用坏・削り調整をもつロクロ使用土師器（回転糸切り）、ヘラ切り・無調整を主とする須恵器などからなる。別の例ではロクロ不使用坏は皆無かあっても稀少で、甕にはロクロ使用のものも加わる。詳細にのべると、削り調整のあるものを主体とし、若干量の無調整のものを伴うロクロ使用土師器坏と、ヘラ切り、無調整を主体とし、若干量の削り調整（回転・手持ち）をもつもの、および糸切り・無調整の須恵器坏、ロクロ不使用甕、体部上半に叩き目とロクロ成形痕・下半に削り調整痕をもつ土師器甕、須恵器広口壺、同長頸壺、同蓋などからなる。以上の二者からは、ともに高坏・甕は消えており、逆にやや軟質の酸化焰焼成と思われる土器が加わる。これらは平安時代初頭～前半頃と思われるものである。本群以降は遺跡の性格を十分考慮した上で遺物を検討する必要があるだろう。おそらくはいくつかの類型化が可能であろう。

第IX群期 本群にはロクロ不使用土器は原則的には伴なわない。土師器坏は回転糸切り・無調整と、調整あるもの（回転・手持ち）の両者からなる。土師器長胴甕胴部の叩き目はほぼ消える。他に中型甕・埴などがある。須恵器には坏（回転糸切り・無調整のみ）・甕・蓋がある。技法の全般に“省略化”傾向が目立つ。本群には既述の酸化焰焼成と思われる土器が伴なう。<sup>(注)</sup>これについては既に見解の発表がある。以上は平安時代後半のものと思われる。

第X群土器以降については不明な点が多く詳述は省き見通しのみをのべる。第X群は所謂須恵系土器を主体的にもつグループであり、坏・台付坏・皿・台付皿・黒色処理の坏・長胴甕・小型甕・埴・耳皿などをもつ。緑釉陶器も共伴する。平安時代後～末期の11世紀代のものと思われる。

第XI群としては詳細未詳であるが、灯明皿的な部厚・粗雑な軟質土器をも有するものが該当しよう。坏・台付坏・皿・甕などからなる。金ケ崎町西根・鳥ノ海などに比較的良好な資料がある。12世紀以降のものと思われる。経筒と思われる袈裟襷文のある灰釉陶器(常滑焼)を共伴する例もある。  
(文責 相原康二)

注 本編年試案の作成にあたっては多くの先学の業績に負うところが大きい。先学の学恩に感謝する。また、考古学研究会岩手支部の例会における討議内容にも負うところが大きい。会員諸氏に深謝する。以下に編年表に用いた資料の出典を掲げる。

- I 群 ①高山遺跡、TK02住……………高山遺跡 岩手県水沢市文化財報告書第1集 高山遺跡調査会  
水沢市教育委員会 昭和53年3月  
“ ②西大畑遺跡、溝……………西大畑遺跡 岩手県文化財調査報告書第60集 東北縦貫自動車  
道関係埋蔵文化財発掘調査報告書XI 岩手県教育委員会、日本  
道路公団 昭和56年3月  
II 群 ③猫谷地遺跡……………和賀郡江釣子村猫谷地遺跡 岩手県教育委員会 昭和49年3月

実測は佐久間豊氏による。

- Ⅲ 群 ④西大畑遺跡、Cf 53 住……………注②に同じ  
“ ⑤面塚遺跡、SI 52 住……………現地説明会資料 水沢市教育委員会 昭和55年 6 月
- Ⅳ 群 ⑥膳性遺跡、G-15 住居跡 } 膳性については(財)岩手県埋蔵文化財センター高橋与右衛門氏  
Ⅴ 群 ⑦ “ E-06 “ } から種々の教示・実測図の提供をうけた。深謝する。
- Ⅵ 群 ⑧今泉遺跡、Bg 62 住他……………注②に同じ
- Ⅶa 群 ⑨石田遺跡、Ci 30 住居跡……………同第61集 同Ⅶ、 同 同  
“ ⑩水沢市玉貫遺跡の古代の資料のすべて……………(財)岩手県埋蔵文化財センター資料実現による。  
山口了紀・吉田洋氏の教示をうけた。
- Ⅶb 群 ⑪石田遺跡、Dd 03 住居跡……………注⑨に同じ
- Ⅷ 群 ⑫ “ Da 56 “ ……同上  
“ ⑬林前遺跡、SF 22 住他……………林前遺跡 岩手県水沢市文化財調査報告書第 3 集 水沢市教育  
委員会 昭和54年 3 月
- Ⅸ 群 相去遺跡Ⅰ期 } 相去遺跡については、岩手県立博物館高橋信雄氏より種々教示と実測図の  
Ⅹ 群 “ Ⅱ期 } 提供をうけた。なお、氏とは相去のみならず各群の全般にわたり意見交換  
を行ない益する所大であった。深謝する。なお、以下の論文がある。
- ⑬高橋信雄、岩手県のロクロ使用土師器について……………考古風土記第 2 号 昭和52年 4 月  
なお、⑬に対する批判的見解として
- ⑭本堂寿一、極楽寺伝座主坊跡緊急発掘調査報告書一付、寺院跡出土土器の再整理とその考察  
北上市立博物館研究報告第 3 号 昭和55年 8 月 があるが、ここでは前者にしたがっておく。  
今後の検討課題とする。
- Ⅺ群以下については、金ヶ崎町西根・鳥ノ海の個別報告中に詳細に述べられている。
- ⑮西根遺跡 } 岩手県文化財調査報告書第59集、東北縦貫自動車道関係埋蔵文  
⑯鳥ノ海A・B・C遺跡 } 化財発掘調査報告書Ⅹ 岩手県教育委員会、日本道路公団  
昭和56年 3 月

## 参考資料 2

### 岩手県南部を中心とした古代の住居跡の変遷 (第 1 図)

表記について概述する。時期区分については既述の編年表にしたがう。

第Ⅰ～Ⅳ群期 古墳時代に相当するものであるが、Ⅰ・Ⅱ群期にはカマドが付設されない。四隅の角張った均正な正方形プランと、対角線上にのり、やや中央による 4 本の支柱穴を持つ。貯蔵穴様のものは既にある。規模に異同のあるものが組みあわせになる。Ⅲ群期にはカマドが付設されはじめるが、その状況にはばらつきがあり、斉一性はない。長大な煙道は未確認である。第Ⅳ群期にはカマド本体・長い煙道部をともに備えたものが出現し始める。

以上の時期の竪穴軸方位は変化に富み、一定の傾向性は示さない。なおⅢ群期の西大畑例には支柱穴以外に西辺中央の壁直下に柱穴様の 2 ケのピットもある。

第Ⅴ・Ⅵ群期 四隅に軽い丸味をもつほぼ正方形なプランと、先と同様に対角線上にのりが如くに配置された 4 本 (稀な大規模例では 6 本以上) の支柱穴、北壁に付設されたカマドなどを有する構造をもつ。斉一性はかなり強く、構築法の確立を示すかのようである。ただし長大



な煙道の有無にはばらつきがある。明白なそれをもたない若干例も混在する事実がある。カマド焚口部には礫を門状に配置する。それより古期と思われる例では、カマド本体部内外両面にも礫を用いるものがあり、さらにカマドの対辺（多くは南壁）中央壁直下にも柱穴様のものをもつ例がある。建物主軸方位は“磁北にはほぼ一致→やや西に偏す”という変遷をたどるらしい。1辺8m～6m程度の大規模なもの、5m以下の中小規模なものがセットになる。

**VII群期** プラン、支柱穴配置などは前代に共通するが、建物主軸方向はさらに西に偏し、かつカマド袖部への土師器類（長胴甕型を主とするが、各種の器種がある）の芯としての埋置が見られはじめる。支柱穴は4本を中心とするが、6本のものもあり、さらにその存在が不明確なものも増加する。前代に比し不均整なプランをもつものが増加する。

**VIII群期以降** 集落跡と思われる遺跡の例のみをとる。変化の度合いがきわめて大きい。

(1) 柱穴配置 支柱は4本と思われるが、そのすべて、あるいは2本が壁直下に寄るものも増加する。さらに柱穴配置の判然としない例がさらに増加する。

(2) 側壁 板材を用い“腰板乃至壁風”のものをつくり出す例も増加する。その四隅には支柱様のものが伴う。

(3) カマド構築部位 北壁も継続するが、東壁、南壁などへ変化する例が圧倒的に多くなりかつ壁中央ではなく若干いずれかに偏した位置となる。江釣子村猫谷地においては南壁→東壁という変遷を示す。

カマド構築法は、本体にも板状礫を用いるもの、煙道部に甕を横転位に据えるものなども加わる。所謂くり抜き式のものが多い。

(4) （竪穴住居跡以外に）掘立柱建物・井戸・大溝も集落の構成要素に加わる例もあらわれる。

**X～XI群期** 長方形プランで、側壁直下に多々の柱穴をもつ例が増加する。カマドなど特別な施設はほとんど見られない。これらの中には中世に入るものも含まれる可能性がある。

第VIII群期以降については、遺跡の性格別の遺構の把握（構造・組みあわせ）が必要である。それは掘立柱建物についても同様である。 （文責 相原康二）

注① 高山遺跡、TK02住……高山遺跡 岩手県水沢市文化財報告書第1集 高山遺跡調査委員会、水沢市教育委員会 昭和53年3月

② 猫谷地遺跡、CH74住……猫谷地遺跡、CH74住居跡 岩手県教育委員会調査

③ 面塚遺跡、SI02住……面塚遺跡 現地説明会資料 水沢市教育委員会 昭和55年6月

④ 西大畑遺跡、CP53住……西大畑遺跡 岩手県文化財調査報告書第60集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書XI 岩手県教育委員会、日本道路公団 昭和56年3月

- ⑤ 膳性遺跡、G-15住
  - ⑥ " J-7住
  - ⑫ " F-11住
  - ⑬ " C-2-2住
  - ⑳ " G-8-1住
  - ㉓ " H-2住
  - ⑭ 玉貫遺跡、I-12-1住
  - ㉔ " C-11住
  - ⑦ 今泉遺跡、Bg62住
  - ⑧ " Bd59住
  - ⑨ " Bd03住
  - ⑩ " Bi24住
  - ⑪ " Cb24住
  - ⑮ 石田遺跡、Df59住
  - ⑯ " Dd03住
  - ⑰ " Df09住
  - ⑱ " Cb21住
  - ㉒ " Cf56住
  - ㉑ " Da56住
  - ⑱ 尻引遺跡、第6号住……
  - ㉔ 上平沢新田遺跡、Ah15…
  - ㉕ 鳥ノ海A遺跡、第2号(Aj56)
  - ㉖ " 第3号(Ag53)
  - ㉗ " 第4号(Af03)
- 膳性遺跡 現地説明会資料 (財)岩手県埋蔵文化財センター  
 昭和54・55年  
 なお、膳性遺跡については、高橋与右衛門氏より各種教示をうけた。  
 深謝する。
- 玉貫遺跡 現地説明会資料 (財)岩手県埋蔵文化財センター  
 昭和54年
- 今泉遺跡、岩手県文化財調査報告書第60集、東北縦貫自動車道関係埋  
 蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ  
 岩手県教育委員会・日本道路公団 昭和56年3月
- 石田遺跡 岩手県文化財調査報告書第61集 東北縦貫自動車道関係埋  
 蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ 岩手県教育委員会、日本道路公団  
 昭和56年3月
- 尻引遺跡 尻引遺跡調査報告書、文化財調査報告書第17集  
 北上市教育委員会 昭和52年3月
- 上平沢新田遺跡 岩手県文化財調査報告書第52集、東北縦貫自動車道  
 関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ  
 岩手県教育委員会、日本道路公団 昭和55年3月
- 鳥ノ海A遺跡 同上